F13-A64ウ
1200500761549
(ウ)

白水

荒木巍著

始

F13
A64

泉

荒木巍著

1013
194

裝幀 富本憲吉

目次

前篇

一 初めての日……一
二 一つの印象……七
三 けい子の姿……一七
四 結び目……四一
五 よろこびの日……六三
六 消えたともしび……七七
七 故郷にて……一〇一

後篇

一 再會……一〇九
二 良三の家……一二一
三 美しい心……一三一
四 ある崩し……一四五
五 心の奥……一六一
六 ふたりの寫眞……一七九
七 すきま風……二〇五
八 やけど……二二八
九 歸郷……二五一
十 觀音の像……二六七

一　初めての日

二人の運命を結びつけた最初の日。その日の印象を、良三は思ひ出すことができない。思ひ出さうにも、全く記憶がないのであつた。

お互ひの生きる道は絡み合つてほぐれず、そして、相手のいのちを育て合ひ奪ひ合ふ、それほどの間柄になつたのだから、二人の出會つた最初の日には、いかにもそれらしい深く鋭い閃めきがあつたに違ひない——そんな風に思ふ度ごとに、良三は遠い過去を振返つてみるのだ。四度、五度、六度と、振返つてみた、そして、さう云ふときは、何かのきつかけで、自分たち二人の運命が、どうにも切り離せないものだと、今更しみじみ考へた直後に起るのである。後年になるに從つて、その感情は益々強く深くなつた。そして、この前考へたときには、どこか自分の氣持に隙があつた、心の片隅では二人の運命の結び付きの深さを信じないところがあつたと云ふ風に思ひ返される。それは、つまり、時間的に前になるほど、二人の運命を彼が信じ

てゐない證據のやうなものであり、從つて、最初の出會ひの日には、まるで夫れを氣にかけてゐなかつたので、記憶にのこつてゐないのだと云ふことができよう。

確かに、さうだつた。良三には、二人がこんなに深くならうとは考へてゐなかつた。それだけに、感慨が新たに新たに起る。

良三は、けい子に二度三度ほど、同じ質問をした。

「君は、最初に會つた日のことを覺えてゐるかい。」

彼女は一瞬間、緊張した眞面目な表情になる。それから、妙な顏に崩れると、俯向いて了つたり、聲のない悲しいやうな微笑になつて、視線を靜かにそらしたりする。

けい子にも、はつきりした記憶がないのである。

けれど、自分では記憶がないと思つてゐない。今、彼に會つてゐると云ふ氣持が强いために、それに壓さへられて記憶が薄らいでゐるだけだと考へてゐる。はつきり、考へてゐないまでも、そんな風に思つてゐるらしい。やがて、彼女は思ひ付いたと云ふ表情で言ひ出す。

「熊野神社のお祭の日よ。」

「熊野神社つて、どこの？」

「あたしの家の先の、バスの曲るところね、あすこを右にづつと畠を越えて行つた森の蔭の……」

良三は彼女の家があり、又自分が嘗つて住んでゐた、ある郊外の風景をはつきり思ひ出した。沼があり、沼の周りの木の、秋になると落葉するその葉の形まで思ひ出した。

「一番小さい妹だと思つたわ——行く行くつて妹がせがむんで、一緒にお神樂を見に行つた歸りよ、今でも、はつきり憶えてゐる。昔、陸軍省へ澤庵を納めてゐたと云ふ地主さんの家の手前の畠、あすこの所で、何氣なしに振返つたら、後からあなたがいらしつて、じつとあたしを見てらしたわ。」

良三は、ああ、さうかと思つた。言はれると、成程、さう云ふことがあつたやうな氣がする。まだ大きな藁屋根の家をのこしてゐる地主の家は勿論、そのときのけい子の眼差しまで思ひ出せさうだつた。

けれど、彼女は他の場合には、彼女の家の前を通つてゐる彼と顏を合せたのが、會つた最初だと言ふ風に言ふ。前に口にした祭の日のことは全く忘れてゐる顏である。

「あなたは、あのとき、あたしを見て微笑したわ。あたしは、びつくりして、顏中紅くなつた

のを憶えてゐる。」そして、彼の微笑を見て、やさしい人らしいと思つたと云ふことは、口には出さなかつた。

良三には、記憶がない。「そんなことがあつたのかも知れぬが、忘れて了つたのかな」と考へてゐる中に、いつか彼には本當にそんなことがあつたやうな氣がしてきた。けれど、その場合にも、彼女が祭の日のことを話したのを思ひ出して、あれは、一體、どう云ふことになるのかと考へる。だが、彼女に質してみることはしないのだ。

最初の日のことについては、彼女は、もう一つを言つた。彼は、三つあると云ふことは變だと思ふが、矢張り默つてゐた。默つて、ただ聞いてゐる方が、何か氣持が良いからである。大體、彼女の述べたやうな、祭の日の島のところで會つたり、彼女の家の前で兩人の視線が出會つて、彼女がぱッと紅くなつたりするやうな、夢の多いロマンチックなものだつたとは、良三には考へられないのだ。もつと、ガサガサした現實的なものに違ひない。成程、物事がロマンチックになるのも現實的になるのも本人の心次第だから、彼女にはさう思へたのか知れぬが、少くとも、良三には少々緣遠いやうに考へられる。

それにしても、彼女には初會の記憶が三つあると云ふのは、どう云ふことだらう、矢張り、

記憶がないのだ。それに違ひない。

けれど、彼女としては、そのときそのときに出鱈目を言つてゐるのではなく、それぞれの話は、そのときそのときの彼女の眞實なのであらう。

三つの話を突きつけて、これは何んだと彼女に詰問したら、困つた顏をするだらうが、併し、彼女としては、三つそれぞれに矛盾がないのだ。成程、話の材料は違ふけれど、彼女の中にある眞實と云ふものについては、三つが矛盾もせず一つのことである。

兎に角、けい子は最初のときを記憶してゐると信じてゐる。ただ信じてゐると云ふのではなく、二人の運命がどうしても結び付かずにはゐられない、それは最初から解つてゐたので、さう云ふ氣持から、最初を記憶してると信じてゐた。彼の方では、初め二人の宿命なぞ、てんで考へてもゐなかつたのに、彼女は最初からさう云ふものとして信じてゐたのだ。

二　一つの印象

「ああ、それなら……」と彼女は、鳥渡びつくり目附になつて、良三を見た。それから、心持顔を赤らめたかと思はれるやうにして、視線を幽かに移しながら、「きつと、そのとき、」お會ひしてゐた筈よ。」

これは、ずつと後になつてからであるが、話が偶々彼の大學生時代のことになつたとき、その聯關として彼もその同人の一人であつた雜誌に及んだ。良三の高等學校の出身者を中心にした文藝同人雜誌である。彼は大學も美術史科に籍を置き、將來その方で身を立てる積りであつたし、小說戲曲の類は書く氣は毛頭ないし書けもしなかつたから、この雜誌に加つてゐることは、一見奇異であつた。けれど、器用に文藝批評に類する文章をひねくることができるところから、高等學校のときも同人雜誌の仲間に稍々無理に加入させられてゐたし、（彼は、俺は同人費を納めるだけの人間として入れられてゐるのだと、所錄はず言つてゐた。）言はば、その

延長として、加入させられてゐたのだつた。

「樹木」――それが、雑誌の名であつた。彼は、今度も同人費のために、つまり雑誌を經營して行く金のために同人にさせられてゐるだけさと放言してゐたが、同人である以上時々は短かい文章ぐらゐは書かなくてはならなかつたし、原稿を集めたり印刷所に行つたり校正をしたりする編輯事務も執らなければならなかつた。三號目か四號目ごとぐらひに當番で廻つてくるのだつたが、事務には冷淡らしい彼が案外にまめに働くのだつた。これは、高等學校のときからである。大學に這入つてからは、昔からの仲間の所には殆んど姿を現さず附合ひもせず、一體何を考へ何をしてるかも解らないほどだが、やはり雑誌の事務上の期日には、どこからどう聞き込むのか、大抵間違ひなしに現れる。

「驚くね、君には。」同人は馴れてはゐるものの、何かの拍子に、その不思議な几帳面さに感嘆すると、

「何が――」と、鳥渡空呆けるだけである。

そんな風な彼であるから、同人誘致の理由は、同人費にあるよりも、案外、そこいらの編輯事務に對する信用が暗々裡に働いてゐるかも解らない。

「樹木」の印刷所は、けい子の勤めてゐた明治印刷會であつた。明治印刷は八百人ほどの職工を擁してゐる大きな印刷會社で、普通、同人雑誌の如き頁數も部數も少ない小雑誌は扱はない。かう云ふものは、大抵小規模にカタンカタンとやつてる小さい町工場で扱ふ。同人の田中龍男が明治印刷の社長と親戚だと云ふことから、「樹木」は破格にも大印刷會社で刷られてゐたのである。

良三の話が同人雑誌のことになり、その雑誌の刷られてる印刷所に二三度行つたことに及んだとき、鳥渡びつくりして、「きつと、そのとき、お會ひしてゐた筈よ。」と言つたのである。

「どうして?」良三は、鳥渡自分の話の流に立止まつて、輕くけい子を見た。勿論、彼女が明治印刷に勤めてゐることは知つてゐたが、八百人も職工のゐる大工場の中に一人の男が這入つて行つたからと云つて、その男に、けい子が記憶をもつてゐるとは思へぬと言つた表情が淡く浮んでゐた。

「あたし、あの頃女事務員をしてゐたんですもの。……」良三のその表情に答へるやうに言つた。

「女事務員をしてゐたからつて……」

「あの玄關のところに受附があるでせう。あたしは、受附の後の席にゐたんですもの。」

彼女は印刷の注文を受附で客や會社の外交から受取つたのを、帳簿に書附けたり整理したりする役をしてゐた、そのため、入口に近い所に席を占めてゐたのである。會社に這入つてくる者は、工場の方の横門から這入る特別な人もあるが、普通はこの入口を通つて行く。勿論、良三もここを通つたらうし、最初のときは受附に立寄つて、何か口をきいたに相違ないから、二人が會つたと想像されると言ふのだつた。そして、彼女は今でもさうであるが、その頃も精勤者だから、その席にゐなかつたと云ふことはないと附足した。

「さうだね。」と良三は肯いた。心の片隅では、併し、用を足しに立上ることもあるから、彼女がいつもその席にゐるとは限らぬと思つたが、それは話の本流からそれた些末なことで、話の面白さをぶち壊すことになるので、直ぐと出てきた小さい疑ひを押へて了つた。そして、

「そのとき會つてた筈だね。すると、二人が會つたそもそもの最初は、そのときと云ふことになるね」と續けた。

「さう。」彼女は低い聲で、彼が何か言つたから、ただそれを受答へると言ふだけの氣のない返事をした。彼女は自分の想ひの中に捉はれてゐたのである、今は同じ會社の女工になつてゐ

るが、女事務員として、椅子に坐つてゐた自分の十七八頃の姿、いや、それよりも、若い角帽を被つた良三が――けれども、良三は大學時代、角帽を被るのを嫌つて殆んど黒のソフトを被つてゐたのだが――その良三が受附の前に現れたとき、自分はどんな様子でゐたらうか。見たことは見たらうか。それとも、事務が輻輳して、首を帳簿と傳票と右ひだりに振り一生懸命書き込んで、目をはなせなかつたのだらうか。

けれど、彼が口にする片言隻句でも、――それどころか、一寸した目の動き手の振り方だけにも、いちいち忠實に答へずにはゐられないほど從順なけい子は、彼の言葉に對して肯き方が足りなかつたのに思ひ當つた。そして自分の捉はれてる想ひを破つて、

「さうですわ、本當に、それが、そもそもの初めね。」と彼の言つた言葉と同じ夫れを繰返して微笑した。

この話ね、もつと早く、――二人が會ひ始めた頃すでに交されてゐねばならぬ筈である。けれど、それが、そのときまで話されなかつたのである。前述の如く彼は自分の同人雜誌に興味をもつてゐなかつたので、取立てて話題にする氣がなかつたためと、隨分長い間、彼女の勤めてゐるところが、明治印刷だと云ふことを知らなかつたためである。彼女の勤先を知らないと

は、氣持の上の無責任さを現してゐるが、その通り彼は無責任だと言へるであらう。成程、仕事は印刷だと云ふことだけは知つてゐた。又、場所は小石川だと云ふことも知つてゐた。けれど、彼女について興味のあるのは、彼女の肉體や聲や表情であつて、從つてる仕事などは彼女の本質とは何のつながりもない、むしろ自分の彼女に對する幻想を失はせるとでも言つた風に、良三は彼女の仕事を心に留めなかつた。そんな風だつたので、やがて、勤先の名が自づと解つたときも、今度は、同人雜誌の印刷所としての印象と結びつかなかつた。そして、二人の間になんの會話もなく今日に至つたのである。

良三は一人のとき何かの拍子に、その日の二人の會話を思ひ出した。彼女の新しい發見に對して、「さうだね。」と肯き「すると、兩人が會つたそもそもの最初は、そのときと云ふことになるね。」と烏渡思ひ入れよろしく言つたものの、以前ほど冷淡ではないが、大して心にとめてゐるのではなかつた。けれど、今になつて、胸の奥に泌み込むものがある、たしかに會つたのであらう。すると、彼はかすかな記憶を呼起して、明治印刷の玄關——眞鍮の金具がぴかぴか光つてる大きな自在扉やそれを押し開けるときの壓力や受附の白い大理石のスタンドなどの樣子が目の前に浮んだ。そのとき、彼女は書き物の上に自を落してゐてこちらを見なかつた

し、彼も受附人の奥まで目を走らせなかつたかも知れぬが、少くとも、彼女の體から二間もはなれぬ所に自分は立つてゐたのだ。良三は、そこに思ひ至つたとき、同時に、運命の不思議さと運命の皮肉を感じた。そんなに近くに、結び付く二人を置いときながら、併も、少しも氣付かせないで了ふのだから。

けれど、彼は印象にのこつてゐない無形のことを長く思ひつゞけるほどロマンテイツクにはできてゐない、直ぐと、他の思ひに移つて行つた。

一體、自分の心にのこつてるけい子の最初の姿は何んだらうと考へてみた。勿論、明治印刷のそれではないし、又、祭の日のことにも、彼女の家のところで自分が微笑し彼女が赤くなつたことにも何等印象が無かつた。彼女に言はれたときには、烏渡そのやうなことがあつた錯覺を起したけれど。考へてゐる中に、次の二つのことが、頭に浮んできた。一つは、彼女の家の前に見かけた姿である。彼女の家はバスが通る度に埃の舞上る郊外の狹い道路に面してゐた黄や赤や綠の駄菓子をいれた硝子箱やミカン水の細長い壜や上からさがつてる福引の袋などが佗しげにならんでゐる二間間口の小さい駄菓子屋で、そこの前には、大抵子供が集つてゐて、緣臺の上に坐つたり腰かけたり土の上に白墨や蠟石で描いたり國取りをしたり、或ひは女の子が

鳥飛びをしたりしてゐた。さう云ふ子供たちの動きのために、家の中はよく見えないのであるが、ある日子供たちの坊主頭やお河童頭が動いてゐる間を通して店の敷居の所に若い娘の立つてゐるのを見た記憶がある。併し、彼女の話したやうな、こちらを見て顔を赤くした姿ではなかつた。子供に何か話しかけてゐるやうでもありさうでないやうに思へる體の恰好には、どことなく若い男の彼が歩いてゐるのを意識してゐるやうなこないしが見えないでもなかつたが、併し、目は決して彼を見てゐなかつた。勿論、顔を赤めてなぞはゐなかつた。

もう一つは、通勤の歸りらしい彼女に、路上で會つたことである。粗末な銘仙かメリンスの着物を着、辨當や何かを包んだ赤く俗つぽい色の風呂敷の包みを片手に胸元で抱いてゐた。歸りならば、恐らく夕方である筈だが、のこつてる印象では、明るいので、日の長い春か夏のことでもあつたらうか。

彼女の全體の印象は、どことなく派手なものであつた。派手と言つても、着物の柄や持物や化粧法なぞから來るのではなく、若さが體中に燃え上つて、それが體や手足や顔に否應なしに滲めき出たと云つた派手さである。そして、それが男の心に喰ひ入つてくる。けれど、同じ艶な魅力でも中年の女のやうな脂切つたものではなく、十七八歳の女のもつ清純さが匂つて居

り、而も春を初めて知つた烈しい艶々しさが年齢を乘越えて、「女」としての魅力を烈しく發散してゐる。丁度、燐寸の光りはすつた直後の燦めきが一番强烈なのに似てゐる。後になつて、背は大して高くないと知つたのだが、その早春の燦めきのためにのびのびと高く見え、肉附も何か暖かさをもつた大らかなものに思へた。又、朝そこから出、夕方そこに戻る貧しい住居の佗びしさを消す明るさをそれが與へて居り、前述のやうな粗末な銘仙やメリンスの着物なぞを輕いものにするだけの强さがあつた。言つてみれば、青春の美しい豊かさが、貧しい生活や粗末な衣服を人々に考へ付かせぬのである。

たしかに、その魅力は街を歩いてゐる娘たちの中でも目立つてゐた。良三も、どれほどの美しい目鼻立ちをしてゐるかと云ふ細かい觀察をする前に、その魅力に心牽かれた、と言つて、彼がいつまでも心牽かれてゐるのではなかつた。會つたときには、若者らしく胸に强く來るものがあるが、擦違ふと、直ぐ忘れて了ふ程度である。けれど、下宿の狹い室の中で、所在なくぼんやりしてゐるときなぞ、ふと彼女のことを思ひ出すことがあつた。その場合も、一向に彼女の顔は浮び上つて來ず、ただ體から發散してる魅力だけが思ひ出されるのである。

だが、――どんな場合だつたらうか、路上で見かけたときか、下宿でぼんやり考へてゐたと

きか、なんの前觸れもなく不意にこんなことを考へた。あんなに魅力の强い娘だから、誰かが誘惑をしはすまいか、うつかりすると、すでに……。兎に角、あのまま誰も手出しをせずに放つて置く筈はない。かう考へると、彼は自分のものが（自分のものなぞと思ふのは妙なことだが）强奪されるやうな不安が胸に襲つてきた。そして、じつとしてゐられぬ焦立さを感じた。

勿論、こんな感情は、少し經つて跡方もなく消えたけれど。

三　けい子の姿

二人はいつからともなく目禮をするやうになつた。

どんなきつかけから、さうなつたか、二人ともはつきり憶えてゐない。二度か三度、路上や彼女の家の前で顏を見合せたが、あるとき氣づいてみれば、目禮を交し合ふ二人になつてゐるのである。

けれど、それだけである。話すどころか、ただの一言も聲をかけ合ふこともなかつた。けい子が派手な感じに思へるほどの生氣あふれた外觀に似合はず、おとなしい靜かな挨拶をすれば、良三は學生らしい簡單さでぴよこんと頭を下げるだけである。むしろ、挨拶をするやうになつてからは、體中をじつと見るやうな良三の目附が遠慮深くなり、それが反射して、けい子も目を下に落した控へ目になつた。それまでの彼女の體付には、彼に誘ひかけてでもくるやうな開け擴げた感じがあつたし、こちらが見れば彼女も凝つと見返すやうな大膽なところがあつ

たのである。二人が挨拶をするやうになつて遂に控へ目になつたことは、良三には一見近づいたやうに思へながら實は遠々しくなつたやうな氣がした。

だが、けい子は單純だつた。見合つてだけゐたのが挨拶するやうになつたと云ふ事態が示すそのまゝに、二人の間の近づきが一層强くなつたと考へた。そして、それを考へると、うれしくなつた。いや、むしろ、見合つてだけゐたときは、自分の對象とまで考へてゐなかつたのが、かうなると共に、急に自分の前に現れた男として考へられ始めたのであらう。尤も、初めて顏を合せたときから、二人の運命を信じてゐたもののやうに思ひ込んでゐるけれど。

良三の方では會つたときこつきりで忘れて了ふに反して、けい子は時々ふと彼のことを考へることがある。事務所の机の上で傳票を書込んでゐるとき、ふと若い男の聲がしたりすると、鳥渡ペンが止つて了ふことがある。その短かい時間、彼の學生服の姿が彼女の頭の中に浮んでゐる。併し彼の聲をまだ一度も聞いたことのないのに氣付いて、一寸悲しいやうな氣持になつたりする。又、今まで全く知らなかつたのだが、男の聲に、味はひのあるのに思ひ當つたりもする。あるときは、勤先から市電の停留所までの途中にある劍道の道場からひびいてくる竹刀とかけ聲とをふと耳にすると同時に、彼のことを思ひ出したこともあつた。聲とか音響とかから男のことを考へるのは、どう云ふことなのか解らなかつたが、そんなことが時々あつた。

けい子は思ひ出すと樂しかつた。何か自分の前途が明るく豐かに思へた。今まで同じ會社の職工が袂の中に手紙をいれたり事務所の中年の男がお茶をのみに連れて行つて變な目附をしたり、歸り道を學生らしい男につけられ途に呼びとめられて誘ひかけられたりしたが、そのときの嫌らしい思ひは、同じ男でありながら、良三には少しも感じなかつた。いや、全く逆だつた。

良三の下宿してゐる家は、彼女の家からほんの近いところにある。前のバスの通る道を家數にして五六軒南に行つた先を右に折れて小路に這入り、空地を通つて、又、右に折れた三軒目の家で、大體、彼女の家の西にあたる裏になつてゐる。この附近は、まだ昔の武藏野の風情をのこしてゐた。杉林があつたり櫟林があつたり、古い小さな沼に小草が浮んでゐたりする。五六年前、急にあちこちに五六軒、十二三軒と固まつて新築の家ができたが、どう云ふ加減か、それきりぱたりと止つて了つて、新しい家はできずに、相變らず麥畑や大根畑がつづいてゐる。

良三の下宿は主人が稅務署に出てゐて、主婦が産婆だつた。塀にドタンの三尺四方の看板が

あり、門の上には赤い電燈が付いてゐる。恐らく、この附近の急激な發展を豫想して無理をして家を建てたらしいが、産婆の方の商賣は見込ちがひだつた。姙婦をあづかる室も二間ほどあるが、あきらめたのかその一室を下宿にすることにした。良三がゐるのはその室である。

吉井と云ふその産婆の家に學生がゐることは、けい子は前から知つてゐる。末の妹二人はこの土地に來てから生れ、吉井産婆に取上げられたのだが、そんな關係がなくても、狹い近所のことなので、家の話題には上つてゐた。けれど、それが良三だと知つたのは、ほんの最近のことである。と云つて、彼が家に這入るところを見たのでも吉井産婆と一緒に歩いてるのに會つたのでもない。この附近には吉井産婆と同じやうに學生を置いてる家が二三軒あるので、それと解りさうもない筈だが、けい子にはあの人は吉井産婆の家にゐるやうに感じられた。その感じが強くなつたので、ある日、母親に聞いてみた。聞くときにためらつたり感情を隱さうと努力したりする氣配はない。すらすらと蟠りなく聞くのである。

「吉井さんにゐる學生さんて、どんな人?」

母親は問ひ方が唐突なので、鳥渡聞きわけ難かつたらしく、彼女の顏を見ただけだつたが、二度同じことを言はれると、

一何かと思つた。」と福引袋の糸を天井から下つた針金に通しつつ「この前をよく通るぢやないか。ひよろひよろつと背のとても高い人。痩せて青い顏してるけど、どこか悪いんぢやないかね。」

ああ、矢張りさうだとけい子は思つた。

母のおときは、「あの學生さんは、埼玉の人ださうだよ。」と附足したが、けい子は母親があの人のことを深く知つてゐるのに驚いた。同時に、良三と自分との間の道が急に廣く開けたやうな氣もした。おときは吉井産婆との立話で知つてるのであらう。けれど、けい子はあの人の故郷が埼玉と宙で考へてみようとしたが、何も浮んでは來なかつた。一度も埼玉には行つたことがないので、齒痒いくらゐ、何も浮んで來ないのである。浮んで來ないために、良三との距離が遠くなつたやうな氣がし、彼の姿が自分の空想の中から何かに吸ひとられるやうに消えて了ふ恐れを感じた。

そのことがあつてから、彼女は吉井産婆の家が時々氣にかかつた。勿論、家の前まで行つてみようとは考へなかつたが、氣にかかるのである。事に依ると、自家の裏の縁側に立つて、吉井産婆の家の屋根が見えやしないかと思ふ、あの人の住んでゐる屋根が。それは、大抵、會社

で事務をとつてゐるときとか、休憩時間に屋上に一人で登つて行つたときとかに、ひよいと考へつく。そして、何となく心の底の方からほのぼのと樂しくなる。けれど、勤めから自家に戻ると、二疊と四疊半二つの小さな家の中に母の他に（父は田舍にこ一二年行つてゐる。）小さい兄弟姉妹が彼女を合せて七人もごちやごちやゐてその夕食の支度をしてやらねばならず、その上、店の前では近所の子供が泣いたり喚いたり駄菓子を買ひに來たりするので、その喧騒のために、つい忘れて了ふ。今日こそ歸つたら見よう、さう思ひながら、矢張り忘れて了ふ。

ある日、三つの末の妹を抱きながら、ふと思ひ付いて緣側に出てみた。勤から戻つての時間なので、七時近かつたが、春も深い頃なので、日が長くなつてゐて、まだ外は明るかつた。裏の家には大きな檎の木と松とが高く立つてゐたが、その先は空地になつてゐるので、その木々と裏の家の間に三つ四つの屋根が見えた。

「見えたわ。あの家だわ。」けい子は、喜びの餘り、心の中に叫んだ。それは、彼女の家の緣側からは稍々左寄りで、丸く刈り込んだ檎の木の、やはり左に顔を出してゐる屋根である。けれど、心の中で叫んだ次の瞬間に、あれではないやうな疑ひがふと涌いた。それよりも、檎と松の間に僅かに見える二階家の方が、さうらしく思へ、又、それでもないやうにも思ひ返されたりした。

けい子は、はつきり見定めるために、吉井產婆の家の屋根の恰好を思ひ浮べてみた。けれど、これまで、特別見る積りで見たことがなかつたので、思ひ出せる筈はない。

だがじつと見てゐる中に、矢張り、最初さうだと思つたのが、吉井產婆の家に相違ないと考へられてきた。方角から言つても。距離から言つても、又二間の二階の大きさから言つても、さうに違ひない。考へてゐる中に、前に漠然と見た家の恰好の記憶が甦つてくるやうな氣がし、たしかにあれに相違ないと考へられた。

「ああ、矢張り、見える。——どうして今まで、あの家が見えることに氣付かなかつたのだろう。」心が明るく暖かくなるやうな喜びの中から、今まで氣付かずにゐた自分を不思議に思つたりした。「人つて、そんなものかも知れないわ。」十七と云ふ年にしては大人びて、そんな風に考へたりしたが、さう考へるのも明るい心から出てゐた。

而も、吉井の家は屋根が見えるだけではなく、二階の室の硝子戸の上部までが見えた。二階の二つある室のどちらに彼がゐるのか解らぬが、うれしくなつてるけい子には、一途に、あの硝子戸の室があの人のだと云ふ風に考へられた。今は硝子戸は閉されたままである。それが、

けい子には鳥渡淋しい思ひだが、兎に角、彼の住んでる家の屋根が見えるばかりか硝子戸までが見えることは、ひどく彼女を喜ばした。

――あの人にあなたのお部屋が見えますよと言つたら、どんな顔をなさるだらう。けい子は、そのときのびつくりする彼の表情を空想してみると愉快になつて、笑ひ出したくなつた。けれど、次の瞬間、自分はそんなことを話せるどころか、まだ一言も口を利いたことがないし、名字すら知らないのだと思ふと淋しくなつた。

けい子は、又、「ひよろひよろと背のとても高い人、痩せて青い顔してるけど、どこか悪いんぢやないかね。」と良三について言つた母の言葉を時々反趨してみた。彼が自家の前を通るのを見かけるぐらゐのことで、母がそのやうにはつきりした觀察をしてゐるのが不思議に思はれた。少くとも五六度は會つた筈だし。彼に異性らしい感情を抱いてるのに、ではどんな姿や顔かたちかと問はれたら忽ち窮して了ふのである。漠然と、目の前に浮び上がるものはあるのだが、どうしても、はつきりした形にはならない。母の觀察が不思議に思はれると共に、かう云ふ自分も不思議に思はれた。往復の電車の中で、一度きり見ない人のことでもはつきり思ひ浮べることができるし、假に會社の何々さんを思ひ出してみようとすると、それもで

きる。それなのに、あの人の姿だけはぼんやりしてゐる。成程、母の言ふやうに、背の高い痩せた姿だけは目の前に浮び上つてくる。だが、それだけである。歩く恰好には印象があるが、さて、どんな肩付か、――まして、顔などは少しも解つてゐない。

母の「痩せて青い顔をしてるけど」と云ふ言葉を考へると、今まで被つてゐた布を急にばつと取除けたやうに、まるで稻妻みたいに良三の顔の印象が彼女の目の前に閃めいた。――ああ、矢張り、記憶にはあつたのだ、ただ、何かで被はれてゐるのだと思つたが、その印象は閃めきだけで、もう消えてゐた。

その閃めきが教へてくれたものは、母の觀察とは違ふものだつた。成程、「痩せて青い顔をしてる」けれど、「どこか悪いんぢやないかね。」とは思つたこともない。あの人が病氣なぞとは考へられもしない。同じ人間でゐながら、母と自分とでは全く見當のちがつた見方考へ方をしてるのに驚く。大體、彼女には良三の顔を痩せて青いと云ふ風に病的に思つてみたことはない。稍々長顔で頬はこけてゐるが、その痩せてるのも顔色の良くないのも、體が弱いためではなく、彼女の言葉で言へば「勉强」をし過ぎてるせゐなのだ。日本語で書かれた本は勿論、英語で書かれた本を澤山讀んだり、（彼女は、夜間女學校の三年まで行つたので、英語の初歩

を學んだだけに、英語が直ぐ頭に來、それがひどく難しく思へる。）或ひは、自分が想像もできないほどの深刻で困難なことを考へ耽つたりしたせゐなのだ。あの恐いやうな、氣難しいやうな目を見れば解る。あの目は、本當に恐いのでも氣難しいのでもない。あの人が自分に氣付かずにゐるときは恐らく氣難しい目をしてるけれど、自分を認めた瞬間に少々顏を紅めて、若者らしい生々した、そして優しい目になるではないか。あの目は、恐いのでも氣難しいのでもなく、「勉强」のためにああなつたのだ。

けい子は小學校のとき特別出來ると云ふ生徒ではなかつた。成績は中より少々上の程度である。又、特に好きな學科があると云ふのでもなし、學問が好きだと言ふのでもなかつた。從つて、夜間女學校に行くやうになつたのは、自分から進んでしたのではない。むしろ、すすめられても最初は澁つてゐるやうだつたが、いつかその氣になつたのである。すすめたのは、從兄の安井十吉だつた。十吉は彼女の母の兄の長男で、自分も晝働きながら、夜間中學を出て更に夜間の電機學校の高等科を修了してゐた。彼はけい子にすすめると共に、けい子の兩親にもすすめた。兩親は大體學問なぞに頭の向かない人だつたから、子供澤山の貧乏暮しと父親の病弱を理由にして十吉の言ふことなぞまるで耳に入れなかつた。

「女に學問させたつて、どうなるね、どうせ良いことはねえ。」氣の弱い父の辰次郎は低い聲で自分のあぐらをかいた膝の上に言葉を落としてゐた。

辰次郎は大體、大工だつたが、この五六年以來神經痛を病んで本職を止め、近くの養鷄場の手傳ひなぞに行つてゐた。これは殆んど遊び半分で、又痛みがはげしいとよく休むので、從つて、いくらの收入にもならない。僅かにおときが駄菓子をひさいだり袋貼りの內職などの收入と合せて、親子八人がかつかつ暮らしてゐるのである。けれど、今こそかつかつ暮してゐるが、辰次郎の病氣は次第に重つてくるらしい樣子があるので、僅かながら這入つて來た彼の收入が全く杜絕して了ふかも知れない。薄氷を履むやうな毎日である。ただ、幾分でも救ひになるのは、長女のけい子がこの三月に小學校を卒業すると云ふことだつた。彼女を早速工場に出したら、日給六十錢として殘業を入れれば月に二十二三圓にならうと云ふ目當である。

ところが、おときはその頃、自分の腹に子が宿つてゐることに氣付いた。こんな貧乏暮しにとつては、全く泣きッ面に蜂である。一人分だけ重味が加はる上、自分の體も思ふやうに動けなくなる。かうなつては、けい子は否が應でも働かせないわけに行かない。

「けい子が働けなくなるつて言ふんぢやないんだよ。俺と同じだ。晝間働いて、夜だけ學校に

行く。」十吉は解りの悪い辰次郎に二度も三度も繰返した。

十吉と云ふ見本を目の前に見ながら、矢弱り、辰次郎にもおときにも、はつきり呑み込めなかつた。

暫らく考へた末、辰次郎は

「お前は男だけど、けい子は女の子だからな。」

辰次郎が深く考へ込んだやうなので、今度は解つてくれて良い返事をするかと思へば、又振出しに戻つたやうな歯痒ゆい言葉なので十吉も鳥渡直ぐに聲が出なかつた。やつと、

「同じことぢやないか。女だつて、男だつて。」と言ひ、もう解らず屋の辰次郎はそのままにして、おときに顔を向けた。「叔母さん、どうなんだい。けい子の將來を思つてみる氣にやなれないかい。俺はね、けい子は見所があると思ふから、上の學校へ上げとけと言ふんだよ。今ぢや、小學校きりではこれつて所へ嫁に行けやしねえぜ。」

けれど、辰次郎もおときも、娘の嫁入りなぞと云ふ先のことまで考へてる心の餘裕は全くない。娘の嫁入なぞとは別世界のことで、むしろ、そんな話を聞くのは奇異にすら思へる。

「けど、けい子は體が餘り丈夫ぢやないんでね。畫、働いた上、夜學校へ行つたら體を終しちまふ。」おときは、調子の抜けた聲でそんなことを言つた。

十吉は、それ以上說き伏せにかかる氣持はなかつたので止めた。けれど、けい子の小學校の卒業期が近づくと、矢張り氣にかかつて、おときの顏を見ると、二度ほどそのことに觸れた。

すると、三度目のとき、おときは、

「夜の學校の始まる時間は何時かえ？——五時半。すると、芝まで行くにや、四時ぐらゐに仕事を止さにやならないが、そんなに早く歸してくれる仕事があるかえ。」と十吉の顏を見た。

「あるとも。」と勢よく彼は答へた。答へながら、おときが自分の方からこの問題で質問したのは始めてだし、又、たずねる語勢が前のやうな投げやりでなく、彼女の心持の動いてゐるのが解るので、おときの遂つてきたのを十吉は感じた。そして、彼に今言はれて急に心持が動き出したのではなく、この問題を少しは親身に考へ始めてゐたらしいとも思つた。

おときは、昔は着痩せの方で外からはすらりと良い姿に見えたけれど、仲々ふつくらした肉附だし、細面に大きな目の美しい顏だつた。それが、近年めつきり貧乏と多産とでやつれ、頰はこけ、着痩せではなく、本當に體自體が痩せて了つて、髪の毛もぐるぐる頭の後で捲いたまでおくれ毛が浮いてゐたり襟元も乳をのませたままのはだけた姿だつた。けれど、そんな恰

好の中にも、逆境に壓しつぶされたままではなく、絶えず抵抗し戰つてゐると云つた生氣がほの見える。生來の勝氣のせゐだらうか。勝氣なばかりでなく、頭が敏速に動く一面もあつた。さう云ふ點、辰次郎よりは物解りがよい場合がある。

この物解りの良さも逆境のために吹きちぎられ曇らされることの方が多かつたが、今、何かの拍子に戻つてきたものらしかつた。

そして、先づ、おときが、けい子を夜學校にやつても惡くはないと云ふ半分承知した返事を十吉に與へたのだつた。

母親が承知したとなると、はつきりしなかつたけい子も、「行つても良いわ」と云ふ風な他人まかせではあるが、兎に角行く氣になつた。

十吉は、さう云ふ返事の仕方が氣になつたので、

「お前、自分のことだよ。自分から勇んで行く氣でなくちや、長續きはしないよ。本當に行く氣なのかい。」

「ええ、本當に行く氣。女學校に行けるんだから、うれしい。」けい子は、今度は父親似の丸い顏に笑ひを浮べて元氣な聲を出した。

併し、矢張り十吉にははつきり解りかねた。元氣な聲を出し笑顏になつたけれど、十吉の言葉に引擦られて少女らしい浮々した氣持になつたのかも知れぬと思つたからである。ずづと後になつて、十吉はあのときの本當の氣持を彼女に聞いてみた。

「さう云ふ風に決つたときは、本當にうれしかつたのよ。けど、それまでは、どうでも良いと思つてたの。」

「でも、お前自身の問題ぢやないか。」

「だつて、あたし一人が行く氣になつたつて仕方がないぢやないの。お父さんもありお母さんもあり、大勢弟や妹があるんですもの。自分一人が無理をして良い子になつたつて、面白くないわ。みんなも面白くないけど、あたし自身だつて面白くないわ。」そして、鳥渡淋しい微笑をうかべた。

おときの心配してゐた早歸りの仕事は案ずるより産むが易く直ぐ見付かつた。而も自家から五六町きりない近所だつた。それは、小さい製本屋である。彼女の家にもう一ト間つけた程度の小さな家の中で三四人の通ひの女工が主人夫婦と一緒に働いてゐる。大きな印刷所の請負仕事をしてゐるのである。終業は、午後五時で、時々急の仕事を持込まれる關係から殘業がある

のだが、けい子は特別にしよう、最初の中は見習だし、その後も出來高拂ひにするから構はないとのことだつた。

初めは、主人夫婦や他の女工の言はれるままに働いて、言はば他人の殘りや半端仕事をやらされてゐたが、その中に、オリヤと云ふ八頁刷つてある紙を四つ折にする仕事を分擔させられた。臺の上の印刷紙の山を上から一枚々々折目をつけてはさつと手早く棒でのして折るのである。最初の内は仲々思ふやうに早く行かないし、うつかりすると、曲つたり皺ができたりした。本の頁の中に出つてたり皺になつたりするのがあるのは、このせゐだよと、胃弱らしい青い顏の主人が説明してくれた。次第に、早くなつたが、矢張り他の女工のやうには、どうしてもゆかない。年齢や年期の關係もあるが、それよりも、大體けい子は何事によらず念をいれるので仕事がおそいのである。幼いときから着物一つ着るにもおそかつた。着物の襟は同じ角度で胸元にぴつたりしてゐなければならぬし、裾前に左右が丁度重なつてゐなければ氣が濟まない。そのために幾度も襟元に手をやつたり上體を屈めて裾をのぞかずにはゐられない。又、三尺帶はまいて結び目の後のところが左右同じ長さになつてゐなければ氣持が惡いので、先づ帶を同じ長さに二つに折り、その折目を腹部にあてて左右を後に廻すと云ふ風にする。更に蝶

結びの膨らみも端も同じでなければ氣持が落著かない。併しかう云ふ所作が神經質には見えず、そのやうに念を入れた中に落著く彼女の安らかさが美しく、ほのぼのと感じられる。

柱時計が鈍い音でボーン、ボーンと午後四時をうつと、彼女は自分の仕事を取付づけ、胃弱の主人の體臭と同じやうな變な臭ひのする薄暗いその家を出て郊外電車の停留場に向ふ。（夕食は朝持つて出た二つの辨當の中の一つを學校に着いてから食べることにしてゐる。）

通學は、十吉が内心案じてゐたのに反して、一日も休まずに通つた。雨が降つても、風が吹き荒れても、午後四時になると、胃弱の薄暗い家を出て學校に向ふのである。

あるとき、十吉が訊いてみた。

「學校は面白いか。」

彼女は笑つてゐた。

「ぢや、面白いんだな。」

「面白い——なんて。」

一日も缺席なしに通つてゐると聞いて安心してゐた十吉は、この一語で烏渡混亂した。では、嫌々通つてゐるのか。けれど、穏かに微笑してるけい子の顏を見てゐると、決して厭やと

云ふではないとも思つた。

けい子にとつては、確かに嫌ひでも好きでもなかつた。さして、面白いなぞと云ふ言葉とは關係がなかつた。夜間女學校なので殆んど働いてゐる者が多かつた。事務員、女中、女給仕、看護婦見習、女店員、その中で、面白いと云へば、そんな女たちが休時間に話合ふ世間話や悪口の類らしいが、けい子には餘り面白いとは思へなかつた。十吉があんなにまで良い所のやうに言つてゐた女學校と云ふものをその人たちが汚してゐるやうな氣がしたり、女學校と云ふものが案外なところだと思つたりした。一つには、同級生と言つても、働いてる人たちなので皆年を喰つてゐて中には三十過ぎた者もゐると云ふ風なので、十四になつたばかりの彼女には彼女らの話が別の世界のことのやうにひびくのである。

ただ、この學校に通ふやうになつてから、漠然たる滿足感があつた。小學校のときとはちがふ氣持があつた。英語とか代數とか、小學校では教はらなかつた、言はば高級な學問とでも言ふものを學んでゐたり、同じ國語でも小學校のときとは程度も調子もちがふ大人びたものを學んでゐると云つたところから來てゐるのか、或ひは、女學校に通ふことが將來の明るさを暗示してゐてくれるせゐか、彼女にははつきり解らない。それどころか、彼女はそんな風に考へて

みようとしたことすらない。ただ、なんとなく滿足感があつた。あの薄暗い埃のもやもやした製本屋の室の中で毎日同じやうな紙を折りつゞけるだけの生活ではないと云ふ滿足感なのである。

一年を修了し二年を修了し、三年を終らうとしたある冬の日、彼女は風邪をひいた。この三年間、風邪をひいて合計五六日休んだことがある。それきりの精勤振りだつたし、母親の心配してゐた體の弱さに係らず案外病氣をしなかつたのである。ところが、その風邪を押して二日ばかり通學する中に、急に肺炎になつて了つた。幸に二日ほどで危險な峠を越して、流石に底から湧き上る成長期の強さのせゐか、忽ち回復した。製本屋に通ひ出すことになつた。夜間女學校にも通ふことになつた。すると、急におときが女學校はこの際止しなさい、夜、學校へ行くから疲勞が出て病氣になつたのだ、これ以上つゞけたら肺病になるだらう、その上、月謝だの本だのつて、えらい入費だ、これを自家に入れてくれたら、どんなに助かるか知れないと言ひ出した。

けい子は久振りの學校はどんなだらう、みなはどんな顔をして迎へるだらう、先生の顔が變つて見えないかと、いろいろ空想したり前の日から時間割に合せて教科書を下調べしたり手さ

げ鞄に詰めたりした。そんな風に、一週間ほどの缺席だつたが長く休んだやうな氣がして興味を起してゐるところだつたので、彼女はこの思ひがけない母の言葉に暫らくぼかんとして相手の顏を見守つてゐた。

「なに、あたしの顏をいつまでも見てるのさ、この娘は。」

言はれて、けい子は氣まりの惡いやうな淋しいやうな微笑をかすかに漏らして顏を俯向けた。母の顏を見てゐた間に學校を止さうか止すまいか、母の言葉に從はうか、その言葉を何んとか撤回させようかといろいろ考へてゐた筈であるが、實は少しも考へてゐなかつたのである。そして、今顏を俯向けた瞬間に、そのまま母の言葉に從ふ氣持になつてゐた。「何も考へることはないわ。矢張り、お母さんの言ふ通りになるのが、自分のためだし、それより一層皆のために良いに違ひないから」と心の片隅で大人しく考へながら。

そして、なんの未練氣もなく止して了つた。又、その後、學校のことを一言も口に出したことはなかつた。人に止した動機や氣持を訊かれることがあつても、氣のない返事をするきりだつた。

櫂で濁いだ水跡のやうに、女學校は彼女に何ものこらなかつたのだらうか。

けい子は前述したやうに、女學校が好きでも嫌ひでもなかつたが、學課の成績の方も惡いことはなかつた代り特別良いこともなかつた。點の良いのは、國語と習字だが、それとて、取立てゝ好きだと言ふのではない。そんな具合だから、學校に對して、未練氣なぞが起らないのかも知れない。

たが幾日かが過ぎて行く中に、一種の空虛感が彼女の心の中に起つてきたのだつた。それは全く、彼女自身氣付かないやうにやつて來て、又いつとはなく氣付かないやうに消えて行くのである。殊に初めの中は殆ど氣付かず、どこか自分の體に故障があるのではないか、例の肺炎の殘りがまだ體の隅の方で燻ぶつてゐるのではないかと考へて、鏡に顏を合せてみたりもした。

けれど、體には何んの變化も起つては來ず、次第に、かすかな風のやうに訪れて來ては消えて行く空虛感だと氣付くともなく氣付き出した

又、幾日かが過ぎた。その頃になると、ただ空虛感に氣付いたと云ふだけではなく、その空虛感が女學校を止したことから起つてゐるのを知るやうになつた。女學校が戀しいと思ふやうにもなり、あの粗末な木造建の教室で學んでゐた國語や地理や歴史やそれからなんとなくハイカラに思はれる英語や自分の苦が手の代數までが妙になつかしく思はれ出した。苦が手だつた

ものは却つて、一層なつかしまれ、一種尊いやうな氣がした。丁寧にしまつてある使つた教科書を取出してみることがある。物を大切にする性質の彼女は、一年のも二年のも三年のも、紙で上を被つてあるし、中も手垢一つ付かぬやうに使つてあるので、まるで眞新しい感じである。けれど、開いて見てゐれば。どの頁にも彼女にだけ解る手垢、と云ふより手垢の影が解るし、その手垢の影はその頁をならつたときの教室の雰圍氣——それは或ひは漠然としてゐたり或ひははつきり記憶にのこつてゐたり樣々だが——教師の樣子や指された生徒の答へる聲や他の生徒の目付やなんとない體の動かし方などが目に浮んできた。又、自分のそのときの言はば息使ひとでも表現すべき感じなども甦つてくる。休憩時間には世間話の一座の利け者である三十近い看護婦上りの女が、授業時間となると一切の彼女の才能を失つて小心翼々たる女になる姿もなつかしく思ひ出される。年少の頃の記憶は誰にとつても鮮かにのこるものではあるが、けい子のやうに一頁一頁について可成りはつきりした印象をもつてゐることは少ない。彼女はさう云ふ意味では特別な才能と云ふか感覺と云ふか、どことなく神祕とさへ思へるものをもつてゐる。電話番號とか番地とかを忽ち憶えて了ひいつまでも忘れない女が時々ゐるものだが、彼女も不思議な記憶力があつたのだ。巫子のやうな不氣味なものではなく、どこか優しさと豊

かさにほつてゐる神祕さを感じさせるのである。事實、頁を開いた瞬間には彼女はその頁の記憶を失つてゐることもある。けれど、教つた英語の章句をおぼつかない口調で讀んでゐる中に泉から自然と水が涌き出すやうに彼女の胸の中に記憶が清々しく涌き出してくるのである。

殊に、インキの飛びちつた跡とか、何かを書きつけた紙片がはさまつてゐたりすると、追憶は一層強く彼女の胸にひろがる。彼女は物を大切にする氣持から、教科書に樂書は勿論、書入れもしないのだが、若し夫れがあつたら、今になつて樂しかつたらうと思つたりした。

彼女は日が經ち月が經つに從つて、英語や代數や國語などで漠然と代表される學問と云ふものを尊敬する氣持が強くなつてきた。勿論、「尊敬する」なぞと云ふはつきりした意識ではないが、さう云ふ氣持の動きが強まつてきたやうである。そして、時々もつと勉强して置くんだつたと思ふこともあつた。けれど、實際には、今から再び學校をつゞけようなぞと考へることは、ただの一度もないほど、勉學に對する實行力とは別なものであつたが、なんとなく彼女の空想の中で、ふわふわと浮いてる意識なのである。

筆者は、彼女のこの學問に對する漠然たる尊敬の念と、良三の風貌に對する彼女の印象のとり方とに聯關を求めることができるやうな氣がする。彼女の母親は「痩せて靑い顏をしてゐ

るが、どこか悪いんぢやないかね。」と觀てゐるに反し、彼女は「痩せて青い顔をしてゐる」が、それは體が弱いからではなく、さう云ふ顔貌の中にこそ、澤山勉強した人の特徴がひそんでゐるのだと考へてゐる。彼女は今まで往來でつけられたり會社の社員に言ひよられたりして、その度に「男」の嫌らしさを感じたのだが、良三にはそれを感じないばかりか、彼に見られると云ふだけでも胸のをどるのを覺える。彼女のもつてる「男」と云ふものの觀念とは別個のものである。そして、今まで、男性の風貌の美しさが解らなかつたが、彼を見ると美しい人だと思ふのである。良三は病的と思はれるほど青く澄んだ美しい目をもつてゐるが、唇は厚くて稍々黑ずんだ色をし頰骨は出てゐるし、鼻も高いけれど立派な形をしてゐるわけでないから、決して世に言ふ美男の類に這入る者ではない。然るに、彼女には美しい男と見えるのである。誰でも好きな相手は美しく見えるものだらうが、そんなことよりも――いや、彼女にそのやうに美しく見えると云ふのは、彼女が漠然とではあるが、學問と云ふものに尊敬をもち、彼が學問を澤山してゐる人だと思ひ込んだ、その關係から來てゐるのではあるまいかと考へられるのである。

兎に角、彼女は母の觀察とはまるで違つて彼を觀てゐた。

四　結び目

もう、すでに初夏が來てゐた。草も樹々も明るい綠色になつて、力一杯萠え上つてゐる。蟲はどこから出てくるのか、色々な姿をして現れてきたし、蟻は足早に地の上を走り廻つてゐる。

けい子は自分の住む郊外の風物が勢よく變つてきたことに氣付かずにゐたが、自分の體が生々として、じつとしてゐられぬものを感じた。時々は、兩手をひろげて脊のびをしたり、手をうち振つたりしたかつた。周圍の風物に氣付かないのも、彼女自身の體が活氣づいてゐるせゐであらう。

「まア、すつかり、いい娘になつたね」小松川の親戚の小母が彼女の體をなめるやうな目附で見廻しながら言つたことがある。成程、ふつくらと肥つてきて、皮膚の色が白々と光つてきてゐた。

けれど、何んとなしに、不意に淋しくなるときがあつた。それは全く水泡のやうに直ぐと消えるのであつたが。彼女は神經質に深く考へてみると云ふ性ではなく、むしろ考へぬ方であつたが、それでも、何故淋しくなるのだらうと反省してみることがある。けれど、自分自身に淋しくなるやうな事情もなし、では、女學校を止めたことが次第に淋しさに反つたのか、それでは再び通學したらどうだらうと思つてみるが、それほどの氣持も涌かない。結局、自分にはその淋しさの原因が解らなかつた。けれど、前述の如く、泡のやうに忽ち消えて行くのだから、彼女としても、それ以上には考へてみることをしなかつた。

けい子はその後十日か半月ほど良三と道路で會ふこともなく過ぎてゐた。彼女は三日に一度か、四日に一度ぐらゐ、思ひ出したやうに自宅の緣側に立つて、吉井產婆の屋根と屋根の下の彼のゐる室の硝子窓を見た。又、さうすれば、一層よく見えるかと思つて、きまつて背のびをして見た。背のびをしたところで、先方の硝子窓がほんの僅か余計に見えるに過ぎないと解つてゐるのだが。けれど、いつも、燈が消えてゐた。ある日は、妙に氣にかかつて、三十分おき一時間おきに三度ほど見たが、夜がふけても眞暗のままだつた。

「どうしたのだらう。引越したのかしら。」

妙に胸のドキドキするやうな不安に襲はれたが、決して引越してゐないことは彼女自身知つてゐた。又、二階の二室の中、あの硝子戸の見える室の方が彼のゐるところだと云ふことも、その後、解つてゐた。

ところが、ある晩、思ひがけないことが、二人の間に起つた。

言はば、良三の方からしかけたことに違ひないが、彼にも實は思ひがけないことだつたし、勿論、彼女にとつては、全く思ひがけないことだつた。

その晩、いつものやうに、十時を過ぎると、けい子は店の戸締りを始めた。初夏だから、まだ起きてる家も多いのだが、彼女の家では早寢の子供が多いし、父は神經痛の療養かたがたも一半年ほど前から彼の故郷である信州へ行つて留守だし、その上商賣は子供相手だから夜は客がないので、十時頃には店をしめることにしてゐる。その時分には、母のおときは畳間の内職の疲れが出て一番末の男の子の側でうたた寢をしてることが多かつた。

彼女が硝子戸を閉め、錠を下ろして、白い晒(さらし)のカーテンを引きかかつたとき、表の道路の三四間はなれたところに人影がこちらを向いて立つてゐるのに氣づいた。人影に氣がついたばかりでなく、その人影が手まねぎをしてゐる——正確に言ふと、指先を小さく動かして遠慮深か

さうに呼ぶでゐるのに氣付いたのである。

普通ならば、いくら自分の家の前とは云へ、人通りの絶えた郊外の道路で自分を呼ぶ人影を見たならば恐怖を抱く筈であるが、彼女はそのときなんの恐れも感じなかつた　月はあつたが、爪ほどの細い三弦の月で、その人影が男だと解つても、ここからは何者か、どう云ふ顏形をしてゐるか解らぬ程度だつた、彼女には、その男が一體誰か解らなかつた。けれど、不思議なことには、同時に、その男が良三に違ひないとも思つた。恐らく彼だと思ふ氣持がどことなく動いてゐたため恐怖が起らなかつたのであらう。

けい子は掴んでゐたカーテンをそのままにして、一旦おろした硝子戸の錠を靜かにはづすと、鳥渡氣付いたやうな顏になつてカーテンを又掴んで硝子戸全體に引いてから、戸をそつとあけて外に出て行つた。

この行爲も不思議である。相手の人影が良三に違ひないとしても、又、時々道で目禮をし合つたとしても、まだ一度も口を利いたことのない間柄である。當然、生娘としては逡巡するだらうし、結局、その招きに應ずるだけの勇氣が出ないどころか、一種女性本來の異性に對する恐怖につつまれるのが落ちである。ところが、けい子は、誇張ではなく全く恐怖も恥しさも感

じなかつたのである。

と云ふのは、彼女にとつては、彼のこの呼びかけは、何等の不思議がない。まるで、前から呼んだり呼ばれたりするやうな間柄になつてゐるやうな錯覺があつた。或ひは、當然二人の間にこのやうなことが起ることを心中、運命的に設定してゐたのかも知れぬから。

後になつて、彼女はこのときの心持を振返つてみて、當然のやうな氣もしたし不思議な氣もした。そのときになつて、彼に呼ばれた情景を回想して、初めて胸がドキドキと動悸し顏が微かに紅らんだ。あの際には、極めて平凡で自然で、何ら感動的ではなく、ただ豫定されたことをするだけだと云ふ風だつたのに、後になつては、この情景を時々思ひ出して、彼女は樂しい氣持になつた。

さて、けい子は、自家の者には氣づかれないやうに、そつと硝子戸をしめて、その人影に近づいた。案の定、良三であつた。

彼は默つて、怒つたやうな顏をしてゐるのが、細い月の光でぼんやり見えた。

いつもの——と言つても、路上で見かけるだけだが——いつもの彼とちがふと、けい子は心の片隅でチラと思つた。どこが違ふと言つてもはつきり解らぬが、なんとなく、眞面目で怖い

やうな氣配がその細身の體にこもつてゐると感じたのだ。けい子の心にのこつた印象はその瞬間にはほんの心の片隅にチラと浮んだだけで直ぐ消えたが、後になつて大きく強いものに成長して行つた。「あのとき、あの人は本當にあたしを愛してゐたんだわ。怖いほど大眞面目な顏附をしてゐたんだもの。」そんな風に思ふのであつた。

良三はけい子が近づいて、自分の目の前に立つと、大膽にまじまじと彼女の顏を見た。案外に、何んの手數もかけずに素直に彼女が出てきたので、自分が思つてゐるより彼女は自分に氣があつたのだと解り、その安心から大膽になつたのだ。月光が淡いために、はつきり見えぬせいか、いつもより一層美しく彼には思へた。顏ばかりでなく、體からも馥郁たる青春が匂つてゐるのを感じた。

この美しく見えることと、强烈な青春の匂ひとは、彼をはげしく刺戟した。思ひがけないものが彼の若い體を荒々しくかけめぐり出した。

彼は何も話しかける材料がないままに、相變らず默つて、鳥渡あたりに氣を配つた。それから、自分についてくるやうにと體で彼女に示して、歩き出した。

けい子は心持首をたれ、心持彼を見るやうにして後から從順について行つた。

歩くと言つても十二三間はなれた木蔭のところであつた。往還から草地になつてる、その草地の眞中ほどに樅が一本立つてゐて、その下にも草が生えてゐる。

もう夜露が下りてゐて、彼の素足をぬらしたが、殆んど意に介しなかつた。女が自分の後に素直についてくると思ふと、ひどく可愛くなつた。路上で會ふけい子に興味をもつてゐたが、こんなにまで可愛くなるとは一度も想像してみなかつたことである。

樅の下にくると立どまつて彼女の顏を見た。そこは、はすかけに月光をうけてゐるので、女の顏は見えたが、樹幹を楯にとると、往還の方から人に見られる恐れはなかつた。

良三は今になつて彼女がかすかにではあるが、恥しさうにする素振を見てとつた。彼がじつと見るので、顏も心持下に向けた。何か言はうと思つた。だが、言はうとする前に、彼の體の衝動が、突然彼の手をけい子の背に廻さした。彼女はこの突然の行動に驚いた筈であつたが、何ら特別の抵抗をしなかつた。そして、もうそのときには、良三は彼女に接吻をして了つてゐた。

すると、けい子の體は一瞬間、凍つたやうにじつとし、

「お母さんに叱られる。叱られる。」と蚊の泣くやうな低い聲が漏れた。

彼女が何らの躊躇もなく素直に委せたのが今だけに、良三には思ひがけない言葉で、なんと判斷していいのか戸迷ひを感じた。

けれど、彼はその樣子を見てゐる中に、けい子の考へてることが、何んなく解つてきて、再び驚きもしたし、可笑しくもなつた。

この女は、全くうぶなのだ。まるで、子供のやうにうぶなのだ。體は一人前の成熟した女のやうに男を惹きつける匂ひをむんむん發散してゐるのに、まだ心は子供のままで殘つてゐる。神樣がこの年頃の娘を片跛に作つてゐると思つた。いや、神樣がまだ一人前になさる積りはないのに、體だけが自分勝手に成長したのかも知れぬ。彼女の心は、まだ母親と結びついてる子供なのだ。

良三は自分が餘りにもけい子を大人に思ひなしてゐたと思つた。又、こんな大きな一人前の體をしてゐて「お母さんに叱られる。」と云ふ言葉が出る、そのチグハグさが可笑しくてたまらなくなつた。

良三は自分の欲望にまかせてした今夜の行爲を悔いる氣持もあつた。けい子は今夜彼から接吻されるなど夢にだに考へなかつたらうが、實は彼にも自分の行爲が思ひがけなかつた。

良三はその日、同人會に出席して、ある男と、何んでもないことから論爭した。本當に何んでもないことだつた。どんなきつかけから爭ひ始めたのか、今思ひ出さうにも思ひ出せない、——いや、すでに論爭中、それが烈しくなり出したときに、思ひ出すことはできなかつた。そんなに根も葉もないやうなきつかけであり、論爭の題目も、言葉と云ふより言葉のもつてる「いきほひ」にまくし立てられて、轉々と變つて了つて、まことに、はかないものだつたが、論爭そのものは憎惡をこめた烈しいたたき合ひだつた。

良三は、大體議論は嫌ひの方で、會なぞではいつも隅の方に引込んで默つてゐるか、時々隣席の者と低く囁くぐらゐのものであるが、同人會のときには一層默つてゐた。口出しをするほど雜誌に興味をもつてゐなかつたからである。ところが、相手の高田と云ふ男も良三に負けぬくらゐ、いつも默つてゐる人間だつた。良三の方は居てもゐたくても會の空氣に變化のないやうな寂默さだが、高田は妙にねつちりと憂鬱さを席上にただよはす默り方である。

かう云ふ兩人が突然はげしく爭ひ出し、その爭ひ方が憎惡をこめ合つてゐるので、席上の同人たちはびつくりし、誰一人も口を挾まうとする者がなく、默りつゞけたのだつた。

日頃、良三と高田とは特別な交際もなく、利害關係もなく、從つて、怨讐のあるわけもないだけに、どうして、あんなに高田が意地悪く論爭をつゞけたのか合點がいかない、或ひは、常から彼を遍が好かずにゐて、それが勃發したのか、或ひは何か自分自身不愉快なことがあり、それが良三の何かの言葉をきつかけに、何の關係もない彼に當つて行つたと云ふに過ぎないのかも知れぬ。又、良三も、いつもなら、少しぐらゐの皮肉をとばされても默つてゐる筈なのに、この日に限つて、あんなに烈しく反擊し噛みついて行つたのはどうしたわけであつたらうか。

良三もその日潜在的に心のむすぼれがあつたためかも知れないが、直接的には、高田が彼の無意志な無性格な、自己喪失の生活をののしつたところに原因がある。

「大體、貴樣の態度はなんだ。妙に老成振つて。雜誌にまで書かうとせず、いや、一生懸命になつて書く男をまるで阿呆か何かのやうに冷然と眺めてゐやがつて。眺めてるだけぢやない、口にも出したと云ふことを聞いてゐる。くだらない才能で、いくら紙屑を製造したつて何になるとな、その言葉、いや、その思ひ上つた老成振りはなんだ。貴樣のは老成ぢやなくて、卑屈な人間の生意氣な振舞ひに過ぎないんだ。その證據には、貴樣の、貴樣の生活を見ろ。何を

してると言ふんだ。毎日々々、ぶらぶらして、何一つしてゐないぢやないか！」

良三は、最後の言葉を耳にしたとき、傷口を鋭くつかれた思ひだつた。それに相違なかつたからである。そして、それにいつも自責を感じ、その自責を毎日々々ごまかしてる生活だつた。丁度、山の上から轉び出した小さい雪の塊は下るにつれて大きくなるやうに、その自責と自責を被ふごまかしとは益々大きくなつて行つた。ところが、そのうしろ暗いところを、自分ばかりでなく、他人に突かれ、嫌や應なく、自分の良心の面前に引据ゑられたのである。彼は最後の土壇場に追ひ詰められたのを感じた。相手の高田が指摘するばかりでなく、自分の內奥の良心が思ひ知つたかと云ふやうに行く手を立ちふさぐので、內外攻擊のために、逃げるにも逃げ口すら探し出せないのである。彼は自分の全身の血の凍るのを感じた。それまで、高田の意地悪い攻擊を、ある餘裕をもちながら右に左にかはしてゐた良三の顏が突然變つたのも道理であつた。

良三は瞬間、口がきけなかつた。

だが、その一瞬が過ぎたとき、自分が衆人環視の中で丸裸にされ、泥の中に突きつけられてる慘めさが胸にきた、自分が餘りにも可哀さうな氣がしたのである。そして、怒が腹の底に湧

いた。

「なんだつて！　俺の生活がなんだと云ふんだ！」とただ口をついて出るままに叫んだ。「俺の生活を悪罵する資格があるのか！　君は俺の生活と俺の思想と思慮とを知つてでもゐると言ふのか！」

「知つてゐる。知つてゐるから言ふのだ。そのだらしのない生活態度はなんだ！」高田もいきり立つて首をのばし口をとがらして叫び返した。

「俺には、俺の考へがあつてやつてゐるんだぞ！」

良三は叫びながら、本當にさうだと思つた。外見にはだらしない生活に見えるかも知れぬ、何もせず、ぶらぶら醉生夢死の生活をしてるやうに思へるかも解らぬ、けれど、これは俺の思考の途上、精神生活の一段階なんだと考へた。それは、突然そのとき思ひついたのだが、まさに相違ないと感じた。すると、今、高田の云つた「だらしのない生活態度」と云ふ言葉の「だらしのない」がひどく侮辱されたと思つて、火のついたやうに癪にさはつた。

「さう云ふ君の生活は、どうだと云ふのだ、俺のことを云々言へる立派な生活をしてるとでも言ふのか。そこにゐるだけで人を憂鬱にさせる。むすつとした面からして氣に喰はぬが……」

「なんだと！」

「……そんな面をしてゐながら、聞くところによると……」良三は高田の私生活をあばきかかつた。

もう、二人の論爭は泥試合そのものだつた。

終ひには、腕力沙汰になりかかつて、立ち上つたが、双方止める者があり、チャリを入れる者がありして、なんとなくおさまつて了つた。併し、良三はもうその席にゐるに耐へられなくなり、途中からぬけ出てきた。

考へてみれば、今日の論爭は、何のためか解らない。言はば、根も葉もないところから起つて、うやむやに消えて了つた。そのくせ、妙にじりじりと心を噛むものがのこつてゐるのである。會場である友人の下宿から外に出たときには、外氣の涼しさが一瞬快く感じられたが、それも心中の鬱したもののために忽ち被はれた。本郷三丁目の交叉點に出、そこからお茶の水驛まで歩いて行く間、益々その鬱積は擴がつて行つた。

「だらしのない生活だつて！　何もしてゐない下らない生活だつて！　そのくせ、高慢なえらさうな顔をしてるつて！」良三は、心の中で幾度も呟いた。そして、ときどき、何を訊

いてるのか、何を考へてるのか、それどころか、自分は今歩いてるのか、坐つてるのか解らぬやうな穴のあいたぼんやりした氣持に襲はれたりした。

けれど、はッと氣付くと、今、心の中で呟いた言葉に對して、まるで仇敵に噛みついて行くやうに、

「しかし、俺には俺の考へがあるんだ。俺の俺としての生活があるんだ。だらしのない生活でも、下らぬ生活でもない。これこそ、俺の思想の一つの段階なんだ！ 貴樣の知つたことか！」と先刻、高田に言返した言葉を再び叫び返した。それは、餘りにはげしかつたために、心の中だけで叫んだと思つたのに、最後の言葉は聲になつてゐた。

「貴樣の知つたことか！ 貴樣の知つたことか！」

だが、次の瞬間、興奮の脈が突然たち切られるのを感じた。まるで、血が顏から一散に引くやうに、心が冷え、うつろになつた。「嘘を言へ！」と、自分の中の、もう一つの心が鋭い横槍を入れたからだつた。「嘘を言へ！」聲だけを大きくして、自分をすらごまかさうと言ふのか！ 何んの思想の段階だ、なんの自分としての考へがあると言ふのか。どれもこれも、その場かぎりの根も葉もない出まかせぢやないか。高田の言ふ通り、何もしてないだらしのない生

活、心の穴だらけの、恥かしい生活ぢやないか！ いや、高田に改めて言はれるまでもなく、自分自身が、とつくの昔から百も千も承知の筈だ！ 恥を知れ！ 他人をごまかし了せても自分の良心をごまかすことができるか！」

順天堂病院の側の暗いところには、二三軒の屋臺がくらいあかりをともしてゐた。そこを、ほとんど目をつむつたやうになつて、まるで、糸にあやつられてる人形よろしく、ふらふらと歩いた。

彼は、古臭い大學の講義は、自分の精神とは何んのつながりもないと稱して、教室に出ようとしなかつた。そのくせ、下宿で自分の專攻の本を讀むと云ふのでもない。それどころか、研究の目的もなし、大體、美學美術史學科に籍をおいてゐるが、今となつては、なんのためにこの學科を選んだのか、はつきりしない。ただ、のんびりとねそべつてゐられるからであらうか。親から仕送りの學費をうけ、落第の恐れが少なくぶらぶらしてゐられるからであらうか。實際、良三は下宿でねそべつて、本一つ讀まずぼんやりしてゐるか、憂鬱さうな表情をして、なんと云ふことなく外出し、ある友人を避け、ある友人の下宿の前に立つたりしてゐる。ただ、ある友人のやうに、私娼窟に出入したり、カフエーの女給を追ひ廻したりしないの

がみつけものかも知れぬ。自制してゐるのではなく、さう云ふことに肌が合はぬと云ふのか好きぬのであり、することに物憂さを感ずるからだつた。けれど、ある考へ方からすれば、むしろ、それらの友人の方が、何か生きてる感じがして、好ましくさへあるのだ。良三の生活は、死んでゐるのである。

二三年前の――まだ、彼が高等學校にゐた頃の良三は、今の彼とは全くちがつてゐた。何ものかに對して、年中情熱をもやし、友人と研究會をおこしたり、本もむさぼるやうに讀んだ。前述したやうに、小才が利くところから、文藝評論に近い論文を作ることにも人並み以上の熱心を持つてゐた。

それが、どうしたのだらうか、高等學校の三年の中頃から、物事に對する情熱が薄らいで行つた。日に日に薄れしぼんで行つた。級友との會にも顔を出すことが少なくなり、本も讀まなくなつた。勿論、同人雜誌に評論を書くことなぞは全くなくなつて了つた。いくら、友人がすすめても、雜誌編輯の關係から、是非書いてくれと促しても書かうとしなかつた。恐らく、友人の誰かが、彼の室を訪れたなら、主人のゐない机の上は埃が浮いてをり、投げすてられた本は、もう長い間手にかけられないらしい冷たい濕つぽさが感じられたらう。けれど、友人の訪

れも少なくなつてゐたのだ。彼がどことなく、友人をさけるやうなところがあつて、友人たちにも、それが自づと感じられるからにちがひない。

それかと言つて、良三の行動に、友人たちの特別目につくやうな變化があつたわけではない。會へば、前と同じやうに笑ひ合ひもし、一緒に映畫を見に行つたりもしたから。

良三は後年、そのやうに變つて行つた最初の頃を考へてみた。一體、何が原因だつたのかと詮索的に思つてみた。けれど、自分にもはつきり解らなかつた。何か特別に思想的な衝擊をうけたわけでもなく、勿論戀愛なぞはなかつた。敢へて考へてみれば、それまで餘りに情熱的に何者かを追ひ求めた亂讀と交友との反動かと思へるが、それも實際には原因になりさうには思へぬ。著さの致す一つの變化と簡單に割切つてみたところで、刺切つたところに、なんの意味もない。所詮、原因らしい原因は自分には解らないと云ふ外はないのである。

ただ一つ思ひ出すのは、あの冬の日のことだつた。大學の一年のときだと云ふ記憶があるが、その他のことはなにも覺えてゐない。野原を歩いてゐた。草が枯れて、滿目荒涼たる野原であつたが、一體どこの土地だつたか、又、どう云ふわけでそんな野原を一人で歩いてゐたのかも記憶してゐないのだ。彼は歩いて行つた。言はば、とぼとぼと云つた歩き方で、首をうな

だれ、時々立止まつては何かを見上げるやうにしたが、何も見たわけではなく、再び歩いてゐた。彼はふと氣付いてみると、自分は泣いてゐた。涙が目蓋からあふれて流れ出してゐた。けれど、何故、涙が出たのか自分でもはつきりしなかつた。自分の心が泣いたのではなく、自分の體が泣いたと云ふか、自分の意識する以外の心が泣いたのであらうか。そのとき、彼は自分がもう長いこと何をする情熱も失つて了つてゐると云ふことに初めて氣付いた。長い長い間、本一冊讀まず、友人と若者らしく話し合ふこともしない、いや、それどころか、自分の目的もなくなつてゐるし、自分の生きて行く心の張りを少しも感じてゐなかつたことに氣付いたのである。

「心の上に、すつかり塵がたまつて了つた。」と思つた。

けれど、さう思つたが、では、今までの氣持を入れかへようと考へるのではなかつた。ただ、どうにもならぬと思つただけである。いや、自分なぞは、どうなつても構はぬ、どうなつても構はぬと云ふより、どうすることもできぬではないか。「自殺をすることもできないからな。」と心の中に小さく呟いた。すると、どう云ふわけか、再び涙が目から流れ出した。

「俺は泣いてゐるな。」と思つた。泣くとはをかしいではないかと考へた。どうなつても仕方が

自ない分なのに。この野原で轉んだら、轉んだまでである、自分はもうじつと倒れてゐるだらう。そんなことを思つたとき、良三は、どうしたはずみか、何かにつまづいて冷たい土と枯草の上に倒れた。

倒れたやうな記憶が漠然とかすかにのこつてゐるが、或ひは倒れなかつたのかも知れぬが、倒れたやうであつた。

そして、あの頃を堺として、――まるで、その野原の一件がきつかけでもあつたかのやうに、はつきりと所謂だらしのない無意志な生活の中に一層踏み込んだやうだつた。

良三はやつとの思ひで下宿に戻つてきた。下宿の自分の空の疊の上に、苛めつけられた身と心とを横へるのを、ただ一つの救ひにしてきた彼であつたが、それが少しも救ひにならないことを、直ぐと知つた。埃をうすくかぶつてる机に腕をのせ、その上に頬をすりつけるやうに俯伏せた。聲をあげて泣きたいやうな衝動がどこかにしてゐるが、涙は出ない。ごろりと疊の上に體をころがしてみた、けれど、たゞ體が浮いてるやうな感じで、そのまま、じつとしてゐられない。妙な空虛感が體の中に吹き流れてゐるのだつた。その空虛感は、彼の心を深いとこ

ろに引きずり込む澄みきつたものではなくて、逆に胸の中で意地の悪い目を光らせ、たえず彼を責めつけてくる種類のものだつた。次第に彼は坐つても横になつてもゐられなくなつた。

良三は、急に外に出てみることにした。もう十時頃なので、外氣は晝間の暑さから解放されて冷えてゐるに相違ない。(今、かへつてくる途中では、暑いも涼しいも感じないで了つたが。)大根畠には露がおりてゐよう。森の中、森の近くにある古い池。それぞれが暗い中で涼しくなつてゐよう、夜が暗いと云ふことも、この際、なんとなく助かるやうな氣持である。(彼は、今夜、月があることも氣付かずに歸つてきたのだ。)そして、階下の人に迷惑をかけないやうに、足音を忍ばせて下りて行き、裏口から外に出た。

外には月があつて、葉末をきらきら光らしてゐたが、もう、ほんの今、庭の暗いのを讃美したことなぞは忘れて了つて、その月の光の中を、歩いて行つた。

けい子の店の前にきたのは、それから二分と經たないときだつた、前述したやうに、丁度彼女は店の硝子戸を閉め白いカーテンを引きかかつてゐたのである。

彼女はこの夜の出來事を、運命的に豫定されてゐたやうに信じ切つてゐるが、良三としては、全く偶然にすぎなかつた。ただ、足が彼の意志の外で彼女の家の前に向いてゐただけである。

る。けれど、運命的と云へば、偶然、彼女の家の方に歩いて行つたことが、すでに運命的であるかも知れない。いや、それよりも、良三がふと彼女を手招ぎする氣持になつたところが夫れであらう。彼には、その直ぐ一瞬前まで、彼女をこの夜更けに呼び出さうとする意志は毛頭なかつた。その上、假に彼女を熱愛してゐたとしても、そのやうな端的な直接的な行動のとれる彼ではなかつた　普段の良三であつたら、彼女の姿が白いカーテンと共にそこにあつても、そして、じつとこちらを見てゐても、ただ見返すだけでそのまま行きすぎて了つたであらう。あの空虛感が彼をいつもの彼と變へて了つてゐたのだらうか。或ひは、それが、人間の本能以後についたものをも吹消したのだらうか。後になつても、良三には、はつきりそのときの自分を解析してみることはできなかつた。ただ、彼を手招ぎして呼んだと云ふ事實が、すべてを突拔けて、はつきりのこつてゐるだけである。

五、よろこびの日

あの夜を境にして、けい子は一際目立つ成長をとげたやうだつた。彼女の肉體はもう一人前の發育をしてゐたが、それに伴はないでゐた心が急に一寸も二寸も背をのばした。いや、肉體も、成程外見は一人前でも、ただ野生的に生長してゐただけのものが、このときを境にして、女としての方向をはつきり持つたやうである。彼女は、兎に角、一つの柵をとび越して、大人になつて行つたのである。

前にも、會社で事務をとつてゐるとき、ふと耳につく男の聲に彼を思ひ出したり、歸り道の劒道の道場からひびく竹刀の音とかけ聲とに彼のことを考へたりしたけれど、今度はその思ひ出し方が直接的だつた。前にはどことなく幻想的で、思ひに隙があり間のびがあつたのが、今では他の何者をもまじへない良三に向つて、眞直ぐ自分の思ひが結びつくと云ふ風だつた。

彼女は毎日歸りが樂しくなつた。終業の五時に近づくと白壁の眞中にかかつてる大時計を幾

度も見たが、それは焦立たしいと共に胸の底から湧き起つてくる樂しい氣持だつた。では、そんなに樂しみでわくわくするほどのことが自家に待つてゐるのかと云ふと、何もありはしない。何かが起るやうに期待してゐながら、實はただ緣側から良三の下宿の屋根を見るだけのことだつた。

奇蹟が起りはせぬかと毎夜、店の硝子戸の戸締りをゆつくり時間をかけてするのだが、あれから四晩が過ぎ五晩が來ても、彼のひそかに手まねぎをする姿は現れなかつた。けれど彼女は少しも失望しない。あれきり捨てられるのではないかと云ふ疑念が涌くものだが、けい子は二人の關係を運命的に信じてゐるので、少しも心配はしないのだつた。彼女は床に這入ると、自分のねてるところから、彼の室まで何間あるだらう、三十間か三十五間か、その三十五間と云ふ近いところに彼はねてゐるのだと思ふと、なんとなく安心した。

良三は、それから十日ほどして、けい子に會つた。彼は忘れてゐたわけではないが、いつものくせで、進んで會ふのがどことなく物憂かつただけである。

もう、めつきり暑くなつて彼が白の登山帽をかぶつて歩いてゐると、向うから用達にでも行つたかへりらしいけい子がやつてきた。四五間先から彼女はじつと彼を見、そして、いつにな

く、目をそらした。そのじつと見た目附は、今まで路上で見かけたものとは全くちがつてゐた。慕ひよるとか甘えるとか云ふのともちがふ、もつと素直に「あなたの所有物がここにゐますわ、氣がつかないの。」と云つた思ひが浮んでゐるのである。良三はその目の光を烏渡、思ひがけない氣がした。だが、直ぐとひどく可愛くなつた。

丁度、そのとき彼の後から吹いてきた粉のやうな黄色い土埃の風が彼女にふきつけ、けい子は目を中心にして、顏を顰めた。それと同時に、風をよける恰好を體に表したが、その體附にも「あなたの者が」云々を少女らしい微かさで浮ばせた。

良三は、女の顰めた顏も案外、魅力があるものだと思ひつゝ、いつか男らしい大膽さになつて埃風の中を彼女に近寄つた、

「今夜、會はう。あの時間に。」彼は附近に人がゐて見てゐたとしても、なんでもない話をしてるかのやうに思へる態度で、言つた。

彼女は、まだ目の埃を氣にしてるかのやうに俯向いたまま、小さくうなづいた。

それきりで、直ぐ別れたが、彼はひどく樂しくなつた。こんな樂しみを物憂がつてゐた自分に驚いたほどである。そして、烏渡振返ると、彼女も振返つてゐるところで、彼女は例の「あ

なたの所有物」がと云ふ目を一層強くして、首だけではなしに上體全部で叩頭をした。今まで附合つた教養のあると稱する女は、大體こんな場合故意に振返らないし、假に振返つたとしても、叩頭なぞするものではない。彼はけい子から、こちらが恥しくなるほどな素朴な娘の姿を見せられたと思つた。振返らずにはゐられないから振返つた、又、じつと澄ましてゐられないから叩頭をした、さう云ふ行爲は、教養がないせゐかと彼は思つてみたが、そんな考を乘りこえて女の素朴な美しさが強く胸に來たのである。

後で考へてみると、晝日中、彼女が歩いてゐたのは、第一日曜で印刷所が休みだつたからであつた。

その日から、良三はけい子に四五日ほどつゞけさまに會つた。その夜と、次の夜。二日おいて一晩。又一日おいて一晩。まるで、今まで靜かに歩いてゐたのが、突然砂埃をあげて走り出したやうな性急さだつた。良三はけい子の家で不審がらぬかと恐れないでもなかつたが、彼女はいつも平氣だつた。考へてもゐないやうだつた。彼がそのことをひよいと訊くことがあつても、

「なんでもないわ。」と上の空の聲で答へた。心は一途に彼のことに吸ひ寄せられると云つた目

附をしてゐる。

本當に彼女の言ふ通り疑ぐられてはゐないらしかつた。それにしても、夜おそく家を出るのに、何も疑はぬと云ふのは、家庭がだらしないのかと良三は自分の田舍の家とを考へ合せてみたりした。彼は少年時代二度ほどつゞけて夜出たとき、二晩目には閉め出しの罰を喰つてひどい目に遭つた記憶がある。併し、けい子の母も相當口煩さいらしいので、その母が何も言はぬと言ふのは、彼女が絶大な信用があるのか、或ひは彼女が案外に我儘娘で母が遠慮をしてるのか、それとも、彼女の情熱が何も彼も平氣で踏み越えて來させるのか、良三は一應考へてみたが、よく解らなかつた。だが、いつもけい子がそのことに心を惱ましてる僅かなかげりすらないので、彼の方も氣にしなくなつた。

二晩目には、彼等の家から四五町先の森の入口で會ふことを約束した。時間もずつと早く、」やつと夕闇が森や野原を被ふ頃である。

良三の方が先に行つて待つてゐた。馴れない彼女が先に著いてまごついたり、又、まごついてるところを人に見付けられて疑をかけられては前途に支障を來たすと思つたからであるが、それより、圖らずも彼は彼女に心惹かれ始めたからである。念に、續けさまに會はずにゐられ

なくなつたのも、氣さぐれにもよるか知れぬが、矢張りそのためだつた。

森の梢は僅かにほの明るかつたが、地面はすでに薄暗かつた。それでも、叢の間の細い道を歩いてくるけい子が、その體付と歩き方で直ぐ解つた。前述したやうに、けい子は若々しい肉體がはちきれさうで、その強烈な青春の匂ひがぷんぷんにほつてゐて、全體として、ひどく派手な感じに見える。大膽な目附と云ひ、男をすでに知つてゐるやうな落着いた物腰と云ひ、まるで、心も體も、異性の誘惑を待つてゐるかのやうに思へるのだ。ところが、かうして、二回ほど會つたきりだけれど、良三には接してみて彼女が推測を裏切つてゐることを知つた。見かけとは違つて、愼ましく大人しいのである。その愼しさは、取つてつけたやうなものではなく、自づと身についてゐる。これは、必ずしも例の素朴さを感じたために、その考を推し擴めて行つたのではない。少々心を入れて注意し始めたので氣付いたのである。その物腰は彼女の顏や潑剌たる肉體から考へると、砂挨でも蹴立てさうな活潑さに思へてゐたが、實はまことに物靜かだつた。兩手を振つたり動かしたりしないのは勿論、上體を、いや體全體を「全く」左右上下に動かさない歩き方である。「全く」と云ふ言葉を用ひたが、良三がさう感じられるのは、何物にも抗はないやうな、言はば「柳に風」のやうなおだやかさ靜かさがあるので、そんな

風に強く感じられるのかも知れない。そして、遠くから見かけると派手に見えた顏も、近々と自分のものとして見入つたとき、成程、若さのもつ絢爛さはあつても、その絢爛さの一皮奥には物腰と同じやうな愼しさ物靜かさのあるのを發見したのだつた。而も、その顏と云ひ、物腰と云ひ、それはただ外面的なものではなく、心の中のものが、――つまり、大人しい愼しい心が、そこに形となつて現れてゐると云つた感じがした。

けれど、彼に言はれれば言はれる通り附いてくる、その附いて來かたが、受動的でゐながら而もその中に主動的な烈しさのある點や、二三歩彼女から退くと、ひどく派手に潑剌と見える點なぞの、そのちぐはぐさが、良三にははつきり解らなかつた。

けれど、その派手で潑剌としてるところが彼の欲望をそそり立てたが、同時に愼しく大人しいところも彼の欲望を刺戟した。

二晩目に、叢の間を歩いてくる人影を、遠くからけい子だと彼が見定めたのは、その特徴のある靜かな體附と歩き方からだつたのである。

果して、彼女だつた。だが、意外なことにぶつかつて、良三は眉を蹙らしたのである。と云ふのは、彼女はいつものひつつめ髪ではなく、黑髪を令嬢風のお下げに結つて長々とたらし大

型のリボンさへつけてゐるのである。そして、手には、なんの花かパトロン紙に包んだものを持つてゐる。

「お待ちになつて」となんの疑ももたぬ目附で（そこには「あなたのものよ」と云つた心をひそませて）まじまじと彼を見上げてから「このお花……」と良三の手に握らせようとした。くれると云ふのである。

「いらない！」彼女に會つて以來、一度も現したことのない、ひどい邪堅な聲を放つた。

彼女は思ひがけないことなので瞬間驚いたが、どう云ふわけでやさしい彼が突然そんな言ひ方をしたのか解らぬので、

「お花、嫌ひなの」と狼狽らず少しも疑はぬ目附で彼の顏を甘えるやうに見上げた。

「他へ廻るんだから、そんな物持つて歩けるか。」良三は思ひついたままに、聲を荒らげて言ひのけた。こちらの氣持を直ぐ察しられぬ鈍感さに腹を立てたのである。

流石に、けい子は何が自分に氣に喰はぬことがあるのだと思ふと、急に身が縮るほど悲しくなつて、だまつて俯向いて了つた。

良三には、けい子が令嬢風なお下げを結つてきたのは、彼がかうしたら喜ひはすまいかと云

ふ愛情の表現だと云ふことは解つてゐた。良家の出である良三は、その愛の對象は矢張り良家の令嬢であらうから、さう云ふ恰好をしたら彼を喜ばすことができ彼の愛情を強く自分に惹きつけることができると思つたことから、出發してゐるに違ひなかつた。それを思ふと、彼女の心根が不憫にも思へた。

だが、良三はさう解つてゐながらも、矢張り嫌やだつた。けい子は、駄菓子屋の娘のけい子そのままのところに良い點がある。自然のままが一番美しい。それなのに、桁をはづして、令嬢風を裝ふその姿の中に、彼は逆に貧乏な娘の嫌やらしさを感じた。今まで、けい子を特別、貧乏人のけい子として考へてゐなかつたのが、この姿で、はつきり彼女は低い階級の女であると感じたのだつた。自分を喜ばせる積りでやつたことかも知れぬが、そんな風に考へる彼女の愚かさを見せつけられたやうな氣もした。矢張り教育のない貧乏人の娘は堪らない。」

彼は自分の作り上げた夢が無惨に叩き破られるのを感じた。

けれど、二日置いて會ふことになつたとき、良三はけい子の態度を察じた。あのとき、思ひがけない怒に、彼女は一時呆然とし、それからひどく小さい胸をいためてる樣子に氣付くと、良三は急に思ひ直して、慰めたりいたはつたりした。けれど、それだけで小さい胸の痛みをと

くことができたらうか、一度與へた烈しい打擊は容易に拭ひ去ることはできぬだらうと思つたからである。

ところが、けい子は先夜のことをまるで忘れてゐるやうな樣子に見えた。と云ふより、なんの記憶にものこらなかつたやうである。例の如く、森の入口で待つてゐると、叢の間を通つて近づいてくる歩き方に少しも惡怯れたり變つたりしたところがなかつたし、彼の四五間前からあどけない子供のやうな微笑をうかべて彼の胸のところに寄りそひ、そして、甘えてるとも心配さうにしてるともとれる表情で見上げたことが證明してゐる。心配さうに、と云ふのは、彼が怒つてはゐぬか嫌やなことが起りはせぬかと氣遣ふのではなく。別れて以來、相手の身の上になんの變りもなかつたかと問ひたげな表情なのである。

良三は安心した。そして、さう云ふ單純さがひどく可愛くなつた。殊に、インテリがかつた女が單純なことでも敢へて複雜にすることを知つてゐるだけに、その單純さに心を動かされないではゐられなかつた。

森の梢には、まだ晝間の光がのこつてゐるし、叢の上には風が白々と吹き渡つて、人目に付く明るさだと解つてゐたが、良三は一種の激情にかられて、突然けい子を抱きしめた。

身をはなしてから、良三の耳に再び叢を渡る風の音が聞えてきた。けい子は歩き出した。彼に抱かれるやうに二三間行つてから、自分の手に小さい風呂敷包がないのに氣がついて拾ひに戻つた。あの瞬間、彼女の手から落ちたものに違ひない。

その晩、良三は寡默勝ちだつた。前の二晩より遙かに彼女と深くなつた筈であるのに。夫れより遙かに默り勝ちなのである。胸の中をかけ廻る情熱が彼を言葉少なくさせたのであらうか。或ひは、この純な少女に對するある意志が彼を默らせ勝ちにしたのであらうか。その晩、二人は初めて深い交渉を持つた。その直前、けい子はあることを一言訊いた。彼は言葉短かく答へた。それだけで、彼女は安心し切つたやうであつた。

一日置いて、又、例の森の入口で會つたとき、良三は彼女がひどく變化して現れはしないかと案じた。もう、彼女は二日前のけい子ではない。たつた一晩の——而も、一晩の僅かな時間の出來事によつて、女としての事情が一變して了つたのである。あの體を動かさない靜かな歩き方は、もう見られぬのではないだらうか。何か荒々しい歩き方で叢の向ふに現れはしないか。又、近寄ると「自分の男」だと氣を許して、ひどく媚態を示しはせぬか。良三は露骨な表現に對して潔癖なので、それは堪へられぬものだつた。

けれど杞憂だつた。

一昨日と同じやうに叢の上を風が白々と吹き渡つてゐたが、彼女も一昨日と、そしてその前のときと同じやうに。首も肩も動かさない靜かな歩き方でこちらにやつてくるのが見えた。そして、近寄ると、微笑をふくんだ目で彼の胸のところで見上げた。

良三はその微笑のある目を見返しながら、ああ、一昨日と同じではないか、あの出來事は少しも、彼女に激動を與へはしなかつた、愁ひ悲しんでる樣子もないし、その上、あのことのために急に男に甘えたりいい氣になつたりする嫌らしさがないと思つた。これは、彼を安心させると共に、彼の趣味——いや、女の美しさに對する願ひを滿足させた。そして、胸の底から淺々と泉が湧くやうな目然さで、「なんて、この女は可愛いんだらう」と思つた。ほんのかりそめ事として彼女と知つた筈であるのに、彼の心の奥に彼女の影がしみじみと這入り込んできたのである。

それぱかりではない。一昨日の出來事で、良三は彼女から不思議さを感じさせられてゐた。それは、けい子との肉體的な交渉が、美しく思はれたことである。彼は言はば欲念で向つた筈であるのに、その經過の間に、いつの間にか、その欲念の汚らしさが拭ひ去られて欲念そのものまでが美しく澄み渡つて感じられたのであつた。

不思議なことであり、今までの肉體的な欲望に對する考を裏切るものである。

六、消えたともしび

けい子は、毎日々々が樂しかつた。夜間女學校に行かなくなつてから、なんとなくつきまとつてゐた不滿足感が、いつの間にか消え去つた。自分は勉強してゐない、けれど、學問ある頭のよい良三と附合ふことによつて、何か勉強してるやうな充實感が涌き起つてゐたのだ。

單純なけい子は、それで充分滿足ができた。そればかりでなく、なんとなく、自分がなんでも解り出したやうな氣持になつた。今までは知らないことばかりで、手出しが出來ないと思つてゐたのが、どんなことにでも理解が持て、假に知らないことがあつても何か暗示さへ與へられたら、直ぐ感づくやうな氣がした。

「けいちやん、電氣は何でできるか知つてるかい。」印刷所の職工をしながら、夜間の工業學校に行つてる生意氣な少年が質問をする。

けい子は、何も知らない。電氣と云へば、天井からぶら下つてゐる電燈のネヂをひねれば明

るくなるし、ネヂをまけば消えるきり知りはしない。けれど、前なら、あゝ、自分は全く知らない、なんだらうなんだらうと頭が茫つとするだけだつたけれど、今は知らなくとも心に餘裕ができてゐた。この少年が、若し、暗示を一寸與へてさへくれたら、直ぐに解つてくるやうな氣がするのである。そして、彼女は落著いた微笑を顏に浮べながら、

「あんたもよく知らないんでせう。」微笑で答へられるやうになつた。大抵こんな場合相手もよくは知らないさ、と頭を搔いて終つて了ふのである。

けい子は良三との關係を少しも不安に思つてゐなかつた。自分たちの運命をかたく信じてゐたのである。これは、一般的には、不審に違ひない。女がたつた一つの純潔を捧げることは一生の一大事である。

良三は彼女の生れたままの自然な單純さなのだと大雜把に解釋してゐたが、それでも後年になつて、それを不審さうに訊いたことがある。そのとき、彼女は二十四五になつてゐたが、島渡俯向きながら、ただ顏に微笑をうかべてゐるきり答へなかつた。執拗こいやうであつたが、良三がもう一度同じことを口にすると、「そりや、あたしの一生の一大事ですもの……」とだけ答へて、後は笑ひに紛らした。その語調に依ると、大きな激動がないことはなかつたやうである。

激動と云はなくとも、何か心に打たれるものはあつたに相違ない。

併し、けい子の場合は、その心の打たれ方が、物を失つた心持、しまつたと云ふ後悔、さうなる前をなつかしむ氣持、さう云ふものではなく、自分の豫定されてゐた運命の軌道に豫定の如く今自分は乘つたぞと云ふ心の打たれ方であつた。

これは、不思議な心理に違ひない。嘘のやうに思へる。だが、二人の結びつく運命を信じて疑はなかつた彼女には、なんの不自然もない心理だつた。晴れ渡つた大空の下で、青い莖の上の一輪の花が、媒介された花粉によつて實を結んで行く、さうした自然さだつた。

だが、女には男に對する潛在的な恐怖がある。異性によつて惹き起される肉體上の事件に恐怖をもたないことはないだらう。恐らく、運命を信じて、のびのびとそれを受容した彼女には、どこか心の底でこの恐怖が首を擡げたことがないとは言へぬ。彼女が後年、彼の質問に答へて、「あたしの一生の一大事ですもの……」と暗に激動のあつたやうに言つたのは、瘦ぼんやりした記憶の中から、この恐怖をとり出したのかも知れない。

いや、だが率直な言ひ方をすれば、彼女はこんな恐怖を意識しなかつたのは勿論、はつきり

自分の運命の軌道に乗つたなぞと考へたのでもない。ただ何か、二人の間に結びつく運命があるやうに漠と感じて、意を安んじてゐられたのだ。そして、何んとなく、單純に心樂しくさへなつたのである。

彼女は自分たち二人は結びつくべき運命であり、どんな形やどんな筋道を通つても結びつくだらうと云ふ信仰の中に強く沒頭してゐる中に、あの恐れは解決されぬままに、自づと彼女の心の中から消えて行つたのだ。そして思ひ出しもしなかつた。ふと思ひ出すことがあつたとしても、心に爪を立てるほどの不安に盛り上らなかつた。言はば、そんなことは、どうでもいいと云ふ風なのである。

これほど自分たちの運命を信じてゐたけい子は、それから間もなく良三と別れる日が來ようとは、夢にも考へたことがあつたらうか。間もなく、本當に間もなくである。附合ひ出してからまだ二ヶ月と經たぬある夏の終り近くの日であつた。

その日は金曜日であつた。一週間前の、同じ金曜日に、二人で淺草に行き、映畫を觀たり壽司屋に這入つて鮨を食べたり更に有名な汁粉屋に這入つたりして、夜おそく彼等の住居のある

郊外に歸つてきた。そして、夜おそいとは云へ人目を憚かるところから、家の近くまで一緒に行かず郊外電車の驛で下りて、少し行つた町角の電柱の下で、今日の日を約束して別れたのだつた。

その日も丈高くのびた野原の草の上には白い風が吹いてゐた。一ト頃からみると、日が短かくなつたので、もう森も野原も薄闇の中にはいつてゐて、草を渡る風がその薄闇の中に白く見えるのである。いつも、先に來てゐる筈の森の入口には、彼の姿がない。けれど、少しも氣にしないで待つてゐた、彼女は鮨も汁粉も大好きだつたが、數へるくらゐきり喰べたことがない。先日の淺草の鮨も汁粉もとてもうまく感じた。うまく思ふと、單純に、うまいと思はずにゐられないけい子は、良三にそれを言はう、彼に言ふことによつて、二人で食べた味を思ひ出さうと考へた。

ところが、白い風も見えなくなり、森と草原と空との境界線がはつきりしなくなつても、彼は現れなかつた。すると人影がこちらにやつてくるのが、動く氣配で解つた。ああ、たうとう、彼は來たと思つて、嬉しさがこみあげてきた。だが、次の瞬間、低い咳で、そして、その咳の仕方で彼でないと解ると、落膽と一緒に、氣づかれぬやうに逃げなければならなかつた。

併し、一本道なので、暗い森の中に這入るより仕様がない。けい子は闇中を不安でふるはしながら、暗い中に足音を忍ばせて、而も足早やに歩いて行き、又、後をすかして見た。森の暗さの中から見ると、森の外は案外にほの明るく見え、その人影は森の道が下りになつてゐるので見えなかつたが、まるで自分の存在を知つてゐて追ひかけてくるやうな氣配だつた。

彼女はひどくその人影が恐くなり、夢中になつて、小走りに森の奥の道のないところに這入り込んで、叢の中に身をかくした。森は眞暗なので、人影は見えないが、木の幹と枝とが、一層黑々としてゐて、その眞黑な木とやや黑さの薄い樹間との僅かな黑さのちがひの間を人影が通るのが見える、と云ふより、感じられた。そして、人影は彼女には全く氣付かず、通りすぎて了つた。

けい子は、ほつとした、そして、臆病さうに首をのばしてあたりを見廻した。すると、急に、この暗い森がぞつとするほど恐くなつてきたのだ。明るい中は、自然の一景物にすぎないが、暗くなると共に、他の自然から自分だけを切りはなして立籠り、森獨特の精氣が湧き起つて、まるで、一つの生物のやうになる。その氣配が、今、急にけい子の身に迫つて感じられたのである。彼女は一人で、晝間この森の中を通つたこともあるし、彼とは一時間も二時間もじ

つと坐つてゐたこともあるのに、一度も、そんな恐さを感じたことがなかつた。本當に、わッと聲をあげて誰かにしがみつきたいほどの恐さなのだ。

彼女は、森の中の、殊に、二人でいつも歩く草が兩側からかぶさつてる細い道はよく解つてゐた筈である。どこに木の根がむつくり起き上つて通る人を邪魔してるか、どこに雨水でほられた凹みが陷穽を作つてゐるか、どこにささると痛い茨が横から出てゐるか、又、人の首あたりの高さに横ににゆつと枝が出てゐるか等。けれど、彼女は、そのやうな記憶が遠のいて了つたほど、恐怖につかれながら、茨で右手を掻かれたり、片足を木の根にすくひ上げられたりしながら、やつとの思ひで、そして、心は走るやうにして、森の外に出た。

森を走り出したけい子は立止まつた。そして、いつも待合はす場所から來すぎたことに氣付いて、臆病さうに二歩三歩引返した。けれど、そのまま足をとめて、そこで良三を待たうと思つた。暗い中で夏草が足に觸れてゐた。彼女は鳥渡それを氣にした。それから、約束の時間が相當經つてゐることを考へて、一瞬間森の怖さを忘れ、良三のことが入亂れた黑雲のやうにむらがつた。だが、直ぐと恐怖が交つてきた。そして、時間が經ちすぎて待つてゐても無駄だと云ふ考が浮んできた。暫らく迷ひながら、叢の間の道をのろのろと、それから少し早足になつ

たり又のろのろとなつたりして歩いて行つた。はつきり道が解らないが、それでも歩くに從つて、うすぼんやり道は見えるのだつた。

思ひきれずに、大通りに出る手前の芋畑の間に暫らく立つてゐたが、遂に良三は現れなかつた。

けい子は今夜はこれ以上待つてゐても仕方ないと心に決すると、それきり彼の來なかつたことを餘り氣にかけなかつた。この日を境に、良三とは二年近くも會はなくなつたし時にはもう永久に會へぬのだらうと考へたこともあるくらゐなのに、どうして、この日彼の來ないのをそれほど氣にかけなかつたかと後年考へたことがある。我が身に起る運命的な出來事をいつも豫知するやうに思ひ做してゐる自分だから。

それは兎に角として、翌日、森の恐怖はあつたが、同じ時刻に——氣にかかるので少々早目に森の入口に行つた。けれど彼は來なかつた。

それでも、彼女は彼が自分を捨てたのではないかと云ふ心配は少しもしなかつた。三四日經つて、彼の下宿の硝子戸のところに雨戸が閉つたきりになつてゐるのを自分の家の縁側から見つけ、——いや、それでも、矢張り、心配はしてゐなかつた。更に、二三日雨戸がたつたきま

だつた。

その中に、ふと胸を不安な影が走り過ぎたのだつた。

「どうしたのだらう?」

けれど、まだ、本當に疑つてはみなかつた。

けい子は、更に四五日經つたある日、吉井產婆と電車の停留場で一緒になり、白い埃道を歩いてゐるときに、良三のことを訊いてみた。大抵のうぶな戀人たちは、相手のことをその周圍の者にいろいろな遠慮や不安や恐れのために訊けないものである。それを構はず、訊けるところは、けい子は世慣れた女のやうに思へるが、實はいろいろな感情を無視できるほど素朴だつたのであらうか。

「ああ、佐々木さんね。」と產婆は言つてから、急に氣づいたやうに、ある目附でけい子を見た。「おけいさんは知つてたの、あの學生さんを。」

「いえ。」とだけけい子は短く答へた。彼女は、初めてはつとして顏が赤くなるのを感じた。けれど、態度の緩慢と云つてもよいくらゐゆつくりなけい子には、表情もゆつくりしてゐるので吉井產婆は疑はなかつた。そして、普通の聲に戻つて、

「佐々木さんは、田舎のお家にかへつて了つたんですよ。どうして、急にそんな氣になつたのか知れないけど、惜しいことですよ、お友達の話だと、なんでも學校を止して了ふらしいんだからね、大人しい、よく出來た人なのに。」

けい子は、この言葉の途中で、危く、びつくりした聲をあげるところだつた。田舎の家に歸つたと吉井產婆が言つたとき、「田舎へ。田舎へ歸つたつて！」と口元まで出たのだが、相手がそんなことには、まるで氣づかずに自分の言葉をかまはず續けてゐるのに押へられて、聲にならなかつたのだ。

けい子は、それきり目を俯せて、何も言はなかつた。もう、頭の中が混亂して了つた。後になつてから、彼の田舎はどこかと聞いておけばよかつたと思つたが、それは、後の祭だつた。あの混亂した頭では、何げなく聞くだけの餘裕もなかつたし、それどころか、聞くことに氣づくのすら無理な話だつた。あの瞬間が過ぎたら、又、改めて吉井產婆から聞くことは流石にできぬことである。まことにうかつな話だが、けい子は良三の田舎を知らない。ただ埼玉とだけいつか母から間接に訊いただけだつた、彼女には田舎がどこであらうと、そんなことは問題ではなく、彼女の心が奪はれてゐるのは、目の前にゐる佐々木良三と云ふ男の生身の體と生きた

魂、それだけだつたのだから。

けい子は、一日二日、自分が何か考へてゐるのか、全く何も考へてゐないのか、さつぱり解らないやうな日を送つた。夢うつゝの日である。けれど、混亂の中でどちやどちやと考へてゐたのだ。吉井產婆も、良三が何故かへつたのか解らぬと言つたが、けい子には一層解らなかつた。それよりも、彼に自分を捨てる氣なのかどうかが更に解らない。自分を捨てるなぞとは、どうしても信じられない、けれど、さう思はなくてはいけないのかも知れぬと、そんな風に考へる。まるで自分では信じられないのだが、他人から無理にさう思ふやうに仕向けられてゐるみたいである。

「あたしは、捨てられたのか！」

けれど。捨てられた屈辱感ではなしに、もう、あの人が再び自分の前に現れぬかも知れぬ、自分の大切な大切なものが手の中から消え失せたと云ふ悲しみで一ぱいになるのだつた。

けい子は、彼に會つた最後の日のことが頭に浮んできた。淺草に行つた日のことである。

良三を疑つたりしたことのない彼女は、初めてあの日、すでに自分と別れる意志をもつてゐたものかと考へてみた。

成程、ある省線驛のプラットホームで待合せたときは、いつも森で會ふときとはちがつて。不機嫌な顏をしてゐて、なるべく彼女の顏を見ないやうに、又、電車にのつてからも、どことなくよそよそしかつた、どうして、そんなに不機嫌なのか、何か自分に怒つてゐるのかとけい子は心配になつて、そつと顏を下からうかがふやうにして、二言三言話しかけた。すると。彼はけい子の心配を一層掻き立てるやうな、不愛想な表情と、木で鼻をくくるやうな返事をするきりだつた。すつかり、彼女は胸が苦しくなつて、再び話しかける勇氣もなくなり、淺草につくまで悲しさうな表情で俯き勝ちだつた。

ところが、淺草の六區のあの雜沓の中に這入ると、彼はまるで人が變つたやうに生々となり、いつもの彼に戻つたのだつた。そして、人と人との肩にもまれながら、彼女の體を抱くやうにぴつたり寄り添つて、微笑しながら戯談まじりの言葉をけい子の耳元に囁いたり、大膽な眼付で、いかにも可愛いゝと云つた風に彼女の顏を凝視めたりした。けい子には、この變化がどう云ふわけか解らなかつた。知合つてから、二人で晝日中、人の中に出たのはこれが前にも後にも始めてだつた。そこに何か原因がありさうだとは思つたが、深くは解らなかつた。それに、雜沓の中で機嫌の直つた彼と體を寄せ合つて歩いてゐる中に、あの息苦しいやうな嫌やな

思ひを、けい子はすつかり忘れて了つた。

彼は最初から、彼女をレビューに連れて行く積りだつた。彼女はまだ見たことがなかつたし、一度は見たいやうに言つてゐたからである。

ところが、いざ這入るとなると、彼女は急に、這入るのを拒み出した。

「だつて、前から見たいと言つてゐたぢやないか。」松竹の大きなレビュー劇場の前に立つて良三は當惑顏で彼女を見た。今度は彼がけい子の變化が解らなくなつたのである。

「でも、いや。」妙にきつぱりとけい子は同じことを繰返した。

けい子はまだ嘗つて、彼の言葉に反對したことがなく、又、彼の方でもどんなことでも素朴に善意に解して自分につき從ふものと考へてゐただけに、良三はこの强硬振りにびつくりした。けれど、彼女の顏を見てゐる中に、彼女が余りに意氣張つてゐる表情なので、急に可笑しくなつてきて、思はず笑ひ出した。

「ははは……。ぢや、止さう。お姫樣の仰言ることなら、何んでも從ひませう。」

戯談半分に良三は言つて、足を轉じたのだつた、そして、彼女の言ふ通りに、ある西洋物をやつてる映畫館に這入つた。

後になつて考へると、どうして、あんなに強硬に反對したのか。けい子自身不思議だつた。いや、あの反對してる最中も、そんな強硬な自分を不思議がつてゐたかも知れない。けれど、自分でもどうにもならぬほど、さうせずにはゐられなかつた。原因はなんだらうと考へてゐると、はつきり、これがさうだと言へないやうな氣がする。けれど、底を割つて言へば、嫉妬である。そして美しいレビューの少女たちから愛人を守る本能的な警戒なのだ。良三が見れば、側にゐる自分のことなぞ忘れて、あの美しい踊子に心を惹きつけられるに相違ない。その良三のそばにゐるなぞとは、とても堪らない、いや、考へるだけでも我慢ができないのだ、これは、可笑しな話だ。笑はずにはゐられない嫉妬だ。けれど、けい子にとつては、もう體中がわなわなふるへてくるほどの辛さで、どうにもしやうがないのだつた。

彼女は、嘗つて、嫉妬と云ふ感情を經驗したことがなかつた。まして、自分が一度は見たいと思つたレビューの踊子たちに、こんな氣持を抱いたことはなし抱くと考へたことすらない。いや、××座の前に立つまでは思ひもしなかつたことである。成程、踊子たちは、自分と同じ女である。けれど、實際には、女から脱け出した「見せ物」に過ぎない。そんなものが、どうして、良三に對する自分との戯爭者になり得よう、そんな風に、後になつて思ふのだが、その

ときには、彼女を冷靜にさせるに一文の値打もなかつたらう。あの素朴單純なけい子にこんな桁外れの嫉妬があるとは不思議とするほかはない。

けい子は、それらのことを、今、なつかしく、悲しく思ひ出した。そして、「ちや、止さう。お姫樣の仰言ることなら、何んでも從ひませう。」と戯談半分に笑ひながら、自分の言ふ通りにしてくれた良三の機嫌のいい顏を思ひうかべた。

「あの、機嫌のいい顏付の下で、あたしを捨てようと考へてゐたのだらうか。」けい子は顏を青ませて考へ込んだ。

「いえ、そんなことは思へないわ。」彼女は狂はしげに、併し、それを抑へるやうにして呟いた。

それから、その夜、郊外電車を下りてある町角の電柱の下で別れたときのことも考へてみた。これが、彼の顏を見、彼の聲を聞いた最後である。けれど、一日一ぱい遊び廻つて疲れてゐたし、一週間程經つた次の同じ金曜日には會へると解つてゐるので、特別な氣持で、彼の聲を聞き彼の顏を見なかつたので、記憶もはつきりのこつてゐない。けれど、別れるほんの一瞬前、けい子は一緒に彼との遊がことに飽滿し疲れるほどになつてるのに、その飽滿し疲れるほ

どになつてゐるために反つて、もつと一緒にゐたいやうな惰性的な氣持になつた。そして、
「もつと、一緒にゐたいわ。」と甘えるやうに見上げると
「ぢや、夜中ぢう、歩いてゐようか。」と笑ひ出した。
けい子には、それらの記憶だけは、まざまざとのこつてゐた。そして、あの笑ひ聲や、熱情的に抱かうとした動作の裏に、自分を捨てようとしてゐたとは、どうしても考へられなかつた。
「ああ、あ！　そんなことはない、そんなことはない！　自分を捨てると考へてゐたなんて——。」
けい子には、彼が去つたことが、どうしても解らない、何か一時、魔がさしたのだと考へるより仕方がない。
「今に、今に、きつと歸つてくる！」
彼女は、矢張り、さう思ふのだつた。
考へてゐる中に、良三が田舍に歸つたのではないやうな氣がした。吉井產婆は、さう言つたけれど、何かの間違ひか知れぬし、引越すときの都合から、さう言ふ方が圓滑に行くので、言

つたのかも知れない。
どうも東京にゐるやうに思へて仕方がない。すると、東京にゐながら、自分の所に、半月も一月近くも現れないのは、捨てたのだと云ふことになりさうだが、そして、さう考へぬことはないが、矢張り、捨てたのではない、何かの都合で來られないでゐると云ふ風に考へ直すのだ。
彼女は、ある日、會社を早目に退出すると、家へかへるとは反對の市電にのつた。本郷に向つたのである。松住町で乘換へて、本郷三丁目の交叉點で降りた。大學の方に歩いて行つたら、途中で會ひはしないかと　わざと、そこに降りたのである。はす向ひの明治製菓の白い建物を見たり、向側の交番を見たり、きよろきよろと見廻したりしてから　交番に向つてレールを横切つて行つた。
同じ東京の街でゐながら、この通りは全くと言つていいくらゐ、違つてゐる。人も歩いてゐれば、バスも走つてゐるのに、なんとなく、靜かに落著いてゐる。莊重とか典雅とか云ふ言葉そのままではないが、それに近い匂ひがある。大學生が歩いてくる、こざつぱりした服に身を包んだ學者らしい男もくる。けい子は、胸がはげしくどきどきし出した。彼に會へさうだと云

ふ楽しいやうな恐いやうな豫感のためであるが、同時に、この街獨特の雰圍氣に接して、思はず彼に會へたやうな錯覺にとらはれたからである。その雰圍氣は、彼の體についてゐた一種の匂ひと、どこか共通してゐるのだ。

けい子は大學の構内に沿うた歩道とは反對側の街路樹の下を、兩側を見ながら、歩いて行つた。構内は木が繁つてゐて、その木の繁りの間に震災後できた立派な建物や古い赤煉瓦の夫れらの一部分がちらちらと見えた。あの郊外の道では、若さが體の外に溢れ光つて人目を惹くけい子は、ここでは場所柄が合はぬせいか、ひどく慘めに見える。良三と別れてから、なんとなく鬱々として元氣がなくなつてゐるために、一層哀れなくらゐ慘めに見えるのである。體の美しさのために、安つぽい着物が打消されてゐたのに、今はその着物が更に慘めさを強める役目をしてゐた。彼女自身はそんな氣はないのだが、じつと見ると自づと男の心をひくやうな光の出る大きな美しい目も、却つて、卑しゆぼく見える。從つて、誰も氣をつける者はなかつた。ただ、夢中で兩側を見て歩いてゐるので、目の前に人がくるのに氣がつかなかつたため、一人の脊の高い大學生と危く突きあたるところだつた。その大學生の方では四五歩前から避けようと努力を拂つてゐるのに、けい子がまるで注意してゐないので、衝突しかかつたのである。大

學生は苦笑しながら、この慘めな感じの娘を見たのだつた。けい子は、水でも浴びせられたやうに初めて氣付いて、思はず赤くなつた。

二度ほど良三らしい人影を見つけて追ひかけたが、人ちがひだつた。一人は正門前の道を落第横丁の方に消えて行つた。他の一人は古本屋に這入つて、もう夕方近い薄暗い店内で本を外の方にかざして見はじめた。この男は、とても良三によく似てゐたので、三度ほど店の前を行き戻りつした。一時は、胸がドキドキし、目がくらむほど亢奮したのだつた。

けい子は、本郷の通りを根氣よく二度往復した。そして、いつか大學の構内が木の繁みと一緒に薄闇の中に沈んで了ひ、美しい硝子戸をめぐらした菓子店やレストランに燈が明るくともつた中を、しよんぼりと引揚げなければならなかつた。

けい子の身の上には、つづいて、嫌やなことが起つた。それは、永い間、神經痛をわずらつて廢人のやうになつてゐた父の辰次郎が郷里の木曾で死んだのである。

弟妹たちを十吉の母に頼んで、取るものも取りあへず彼女は母と一緒に新宿驛から中央線の列車に乘つた。母のおときの背中には、一番下の妹がくくりつけられてゐる。

鹽尻で乘換へて二三驛行つたところが、父の故郷だつた。東京では、やつと暑熱が去つて、

秋のいい氣候が來てゐたところなのに、もう木曾路は冬の氣配だつた。今年は早く冬が訪れさうだ。そろそろ鵜の鋭い聲の間から霰が降り、そして、雪がやつてくるだらうと話してゐた。

その土地は山峡だつた。兩側に見上げるやうな高い山が聳え立つて、その間を奈良井川が冷たく光りながら流れてゐる。そして、その流れに沿つた僅かな平地に民家が、冬の寒さを恐れるやうに縮まつてゐる。屋根には、はげしい山風を防ぐために石がごろごろとのつてゐる。少しばかりの畠が山の傾斜にあることはあつたが、この土地の主な仕事は山から伐り出した材料で漆器を作ることであり、他は山に伐木や炭燒に行く。

流石に東京風のけい子の姿は、この山國では目立つらしく、若い男の目が彼女の姿を追ひかける。割合平氣なけい子は、それが今はひどく煩はしく、さけるやうにして奈良井川に出てみた。葬式のすんだ翌日である。父の直接の死因は心臓麻痺であつたが、この一二ヶ月神經痛がひどく亢じて、稍々もすると自棄を起して半狂亂のやうになつたと云ふことだつた。剽輕な親戚の男は、そのときの形相を眞似て見せて皆を笑はしたが、けい子はみなと一緒に笑ひながら、心中息のつまるやうな苦しさを覺えた。彼女は今、それを思ひ出して、父を心から哀れに思つた。父と母とは愛し合つて、一緒になつたと云ふ話である。母の家は東京でも相當にやつ

てゐた商家なので父との結婚はなかなか許されず、二人はそれを突き破つて一緒になつた。けれど、父の仕事は事毎に失敗し、失敗する度に頑が悪くなつて、晩年の二三年は母に苦勞をかけつづけだつた。無理なことも隨分言ひ、手荒なことすらした。けい子は母に同情し、その同情が強まれば強まるだけ、父をうとんずる氣持が時々胸をかすめたのを記憶してゐる。けい子は、今それがひどく濟まなく思はれ、もつとよくして上げるのだつたと考へると、父が可哀さうでならなくなる。

「お父さんは、一人ぼつちだ。一人ぼつちだと自分でも思つたかも知れない。その上、一人ぼつちで死んで行つた。」

奈良井川は靜かに流れてゐる。前の聳えた山影がうねうねとした水の表面に浮んでゐる。けい子は、自分でも氣づかぬ中に、一ぱい涙を流して泣いてゐた。後年、良三から「お前は泣き蟲だね。」とよく言はれたが、實際、鳥渡したことにも涙が出てくるやうになつた。彼女は口では何も言はず、喜びも悲しみもただ涙で現はすと云ふ風になつた。と言つて、人前では、それこそただの一度も涙を見せたことがなく、むしろ、さう云ふ意味では頑なくらゐで、良三の前と自分一人だけの場合に限られてゐた。

けい子は泣いてをる中に、いつか、良三のことを考へてゐた。

父は一人ぼつちだつたが、自分も一人ぼつちだ。父はその孤獨に耐へかねて、どんなに苦しんだか知れぬが、自分も彼に去られて以來、どんなに苦しんでゐるか、父と同じくらゐに、いや、父以上に苦しんでゐるかも知れないと思つた。父の一人ぼつちの氣持を察して、本當に可哀さうになつたが、さう云ふ自分だつて、どんなに可哀さうな女か知れない。そして、ほんの今、父のために泣いてゐたけれど、父のためばかりでなく、同じやうな運命の自分のことも泣いてゐたのではないかと思つたりした。父のことを契機にして、實は自分の非運を泣いてゐた、可哀さうな自分に泣いてやつてゐたやうな氣すらしてきた。そして、それが、いかにも本當のやうに思へた。

この十日ほどの間に、自分の境遇がひどく變つて了つたことも考へた。彼女は女事務員を止して、同じ工場の僻版女工になつたのである。それは、一家の經濟的な事情のためであつた。

資本も技能もない女手で、多くの子供を養ふだけてもよろけける。その上に、長い間の父の療養費である。これでは、借金は增す一方である。もうどうにも支へきれぬと母に打開けられたとき、けい子はとつおいつ考へなやんだが、矢張り自分のことは差措いて一家のために仕へよ

うと決心したのだつた。月給三十二圓の女事務員を見捨てて、日給一圓二十錢、三年後、五年後には二圓にまでなる女工にかはることにしたのである。

良三を知る前の彼女だつたら、とつおいつすることも惱むこともなかつたらう。素直にそして直ちに母の言ひなりになつたであらう。けれど、良家の子弟である良三を知つた今は、さう簡單にはゆかなかつた。はつきり言へば、どうあつても、女工にはなりたくない、女事務員の自分と女工の自分とが變りはあるとは考へられぬが、女事務員はどんな階級へものびることのできる橋のやうに思へた。女工は橋ではない。他の夫々とはつきり川なり溝なりをへだてた一つの群である。

良三は彼女が女工だらうが女事務員だらうが、或ひは駄菓子屋の娘だらうが、まるで問題ではないやうに見えたが、けい子は一種の貧乏人の本能で、「川」や「溝」を無意識の中にも鋭く嗅ぎつけてゐたのだ。

「あの人は、あたしが嫌やになつて了はないだらうか。」

なんと云ふことであらう。身を顧ればすでに彼は去つた今である。然るに、胸にくるのは、彼との問題なのではないか。

「もうあの人は、自分の側にはゐない。それだのに……」

けい子はさう云ふちぐはぐな考へ方の中にゐる自分にふと氣付くと、それが一層悲しいものに思へた。

七、故郷にて

良三の故郷は、埼玉縣の秩父の山の中にある。山の中と言つても、波のやうなゆるやかなそして小さい幾つもの丘陵をふくめた臺地ができてをり、そこに、畠もあれば、水田さへある。而も、相當高い海拔に達してゐると見え、周圍に餘り山の姿が見えないのだつた。そのために、山地にゐることが嘘のやうな氣がする。

けれど、試みに、畠の向ふに見える杉木立のところに行つてみるとか、細い櫟の生えてる丘陵の上にのぼつてみるとかすると、直ぐ目の下が數千尺もあるかと思へる斷崖になつてゐて、その向ふに、山なみが折重なつて、起伏してゐるのを發見する。そして、その山なみの、ある山には太陽があたつてゐたり、ある山は陰つてゐたりして、それが仲々美しいと云ふことも、それから、杉林のかげや、丘陵のかげから不意にもくもくと白雲が湧き上つてくることがあるが、それも道理だと理解できるのである。

良三はこの土地に歸つてくると、殆んど、家の中に引込んでゐた。

村の北寄り、美しい杉の木立が高くのびてゐるところに、秩父霊場の一つにあたる寺がある。それに隣して、風雨にさらされ幾分色あせた黒板塀をぐるりと廻した大きな構へがある。塀の内側には、瘤々だらけの年古りた榎がそびえてゐて、その側に二つならんだ倉の白壁、やはなれて母屋の重さうな高い破風屋根が見える。昔は藁葺きであつたのを、その上にブリキを被せたので、屋根がひどく大きく、隣の寺の本堂と殆んど變らない大きな構へになつてゐる。それが、良三の生れた家だつた。

彼が突然、生家にもどつたのは、自分の氣紛れからではない。姉の良人である義兄の重態で呼びもどされたのである。良三は卑屈で小づるいところのある義兄に餘り好感はもつてゐなかつたが、取るものも取りあへず、かけつけたときには、すでにこの世の人ではなかつた。直ぐと葬式である。姉たちは佐々木家の分家として、本家から二町ほどはなれた丘陵の裾に、本家と同じやうな構への、但しその三分の一ほどの大きさの屋敷を營んでゐた。けれど、良三が田舍にもどる考へがないので、大體、義兄夫婦が本家のあとも行く行くは嫁ぐ關係だつたから、葬式も本家で行つた。

良三は葬式がすんで二三日經つと、身も心もひどく疲れてゐるのを感じた。すると深いところに落込んで行くやうな意識の疲れである。そして、時々不意にどこからともなく悲しみが湧いてきて涙が出さうになつた。

一つの葬送の儀が、このやうに人を疲らすとは思ひもかけなかつた。彼が宰領したのではなく、むしろ、手傳ひと云つた形であつたが、心はそのために自づと引きずり廻されたためであらうか。

けれど、ただ葬儀に關係したことではなく、東京生活の風雨が身と心にひびを作つて喰ひ込んでゐた。それが人間の死にまつはる紛雜にきつかけを見付けたのであらう。又、義兄に對しては、前述した如く、何らの好感もいだいてゐず、自分の心の外に放置してあつた筈であるが、肉親とつながつた彼の死は、やぱり無情の風で良三の魂を搖ぶつてゐたためでもあらう。

分家の屋敷では、作男と下女を一人づつ使つてゐた。彼等をのこしたまま、姉の節子は本家に來てゐるときの方が多くなつた。ある日歸つたかと思ふと、その翌日來たときには左手を白く繃帶してゐる。うつかり鐵瓶の煮え湯でやけどしたと云ふのである

良三の見てゐるところで、敷居につまづいたこともあつた。

「ああ。」と節子は虚ろな細い聲を出して、膝をついた。
良三はじつとそれを見た。島渡の間、默つてゐたが、
「どうしたの。」と低く淋しい聲で言つた。姉の行動よりも、彼女の心の中を問ひかけたのである。
姉はそこに良三のゐたことを初めて知つたやうな目をし、つゞいて、微かに恥かしさうな笑ひ方をした。
「どうしたんでせう。」
その姉の笑ひ顔は、反つて、淋しさうに見えた。
良三は、さう云ふ姉からも力の抜け細つて行くやうな淋しさが自分の淋しさとして身内にしみ入るのを感じた。
姉は良人に對して、生前物足りなさを感じてゐた。專問學校まで出た彼女には、中學を出だけの良人に教養的な不滿足を感じてゐた以外に、人間としての卑小さがそれとなく解つてゐたからであらう。さう云ふ良人でありながら、死なれてみると、氣の抜けたやうになつてゐる。良三は、その姉に齒痒さを感じ、何者にとも知れぬ一種の怒りを覺えた。その齒痒さ

と怒りは、姉が結婚するときまつたとき、その相手があの男だと解つたときに起つたそれと同じものであつたやうだ。
けれど、その齒痒さも怒りも、いつか、たまらない淋しさに變つて行つた。丁度、燃えた火が消えたときには、火の點く前よりもはげしい淋しさになる、その淋しさに似てゐる。
姉には二人の子供があつた。七つと四つである。四つの男の子は、葬式の棺の出るとき、大きな夏密柑を持つて、嬉々として人々の間を駈け廻つてゐた。それから、自分も棺の中に這入つて、お父ちやんと一緒にお寺に行くと言つてきかなかつた。そして、それを拒む祖父の手の中で大聲で泣いた。それらの情景が、良三の頭の中に時々横切つて行つた。
良三には人生と云ふものが解らなくなつた。人間はなんのために生れてきたのか、そして、なんのために欲望をいだいて駈けめぐるのか。泣いたり喚いたりするのは、どう云ふわけか。彼には、すべてが淋しくつまらなく思へた。
彼には、以前枯野原をふらふらと夢遊病者のやうに歩いてゐた、あのときの精神狀態が、再び襲つてきてゐた。そして、あのときよりも、もつと深刻な形で。これは時代　せいだ、時代にもまれて、泳ぎ疲れ泳ぎ切れなくなつたためだ、それが他人の死で心の奥から引きづり出さ

れたのだらっと良三はインテリらしく、ぼんやりした頭で考へることもあつた。

良三は晝間でも、うつらうつらと眠つたり、それかと思ふと、夜中に鋭い神經が益々とぎすまされてゐたりした。まぶしさうな目で椽側に立ち、秋近い畠から午飯にもどつてくる作男の生々した顏の艶を不思議さうに見たりした。

彼はもう何をするのも物憂くつまらなく、虚しく思へた。大學に再び行くなぞは、まるで念頭になくなつた。東京に行くと云ふことすら、考へなゝなつた。どこに行き、何をするか、全く彼には考へられなくなつた。東京には、けい子が居ること。そして、そのけい子に一種の責任のあることも自覺しないではないが、そんな風な考へ方をすることがすでに淋しくつまらなく思へた。

良三は、心配する親の目をぬすんで、友人の一人に書留の手紙を出し、吉井産婆の部屋代を拂ひ、荷物をまとめて預つてくれるやうに言ひ送つた。近く、その荷物はどうにかしよう、もう自分は大學に行く意志はないのだからと附加へて。

後篇

一、再會

あれから、三年經つ。

けい子は、相變らず、小石川の明治印刷に通勤してゐた。良三と知り初めた頃のやうに事務所の机の上ではなく、工場の中で解版女工として働いてゐた。娘らしい幸福にも不幸にも無感覺になつたやうな、むすつとした表情で默々と働いてゐたのである。日給は一圓二十錢から、一圓八十錢にまでのぼつてゐた。

彼女は子供時代から跳ね廻つてはしやぐと云ふことはなく、いかにも多くの弟妹たちの姉として宿命づけられてゐるやうにしつとりと落着いてゐたが、それでも、片頰に笑靨のできる表情で、時々につと笑ふのだつた。けれど、今では、その笑顏も殆んど見た者はなかつた。

「どこか、體でも惡いのぢやないか。お醫者さんに診て貰はなくていいかい。」母のおときは

眉を曇らして言ふことがあつた。

けい子は毎日が不幸だつたのだらうか。もう良三のことはあきらめてゐたのだらうか。

たしかに、彼女は不幸だつた。又、良三のことをあきらめたやうな氣持になる日もあつた。

けれど、心の底の、その底のところでは、少しもあきらめてゐないし、それどころか、きつと彼が目の前に現れると信じてゐた。これは、自分では、はつきり意識してゐたのではない。少しも、自分自身は氣がついてゐないと言つてよいかも知れない。だが、冬のある寒い日、霙のぼたぼたと天地を暗くして降つてゐた日、彼女の目の前に突然、當の佐々木良三が現れたとき、自分が彼に別れた三年前のあの淺草に一緒に行つた日以來、一日として彼が戻つてくることを疑はなかつたと、氣がついたのだつた。成程、その反對のことを思つた記憶もあるが、それは、太陽の表面をすぎる薄雲のやうなものであつて、自分にとつてなんの本質的な考へではなかつたと思ひ返すのである。

けい子は、「蟲が知らせる」と云ふことを信じてゐる。何か事件が起るときには、それを豫知するのである。丁度、その日の朝も、かすかな胸騒ぎを感じた。けれど、それは、ほんとにかすかなもので、薄い薄い雲のかげりのやうに、胸の上を通りすぎると、そのまま忘却の中に消

えて行く程度のものであつた。實際、彼女は良三に會つてから、自分の家にもどつたとき、ふと、今朝、「蟲の知らせ」のあつたことに思ひあたつたぐらゐで、彼に會ふ直前には、それをすつかり忘れてゐた。

いや、忘れてゐたのではない。その「蟲の知らせ」を思ひちがへてゐたのである　と云ふのは、その日は朝から曇つてゐたので、萬一の用意に雨傘を持つて出た者はあるけれど、まさかこんなにひどい霙にならうとは誰も思つてゐなかつたらう。ところが、けい子は何んだか惡い天候になるらしく思つて、雨傘と高下駄の他、母の古びた雨コート――コートなぞとは呼べない粗末な雨具をもつて出た。すると、果して午後になつてから雪になりそれに風がまじつたと見る中に霙になつた。「ああ、よかつた。矢張り、蟲の知らせが當つたのだわ。」今朝のかすかな胸騒ぎを思ひ出しそしてそんな風に解釋したのだつた。

けれど、その日は、それ以後特別なことのなかつた、極めて平凡な、いつも通りの日だつた。おとなしく、つつましい彼女に似合はず職場で不正なことをされると腹を立てる彼女は、その日も若い職工と二言三言口喧嘩したこともいつもの通りだつた。餘りに、いつもの通り過ぎて、三年振りで良三に會へると云ふ大事件の起る日のやうではなかつた。

従つて、なんの心用意もなく、いつものやうに郊外電車を下り、同じ停留場で下りた五六人と相前後しながら例の良三と最後に別れた電柱のところを曲つた。横降りしてゐた雲は、稍々小ぶりになつたので、傘も眞直ぐに立て、家並のとぎれた野原、そして、そこのなだらかな坂を、いつもの彼女らしい肩も手も動かさぬ歩き方で歩いて行つたとき、彼女の目に思ひがけぬ人の姿が這入つたのだ。その男は、坂を下りきつたところにあるバスの停留場の標柱のところに、一見バスを待つてでもゐるかのやうに立つてゐる。佐々木良三なのだ。

雲のために暗くかすんでゐるけれど、良三の方は坂を下つてくる彼女をずつと前から、その歩き方で認めてゐたらしかつた。彼女が氣付いたのは、彼の目鼻立がそれと解る五六間手前にきてからだつた。尤も、良三は黒の二重廻しを着て、あの別れた頃の學生らしい樣子は全くなかつたので、遠くから姿恰好で判斷することは誰にもできなかつたらう。

けい子は彼だと解つた瞬間、驚きも何も感じなかつた。まるで、珍らしくもない人を見るやうに、併し、まじまじと見た。まじまじと見たのは、たしかめる氣持である。

良三の方でも、久振りで會ふ彼女の表情から、彼女の自分に對する心理の動きを見ようとでもする如く、脫むやうな目でゐたが、その目に微笑がふとたちのぼつた。すると、まるで、そ

れに照應したかのやうに、けい子は愕然とした。——少々誇張的ではあるが、氣持としては、やはり、愕然としたのである。「三年前に見失つた」良三だとはつきり氣がついたのだつた。その愕然は、驚きでもあつたし、又、歡喜の噴き上がる形でもあつた。彼女は目のくらむやうなよろこびに襲はれた。危く、雲をついて、傘も何も投げすてて彼のところにかけよりしがみつかんずとした。

けれど、それは心の姿だけに止まつた。自分の前に一人歩いてゐる男があり、又、こちらに向つて歩いてくる他人の人影のあるのを咄嗟に知つたためばかりではない。何かが、——恐らく、例の彼女のつつましさなのであらう——それがそんな亂暴な行動を途中で喰ひとめたのである。

けれど、そんなはげしい歡喜とは反對に、顏の表情は氷つたやうな冷たさだつた。よろこびと云つても、只のよろこびではなく、運命的な切ないくらゐのよろこびは、そのやうに表情を氷らせるものであらうか。

そして、いつもと同じゆつくりした足取りで彼に近寄つて行つた。

良三は、勿論、出會ふことを豫想してそこに待つてゐたのだつた。けれど、前後の通行人の

手前、いかにもバスを待つてゐたかのやうに装ひつゝ、二歩三歩坂の方に歩みよつて、そこで相對した。けい子は、もうそのときは顔を彼からそむけて稍々うなだれてゐた。

「久し振り」

良三は霎のために、自分たちを他人が特別氣をつけぬと思つたが、それでも、周圍を顧慮して、そんななんでもなげな挨拶をした。

それは、彼として心にもない言葉だつた。言はでものことを言つたと後悔した。そのとき、彼には、高い感情が湧いてゐたからである。けれど、彼女は勤めを止してこの道を通らぬかも知れぬし、或ひはすでに結婚をして了つてゐるかも解らぬと云ふ不安が良三にはあつた。ところが、彼女は三年前と少しも變らずに、同じ時刻に、同じ道に、而も、全く變らぬ顔かたちと髪の結ひ方と例の印象的な歩き方とで現れた。良三は瞬間泣きたいほどの感動を覺えた。

二人の間に、よろこびが滾々と涌いてきさうな豫感が胸に一杯になつた。良三は、けい子が顔を横にそらしてゐても、凍つたやうに固い表情をしてゐても、そんなことは氣にかからかなつた。昔とそつくりの髪かたちや、例の體を動かさないつゝましい歩き方や、彼女の母のちみな雨具までなつかしげな目附がじつと見た。

良三はそれきり默つて彼女の家に通ずる道を歩き出した、彼女も默つて、その後からついて行つた。けれど、良三は喋つてゐる以上に、何か樂しさが一杯、胸にみちた。時々、うしろからくるけい子を愛情のある目で振返つた。

ところが、けい子は遠つてゐた。會つたよろこびが切ないほどだつたのに、そして又、三年前に別れて以來、會ひたくて會ひたくてどんなに心を苦しめたか知れなかつたのに、今、彼の後から霎道を歩きにくさうについて行く中に、あのよろこびはふつと消えて了つた。そして、今日會つたことに、恐れと心配とを鋭く感じた。

「會はなければ、いつそ、平安でゐられたのに。」さう思ふのだ。彼女は彼が去つて以來、餘りに苦しんだためである。會つたよろこびが大きいので、再び別れるときの苦しみが直ぐ胸にくるのである。彼女は運命的に自分たちは結びつけられてると云ふ信仰をもつてゐる筈なのに、その信仰は姿を消して了つた。

彼は横道にそれて、草茸きの百姓家が三四軒あるきりの森や古池の方に進んで行つた。もうそこは誰一人通る者はなかつた。ただ、霎だけが眼前を遮つてゐた。

良三は立止まつて、自分の洋傘をとぢ、彼女の傘の中に這入るやうにしながら、けい子の體

を霧にぬれた雨具の上から抱かうとした。

彼女は、それを拒みはしなかつた。又、彼は拒まれようとは、露考へてゐなかつた。

ところが、稍々顔を俯せた彼女は、

「會はなければよかつた。」と低い低い蚊の鳴くやうな聲で言つた。

彼女の髪の毛に頬がふれるばかりになつてゐた良三は、はつきり聞きとれなかつたらしく——聲が聞こえぬと云ふより、聞きちがへたやうに思つて、「え？」と聲には出さぬが、顔を彼女から引く動作をした。

彼女はもう、それには答へなかつた。彼が顔をのぞき込むやうにすると、逆に一層俯向くことで、その答への代りにした。

けれど、良三は少しも氣にかけなかつた。もう、全く普通りの彼である。例へば良人が長い旅行をして來ても、その旅行前の態度と直ぐ結びつくやうに、良三には三年の月日が無視されてゐた。少しぐらゐ、細君に變つた様子や仕草があつても、なんの氣にもかからないのである。

彼は三年前にこの女を捨てたことも、現在苦々しい結婚生活をしてゐることも忘れたかのや

うだつた。夜になると、あの森に會ひに行つたそつくりその時分の彼になり切つてゐた。默つてゐたいときには默つて居り、話したいときには、話すと云ふ態度である。自分の故郷の數千尺もあるかと思へる斷崖の話をした、又、二三日前、見に行つた三井コレクションの話をした。かと思ふと、ある男と女の情熱的な戀の話をした。けれど、うまい具合に、故郷の話をしても、あの捨てたことには彼女に觸れさせず、自分もそれを意識せずに濟んだし、戀の話をしても、現在の結婚生活に關係せずに終つた。又、ぽつんと話を切つて歩いたが、さう云ふときも、彼は氣がついたやうに霧から彼女を庇つてやるために、立止まつたりした。

けい子も、彼が己れの話に氣をとられて霧が二重廻しの肩にかかつてゐると、手で拂ひのけてやつた。彼女は無意識に其の辯が出たが、彼も無意識に立止つて拂ふにまかせたりした。

彼女はいつか、彼の昔のままの態度の中に引きずり込まれてゐたのである。先刻の恐れや不安や心配は、霧が自づと薄らぐやうに消えてゐた。三年前と同じやうに。彼が默つてゐるときには、つつましく默つてゐるし、彼が喋るときには、その話に吸ひ込まれるやうな眼付をして、良い聽き手になつた。

畑道はぬかつて可成り歩きにくかつた。途中、一人の男とすれちがつたが、相手は特別若い

この二人を氣にもせず、行き過ぎた。その姿が霧の中に消えたとき、良三は立止つて、けい子をある眼付で見た。それは、よく森の中で凝つと見詰めるときのあの眼付に似てゐた。すれちがつた男は彼等を變な目で見なかつたけれど、二人きりで而も夕方の霧の中を歩いてゐると云ふ普通でない場面を見られた、その反射作用で情念を突然かき立てられたのであらう。

けれど、良三は直ぐと思ひ直して、再び歩き出した。

けい子は彼のその目には氣付かなかつた。と云ふのは、會つた瞬間のあのよろこびが再び戻つてきてゐて、それに氣をとられてゐたからである。隨分、苦勞をした、だが、矢張り、戻るものが戻つてきたではないか。自分はただの一度も、この日のくることを疑つたらうかと、疑つてみたことのあるのを打忘れて、思ふのだつた。

良三が思ひ切れぬやうに、再び立止まつた、そして、森の彼方を見ながら、鳥渡、默つてゐたが、

「森は、あすこらになつてゐるのだね。」と顎で輕くそれを示した。それから、彼女の顏を見た。

丁度、そのとき、けい子はよろこびが切なく込み上げてきてゐた。自分一人のときと、彼の

前だけに現はす涙が、ふと目に浮び上つてゐたのだつた。

「會へて、本當に、本當によかつた！」彼女はそれを口に出しかかり、けれど、彼女らしく、唇をかすかにふるはしただけで、聲にはしなかつた。けれど、胸の中で、一杯、叫んだ。そして、全身がふるへるやうな氣がした。

二人は暫らくして、街の方に出て行つた。彼が一緒に食事をしようと言つたが、けい子はそれを斷つて、一人で歸つて行つた。

「又、會へるのね、又、會へるのね。」彼女は別れ際に念を入れるやうに、そして、うれしさうな聲で言つて、それから、街の人の目に關らず、二度も振返つて行つた。その人目なぞは構はない、相變らずの彼女の愼しい中にも切ないほどの彼に對する愛情が彼をはげしく打つた。

二、良三の家

東京に行く氣が全く失せてゐた良三が、再び上京したのは、豫想外にも、三月と出ないある秋の日のことだつた。故郷にもゐたたまれなくなつたのである。東京に出たとてどうにもなるものではないと解つてゐたが、それより他に仕様がない。一度、行つたことのある京都の疏水の流れてるあたりの靜かな風景を思つてみたが、それこそ京都に行つたとて、どうにもなるものではない。

やはり群集で一杯な上野驛に降り立つた。ああ、又東京に來たかとちらと眉をくもらしたりしたが、それでもなんとなく、ほッとした。さて、どこと云ふ行くあてもないので、ここから一番近い本郷の友人の顏を二三思ひ出して、相變らずゴトゴトとのろい市電に乘つた。田舍に三月もゐないのに、ひどく東京の女が美しく見えた。

彼は退學屆を大學當局に出すのを忘つてゐたが、今、幸か不幸かそれが役に立つことになつ

た。四五日、友人の下宿にぶらぶらしてゐる中に、その友が外出した後、赤茶けた疊の上にねそべり張出した窓の日除のうら佗しいかげを見てゐると、淋しさが心の奥に刺し通して來た。しばらく見てゐたが、もうじつとこのままでゐる氣にはなれなくなつた。せめて藁でも握む氣持で、學校を續ける氣になつたのだ。

良三は相變らず行つたり行かなかつたりだが、それでも、それきり廢學する氣にはならずに通學してゐる中に、「天平彫刻の形式について」と云ふ題目で卒業論文を書いてなんとなく卒業した。怠け學生で、そして、怠け學士になつた。けれど、初めから終まで怠け放題であつたわけでもない。何かの拍子に、自分が美術史を專攻することにしておいたのを感謝したこともあつた。興味が湧いたのである。殊に、卒業論文の材料を蒐集する頃は、一時ひどく勉强家になつた、それも、やがて元の木阿彌になつたけれど。

良三は卒業すると云ふほどの氣もなく、何か他の力に引きづられる如く、なんとなく卒業したと同じやうに、やはり、なんとなくある女と結婚した。學校を出てから半年ほど後である。その頃は、ひどい就職難だつた。大學を出ても五十圓の月給にありつくのに、二年も三年もぶらぶら遊んでゐた。良三は案外に運よく、ある舊大名の經營してる私設圖書館に職を得て、ど

うやら生活をしてゐたのである。

けれど、就職できたことが、幸運だつたか否か。と云ふのは、その圖書館に出入してゐた速記者の黑木と親しくなり、つづいて、その妹の細野かほると知合ひになり、二三度遊び廻る中に、なんとなく同棲するやうになつたからである。たしかになんとなくである。彼は最初から結婚する氣はなかつた。細野かほると云ふその女とは勿論、大體結婚と云ふことにまだ少しも氣がむいてゐなかつたのである。けれど、かほるが來て泊つて行つたりする中に、速記者の黑木が遠慮勝ちに彼の氣持を打診した。若しも、黑木がそのやうな大人しい性質でなかつたら、又、遠慮勝ちな態度でなかつたら、良三はどんな風に出たか、運命なぞは解るものではない。二十四五貫もある大きな體と獅子鼻の、子供などは一目で泣きさうな恐い顏をした黑木が、その外貌に似合はない遠慮勝ちな態度に出會ふと、出鱈目なかほるとの關係を反省した。そして、結婚しなければ相濟まぬやうな氣がしてきたのである、良三は弱い者に對して、良心的になる性質がある。こんな氣を起させたのは、たしかに黑木のお蔭なのだ。良三は結婚のことを、そして、相手がかほるであることを考へると、失敗つたと思つて、一日中憂鬱になつた。併し、女なんてものは大したものではない、良い女をのぞむのが無理なのだから、誰と結婚し

たとて大きな違ひはないと考へ直してもみた。

さうなると、嫌ひではないかほるはまだましな方かも知れぬ、學問もなし思慮も淺さうだが、なんでも自分の言ひなりになる點が取柄だと考へたりした。

けれど、聞くと見るとは大ちがひ、結婚前の交際なぞは、耳で聞いてゐただけで、自分の目で見てゐたのぢやないと氣がつくまでには、二三ヶ月の月日も要しなかつた。早撮り寫眞のやうに餘り早いのであつけにとられたほどである。取柄の、自分の言ひなりになると云ふのは、遊びのときだけで、家庭のことになると、何一つ言ひなりにはならなかつた。飯の時間がきても飯にはならないし、玄關には一週間も前に吹き込んだ木の葉や丸めた髪の毛がそのままになつてゐる。彼は空腹で焦立ちながらも、どうにも仕方がなかつたし、横目で髪の毛を見ながら、玄關を出なければならなかつた。良三は他人の便利さをしみじみ感じた　今まで結婚には家庭的な仕事が附きものだと云ふことを一度も考へてみなかつた自分に氣がついた。どんな女でも結婚すれば一人前の仕事をするやうになるものだと云ふ言葉にだまされて、等閑に附してゐたのだ。世間に流通してゐる言葉の不信にばつたり行當つたと思つた。

庭には夏草が高くのびてゐて、かほるは日かげがはすかけにさしてゐる座敷にごろりとねこ

ろんでゐる。肥つた白い二つの脛をにゆつと浴衣から出したまま。

これは、荒涼とした島渡味のある畫材になるが、實生活ではかなはぬと、良三は思ふのだつた。さう云ふ光景の良い部分は、この女の中にはなくて、だらしない足のなげ出し方や、草の固い幹が荒々しくのびてるところに、かほるの生ひそだつた家風とも言へぬ家風がむき出しに現れてるやうに、ただそれだけ考へられる。

畫家はかう云ふ中に、「無欲」と「荒々しいが強い生命力」を描き出すだらうが、かほるはその畫家の意圖などとは裏腹で、「無欲」どころか、年中不平をもつてゐるのだつた。「何々さんは日曜ごとに銀座に奥さんをつれて行くわ。」「夏の帶が一枚きりないのは、あたし一人きり。」

だが、庭に草が生えてるなら、良三が自分で刈ればよいではないか。夏の帶が欲しなら買つてやればよいではないか。けれど、草をかつてやつた後には緣側を四ツ這ひになつて拭いたり食べたまま放り出されてある食器を洗つたり、又、帶を買つてやつた後には、フエルトの草履を二足買つたり、銀座を一週に二三回つれて廻つたり、彼女の要求がどこに際限がくるのか見當もつかぬのを恐れるのだ。そして、際限のないと云ふところに、自分が自らなめられてゐる事實を嗅ぎつける。彼はどうしても、この押しよせるかほるの要求に抵抗しないではゐられな

い。

女が、こんなに荒々しく太々しいとは、良三には全く思ひがけなかつた。まるで神經がないみたいである、あつても、細引繩か丸太棒のやうである。彼が庭の高く生えた雜草を見たとき、「ああ、あれだ、あの節があつて固くて太い莖みたいだ」と苦笑ひも出ず悲しい表情で考へたことであつた。あのやうに、甘く體をくねらせて媚びたり、可愛いゝ細い指をしたりしてゐるのに、どうして、あんなに荒々しい圖太い神經をもつてゐるのかと不思議な氣がした。神經どころではなく、性根が荒々しく圖太いのだとも氣がついた。性根だけで神經なぞないのだと思つた。成程、こちらの神經で攻め立ててもなんの反應もないところを以つてすると、神經がないことは笑ひ話だけではない。

良三には、時々、とても抵抗できないことを感ずる。けれど、逃げることも退くこともならない。彼は結婚生活と云ふものの「檻」をしみじみ感ずるのだ。獨身時代なら、嫌やなことがあれば、その場から逃げ出せば事が足りた。逃げ出しても苦しみは相變らず追ひかけてくるなぞとは、今になつてみれば、感傷にすぎない。結婚生活は感傷の餘裕はない。同じ一つの檻の中で、相手の猛獸と一緒にゐなければならないのだ。猛獸——本當に、そんな氣がする。女は

弱いものだ、なぞと云ふ言葉は、何處の國の言葉であらう。

併し、この苦悶をどこに訴へて行くところもない。黒木は相變らず慇懃だつたが、その慇懃さは全く同じ外貌をもつてゐながら、外部の條件の變化と共に、いつかすつかり變つてゐる。かほるを「彼の一家」の中に追ひ込んで、これでほつとしました、有難う存じましたと云ふ顏をしてゐる。そして、自分と、良三の一家との間に、例のどうにも取りつく島のないほどの慇懃さで、頑丈な柵を作り上げて了つてゐるのだ。彼は黒木によつて誘ひ出された良心とか人道とか云ふわなの中にまんまと投げ込まれたと同じだ。

かほるがながしで米をといでゐると、大抵ながしのトタンの上に流れ落ちる米粒の音がする。夕ぐれのいろが迫つて、うらの青桐の葉ずれの音が時々きこえる頃には、その米粒の音も一種の趣きがあり、あはれさがあるが、實際生活の中での良三には、そんな餘裕のなくなるときがある。臺所に立つてゐるときなぞは、

「もつたいないな。」と嘆きが思はず出る。と、まるで、待つてたと言はんばかりに間髪をいれずに、

「やつぱり、あんたはお母さんの子ね！」としつぺ返しをする。自分のうらみも皮肉も盛り込

めるだけ盛り込んだと云つた語氣である。

かほるは、良三の母に一度だけ會つたことがある。良三の家に姉と一緒にきたのである。半日ぐらゐゐたであらうが。かほるが室の隅で何かしてる母に氣付いてみたら、彼女がなげすてた包み紐を丹念にのばして輪に卷いてゐたと云ふのである。

「あたしに對する皮肉よ。意地惡よ。どうせ、あんな紐、自分の家でなら、投げすてて了ふくせに。」と彼女は母の歸つたあとで、憎々しげに言つた。

良三には、あのときのことを、まだ根にもつてゐるのだなと直ぐ頭にくる。いや、あのときのことの先の問題――彼女が母に忌避され、二人の結婚がひそかに反對されてゐる、それに向つての反撥だと解るのである。

良三にも、彼女が反撥する氣持は理解できるが、こんな風にあらはに表現されると、思はず、ぐつと胸にくるものがあつた。良三は、怒鳴りたくつて、口のあたりがむずむずする。けれど、怒鳴つたらそれだけで濟まないかほるであることは解りすぎてゐるので、煮え湯をのんだつもりで、じつと我慢する習慣が彼についた。

良三は結婚するとき、兩親に事後承諾を持つて行つたのだ。「氏も素性もはつきりしない女」

「世帶もちの惡さうな女」そのやうな反對に出られると考へたからである。兩親はこの處置に口を喊した。ただ一言も言はなかつた代りに、結婚の費用も出しはしなかつた。

そんな兩親との關係であつてみれば、二人の家に母がきてくれたことは、感謝しなければならないと良三は思つてゐる。母の心理では、その手前で、どのくらゐ、心の苦々しい屈折を經たか知れぬのだから。

又、さういふ事情なので、結婚生活が失敗であつたとて、一言も兩親のところに言つて行けぬことも彼は深く知つてゐた。

母が室の隅で包み紐を卷いてゐたことは、かほるの口を通して知つたのだが、若しも自分の目でその姿を見たら、それをしてる母の小さな體、そしてその小さな肩のあたりに、息子をあはれに思ふ影を見出したのではないかと思つたことがある。利口で、田舍者には珍らしく神經の行屆く母には、一目この家を見ただけで、「不幸な家庭」を早くも感じとつただらうから。

三、美しい心

良三は二度目にけい子に會つたときに、自分が結婚してゐることを言つた。

丁度、幹の太い孟宗の竹林と竹林との間の道路を出はづれたときである。二人が會はなかつた三年の間に、附近の町村を合併したので、そこらも新市内になつたわけだが、畠と林と赤土の坂道ばかりで人家が點在してゐるきりなのは、相變らずであつた。夕暮ではあつたが、その孟宗林の暗いことは案外だつた。すかしてみると、ところどころ竹の幹の隙間に、外の白い色が見えるだけで、妙に二人は默つて、その暗い中を歩いて行つた。良三はその間に、結婚してることを言つて了はうと決心したのである。

彼は今度會つてから今日までそれを言ひ出すことを、氣にかけた。言ひ澁るだらうと思つたり、言つてから急に二人が氣まづくなりはしないかと思つたりした。二人の間がそれで駄目になるなら、それも仕方がないと思つたが、なんと云ふことなく思ひ切れないところが、心の底

に動いてゐたからである。

けれど、案外、何氣ない風に言へた。これは成功だなと思つた。併し、それに對する彼女の反應を、體全體で感じとらうとしてゐる自分を感じた。竹林に這入る前に犬に吠へられたために、又竹林が案外暗いために、二人は體を寄せ合つて歩いてゐたが、そこを抜け出てからも、良三はこの話の衝撃をゆるやかにするために、體を離さないでゐたので、體の感じからも解る筈であつた。

けい子は、瞬間、息をひそめたやうであつた。默つてゐた。

良三は、いけなかつたかな、と思つて、直ぐ目を彼女に向けようとしたが、鳥渡向けにくい氣持になつた。けれど、矢張り、向けた。

丁度、彼がうかがふ目を向けたときと、けい子が口を開いたときと同時だつた。

「いつ?」

いつ、結婚したかと訊いてゐるのだなと、思つた。それと一緒に、その聲の調子が全く案外にも靜かで、――と云ふより、いつもの彼女のそれと變らないと思つたことである。彼はほつとした、それから、自分が目を向ける必要はなかつたとも思つた。

「さう――」と良三は言つて、その月日を考へるやうな目をしたが、急に、

「そんなこと、どうだつていいぢやないか。」と話をふりもぎるやうに言ひ放つた。

「どうして?」けい子は良三のその語調にかすかに驚いたやうな聲で言つた。

「そんなこと考へるのは、いやだよ。少くとも二人でゐるときは。」

それはたしかに、彼の本心だつた。けい子と二人でゐるときは、自分に妻があること、從つて、自分の運命は自由を失つてゐることを思ひたくなかつた。自分の心に、けい子以外の者を侵入させたくない、二人の間に、別な人間の影をうろつかせたくないと思ふのだつた。いや、思ふと云ふほど、はつきりまだ自覺してゐなかつたが、なんとなく、そんな氣がして、口に出たのだつた。

けい子は、それ以上、なにも訊かうとせず、默つてゐた。良三は、自分の言つた氣持が通じたかどうかと思つたが、彼女の表情だけでは解らなかつた。

「この道には、犬が多いんだね。」と竹林の手前で吠えられたことに引つかけて、話題を轉じてみた。すると、

「これで、三度目ね、吠えられたの。」と直ぐ答へた。その答へぶりからも、聲の調子からも、

執拗に悶え苦しんでゐるのではないことが解る。それどころか、まるで、普通の世間話の一齣のやうなあつさりしたところがある。彼は安心した。さつきの安心し切れない氣持が、これで落著いた。良三は落著くと共に、こんなことでけい子にビクついてる自分を昔と思ひ合せて、鳥渡不思議な氣がした。

事實、けい子は、平靜でゐられた。いや、平靜といふ言葉も當らないし、世間話の一齣をし合つたやうなあつさりといふ言葉も當らない。ただ、自分のことでありながら、自分から離れた物事のやうな氣持でゐられたのである。彼女は、先日三年振りで會つて一緒にゐた間は彼が結婚してやしないかといふ疑問を全くもたなかつた。三年といふ年月が經つてをり二重廻しといふ前の學生姿とは見遮へる樣子であるのに、疑問を挾まないのは、後になつて考へれば不思議であるが、そのときには、觀察もへちまもない、唯、素裸の佐々木良三といふ男が彼女の心の中に飛び込んできたのである。そこには、三年の歳月もなければ、二重廻しも、幾年前より濃くなつた髭のそりあともなかつたのである。彼女はその日別れてから一日一晩はぼつとのぼせ上つて、わけの解らぬ時間をすごしたが、何かのきつかけに、ひよいと彼の結婚のことが頭に閃めいた。そして、ドキンとしたのである。

「今度、會つたら、訊いてみなけりやならない。いえ。あの人が、自分から話し出すのぢやないかしら。」すると、そのときの場面が浮んできて、彼女はひどく恐ろしくなつた。それを考へると、會ふことすらこはくなつた。

けれど、いつか忘れるともなく忘れて了つた。ところが、今恐ろしい瞬間に遭遇したのだが、案外にもひどい衝撃をうけなかつたのである。面と向つて會つてゐれば、唯、ただ、生身の良三が自分の上に大きく擴がり、そして、その生身の良三のどこにも變化がない、昔通りの良三であり自分の良三であるといふ素朴感から來てゐるのであらうか。

竹林から出はづれると、ゆるやかな坂道になつて、おりきつたところから、ずつと一面に枯れた雜草の野原になつてゐる。そして、夕闇が遠くの方からだんだん近づいてくるのが見える。

雜草が縮れて枯れてゐるところから、まるでこちらを通る人間はあるまいといふ感じがしたが、三四人の土工が突然のやうに横の野原の中から姿を現はして良三たちとすれちがつて行つた。成程、今歩いてきたところに、さびきつたトロッコの車輪が一對放り出されたままになつてゐて、こんな野原でも土工の仕事があつたのだとチラリと考へたが、現に土工が出てくると

は思ひがけなかつた。

すれちがふ前から、じろじろ見てゐてすれちがふとき、急に目をそらしたりしたが、後になると、おきまり通り、揶揄を浴びせてきた。

「うまく、やつてやがらア！」

そのくらゐの言葉はなんでもないが、ひどく猥なことをつづけざまに言放つた。

そつとしておきたい部分を白日の下にさらけ出されるやうな痛みを感ずるものだが、それから自分を守らうとするかのやうに、二人は自づと身を固くした。それでも、良三は、こんなことはなんでもないぞといつた態度をとつた。又、いつもの聲で彼女に話しかけようとしたが、敢へて話しかけるのが却つて不自然なので、默つて歩いた。

土工たちが遠ざかつたとき、良三はけい子を見た。彼女も彼を見て、目が合つた。

さういふ場合、大抵の女が「いやあね。」と云つたある目附をしてみせるか、あんな野卑な連中は默殺してるといつた冷たい目をするか、どちらかである。

けれど、けい子はさうでなかつた。彼女は目にあるか無きかの微かな微笑を浮かべたのである。それは、いかにも自然な素直な女の姿に思へた。而も、靜かな自然さ素直さである。

その靜かな自然さ素朴さが、良三の氣に入つた。そして、そのためにあの嫌やなことから、自分の氣持が清々しく拔け出せたのを感じた。

こんな微笑ができるのも、又、そのために人の心を清々しくさせるのも、この女の心が美しいからに相違ない。良三は、なんとなく、それに考へついた。そして、彼の心に深くのこつた。

又、彼はかへりの電車の中で、けい子が自分の結婚の話を承認した靜かな態度を考へた。そして、あれも、彼女の美しい心のさせた業であらう。さうでなければ、解釋がつかぬと思つた。

良三は「美しい心」と云ふものを、隨分久振りで考へた。そんなものが、この世にあつたのかと云ふほどの忘れ方である。そして、今それに一種の尊敬を抱いてる自分に氣付いた。

良三は、彼女に關して、こんな經驗は今日が初めてだと思つた。三年前の彼女に一度だつて感じたらうか。けれど、今日の彼女にあつて、前の彼女にないと云ふわけは有り得ない、自分が感じなかつただけだ。彼女に初めて會つた路上のことから、初めて相會した夜更けの檜の木蔭のことや、それから、森の中のことなどを回想した。

良三は、「美しい心」を感じたり、それを深く胸にきざみつけたりするのが、今までの自分と思ひ合せて、不思議に思はれた。それを考へてみた。自分の今の結婚生活が不幸だからではないだらうか。併し、さう思ひ當ると、その考へを早く轉換して了はうとした。よし、さうであつても、自分の結婚生活とけい子のつき合ひとを心の中で別なものにしたかつたからである。これは不思議な考へ方のやうに思へるが、どうしてもさうしたかつた。さうしなければ、どちらにも不愉快な影がさすやうに思へて仕方がないのだ。良三は自家へかへれば、つとめてけい子のことを思はぬやうにし、けい子と二人ゐるときは妻のことを思はぬやうにした。けい子に結婚のことを打開けたとき、彼女が少し訊きかかつたとき、機嫌を惡くしたのは、前述した通りである。

以前の彼は、けい子に別れた瞬間から彼女のことは念頭になかつたものである。併し、今度は自家で彼女のことを考へぬやうにつとめる、そのつとめるやうになつたのは、大きな變化だつた。

彼は勤先の圖書館のデスクの上で、カードを整理して、疲れると煙草を口にくはえる。そして、ぼんやり廣い硝子窓に窓外の樹々を通してきた午後の日光の黄がかつた色を見る。大抵、

今までは、それだけが、彼の疲れを轉換させる最大限であつた。ところが、この頃は、何かをして貰ひたい氣持が體の中に湧いてゐるのを感ずる、心が、と云ふより、體がそんな要求をもつてゐるのだ。それはどう云ふことか、はつきりはしてゐないが、首の附根をもんでもらふとか、肩をかるくたたいて貰ふとか、いや、兎に角、自分の體にさはつて貰ふだけで結構らしいのである。彼はあるとき、その自分の欲求に氣付いて、一體どう云ふことかと、はつきり考へてみる氣になつた。すると、思ひがけなく、けい子の姿が浮んできた。

「ああ、さうだつたか」と心の中に呟いた。思ひ出してみると、自分では、はつきり氣付かなかつたが、「體にさはつてくれ。」と口の中で呟いてゐることがあつたと思ひ當つた。そして、そんな變化は、あの霧の日に彼女に會つてからだと云ふことも考へついた。

「あの日、ひよいと氣がついてみると、二重廻しの肩の霧を、身をよせるやうにして拂つてくれてゐたつけ。」それは、自分の故郷の、雲が下の方から湧き上る斷崖の話をしてゐるときだつた。何かの拍子にふと氣付いてみると、彼女が身を寄せて手でそつと拂つてをり――そして、彼は世話されることに、いかにも自然な身ぶりで體をまかせてゐた。今考へてみると、その身ぶりは以前から習慣づけられてゐたもので、彼女に接すると自ら甦つてきたに過ぎないの

であらう。良三は以前のことを考へてみた。けれど、どんな場合に、どんなことをされたか思ひ出せなかつた。帽子をもつてくれたり、紙を出してくれたり腕をもんでくれたりと云つた、些末なことである點と、些末なだけに習慣づけられたら、全く記憶にのこる筈もないからである。もう一つには、頭から彼女を無視してかかつてゐたので、どんな風に氣を配り世話をされても、なんとも感じないためであらう。全く、何も思ひ出されてこないのである。

だが、考へてゐる中に　頭で記憶してゐるのでなく、體がぼんやりと記憶してゐることに、ふと氣付いた。と云ふのは、以前、彼女と會つてゐたときには、自分の體をあづけ放してゐる安易さがあつたことである。草の上に腰を下ろさうとすると、服のその部分がよごれはしないかと云ふ心の配りを拔きにして腰を下ろせた。彼女は自づと懷からハンケチか塵紙を出して直ぐと腰の下に敷いてくれるからである。少々誇張した言ひ方をすれば、些末事に氣をとられずに、傍若無人に振舞へるのである。

良三は自分の結婚生活の方を振返つてみた。かほるにも、そんな風な配慮が全然ないとは言へない。三月に一度か、半年に一度ぐらゐ、大抵、銀座あたりに連れ立つて行くやうな場合

に限られてゐるが、スプリングの襟がまくれ込んでゐるのを直してくれることがある。けれど、そんなとき、良三は思ひがけないことをしてくれると、意識がギラギラ動き、何かしら彼女の手のふれてるあたりがむずついて、じつとしてゐに堪へられないのだ。

けれど、かほるに惡意があつて、良人である良三に氣を配らないのではあるまい。彼女の言葉を借りれば、「氣がつかないのよ。」と「鳥渡、面倒くさかつたからよ。」に相違ない。だが、氣がつかなかつたり、面倒くさかつたりすると云ふことは、一體、どう云ふことなのであらうと、良三は何かの拍子に考へた。(彼等の結婚生活では、それが普通のことなので、特別、考へようとする氣持は無くなつてゐるのだが。)

良三は風邪をひいたのを無理押して勤めに出たやうな場合、よく肩がこつてくる。家に戻つて、和服と着かへると、そのこりが一層はげしく感じられる。しまつた、途中で按摩の家に寄つてくればよかつたと思ふ。今から呼びにやるのも、かほるに氣の毒だと我慢をして通す。

だが、彼の氣持に何らかの張りがあるときには、

「おい、鳥渡、肩をもんでくれ。」といかにも氣輕さうに言ひかける。すると、判で押したやうに、

「今、手がはなせないのよ。」とかほるの答がもどつてくる。相變らずだと苦い汁をのんだ氣持になるが、まだ張りが心にあるので重ねて言ふと、やつて來て、もみ出す。けれど、指先に揉もうと云ふ心の芯が動いてゐないのだ。肩の皮の上で指が動いてゐるだけである。もつと强くと言へば、指先に力は這ハるが、肩のこりとは關係なく、皮膚の一部が抓まれる痛みを感ずるだけである。だが、それよりも、良三は揉み出したときから、いや、揉み出す前から、かほるの「もう止めたい、もう止めたい」と云ふ氣持が自分の神經にひびくのを感ずる。それが、一秒、一秒と、全く、一秒一秒とひびき方がひどくなる。これではたらぬと思ひながら、彼は自分の方で焦立ち出し、まだかほるの方で何も言はぬ先に、

「もう、いいよ。お前、つかれるだらうから。」と言つて、體を動かさずにはゐられなくなるのだつた。すると、彼女はほつとした顏をして、止して了ふ。けれどあるとき、かほるは餘りに早く彼が「もう、いいよ。」と言つたので、良人が遠慮してるこ が流石に解つたのであらう、はづさうとした彼の肩を更にもみ始めた。良三も、それならと、その氣になつたが、三揉みか四揉みもしない中に、妙に肩がむづむづして、

「いい、いい。本當にいいんだ。」と逃げるやう 肩をはづして了つた。

さう云ふ風な按摩の結果、こりはどうなつたであらうか。こりは、元のままの姿で、肩のところに坐つてゐるのである。一體、かほるの揉んだことが、どう云ふ形になつたのであらう。又、良三とかほるの揉む、揉まれると云ふことが、どう云ふことなのであらう。

前述の、スプリングのまくれ込んだ襟を直してくれるかほるの手先に對して、良三の意識がギラギラするのは、この按摩のときと同じ神經のギラギラが流れ込むからであらう。こそばつたくて堪らなくなるのである。

四、ある崩し

そのくせ、良三はけい子に對して特別有難いともなんとも思つてゐなかつた。いろいろ配慮されるのが、まるで當然のこととしてゐるかのやうである。

良三は妻との生活では、自分で帽子掛けに帽子をかけ、洋服の上衣もズボンも洋服ダンスの中にしまひ込むと云ふ風に、自づと體が動くのだが、けい子とでは袖口についた塵一つはらふのが面倒くさくなつた。

時々、けい子でも氣がつかぬことがある。すると、彼は、

「それ。」と言つて目配せしたり默つて袖口を彼女の前につき出したりした。當然やるべきことをしないのを責めるやうな、又命令するやうなひびきが、その語韻や行動のかげにひそんでゐるのである。

ある晩、二人は場末の蕎麥屋でカレーうどんを喰べてゐた。二人の他には、客がなく、狹い

道路の向側の喫茶店からひびいてくる低級な流行歌のメロデーが、一層この蕎麥屋の薄暗いひつそりした感じを際立たせた。

良三はカレーうどんが熱いので、最初上唇にさはらぬやうにそれをあげて、そこからうどんを吸ひ込まうとした。けれど、直ぐと下唇を焼いたので、暫らく喰べることを断念するより仕方がなかつた。彼はうらめしさうに下に置いた丼の中を鳥渡見てから、目をあげけい子と視線が合つたので、思はず微笑した。

「君は、こんなものが好きなのかい。」

けい子が、それをとると言つたので、彼も眞似をして、とつたのである。

彼女も微笑した。それから、

「何に、考へてらしたの。」と言つた。

良三は怪訝に思つた。今、何も考へてゐなかつたからである。けれど、直ぐ、彼女のたづねたのは、今のことではなく、今まであちこちと歩き廻つてきたその間の彼の様子のことだと氣付いた。

そのやうに氣付いてみれば、成程、自分では意識して振舞つたのではないが、むつつりして

ゐたり考へるやうな表情でゐたり劍突を喰はしたりしたことに改めて氣付いた。

良三は、今日圖書館の館員たちで組織してゐる會のことについて、大平と云ふ男と爭論したのだつた。論爭にたると、動悸が烈しくなつて上せあがつて了ふ彼は、平常の意見の三分の一も言へず、と言ふより、その場合、茫つとして頭に浮び上つて來ず、そのために論破されるのだが、今日もさうだつた。殊に、會の金錢上の問題がからんでゐるだけに不愉快な後味は一層ひどかつた。

「不機嫌な顏をしてゐた?」と微笑しながら訊ねた。

彼女は何も答へずうどんを二三本箸でつまみあげるやうにしながら、ただ笑つてゐる。

「そのとき、言へば、いいのに。嫌やな顏をしてるつて。」

けれど、さう云ふ場合、何も言ふ彼女ではない。彼の不機嫌なら、不機嫌に、愉快なら、愉快に、しづかに流されるやうについて行くだけの彼女だと、良三は知つてゐた。

今日、彼は彼女を突劍貪に扱つたことを思ひ出した。草地の間の細道をさまよつて來て、道路に出ようとしたときである。草地が道路より三尺ほど高くなつてゐるが、そこだけ草がすりきれて赤土がはみ出してゐる。けれど、却つて、辷りさうな危險があつた。良三は先に飛び下

りて、上にゐるけい子に手を差出した。彼女は彼の手にすがりながら、その赤土に足をふみかけて下りかかつたが、すでに途中で辷つて横倒しに倒れて了つた。彼女は倒れながらも、ぶざまになるのを防いだらしいので、ひどい醜態な倒れざまでもなかつたが、裾がまくれ上りフェルトの草履が飛んで白い脛が二本現れた様子は、良三には矢張りぶざまに寫つた。

良三は突然妙に腹が立つた。自分の目の前に醜態をさらした彼女に腹が立つた。その倒れざまを可愛さうと思ふのだが、可哀さうただけに、逆に腹が立つのだつた。

「醜態だな！辷ること解つてたから、注意してやつたのに！」思はず言葉荒く、起き上りかかつてる彼女の體の上　浴びせかけた。そして、彼にはそのありかがわかつてるが、彼女は見當らずに探してる草履をとつてやらうともしなかつた。

良三は、今、そのときのけい子の顏を思ひ浮かべた。けい子はそのひどい言葉に對して、少々恥しさで赤らんだ顏のまま、素直に彼のその言葉をうけがふやうな表情をしてゐた。けれど、今になつて考へてみると、その表情の底には、どことなく悲しさうな色がかすかに動いてゐたやうである。それは、彼の無情な言葉を悲しんでか、自分の醜態を悲しんでか。

今、良三はそんな風に彼女を扱つたことが烈しく濟まなくなり、可哀さうになつた。

彼に蕎麥屋から出ると、

「今日は濟まなかつたね。」と本當に心からさう言つた。そして、

「今、何時？」と訊いた。訊いてから、貧乏なけい子が時計を持つてゐる筈はないことに氣付き、自分の腕時計を見た。

「七時半。」

彼女の顏をやさしく見やりながら、

「これから、新宿へ行つて、レヴューでも見ようか。」そして、今日の自分の不機嫌はなんでもなかつたと云ふ風に、明るく笑つた。彼自身、これは低俗な慰め方だと思つたが、彼女に對するせめてもの慰め方だつたのである。結局、行かなかつたが。

良三は不氣嫌なとき、手鏡をとつて、自分の顏をうつしてみることがある。自分一人だから、他人に構はず自分の感情を現してゐられる。その顏を見ようと思ふのだ。成程、立皺を額に寄せて、普段よりもどす黑いやうな顏になつて苦り切つてゐる。唇も意地の惡さうな冷たいひねくれた色を浮かべてゐる。自分ながら、嫌やだと思ふ。反感が起る。そこで、一層唇を歪め眼に意地惡い光を浮かべる。もつと顏を歪める。それから、前より更に不機嫌になつて、「吾

生ッ！」と何者にとも――自分にであらうか――向つて心の中で叫んだり鏡を手荒く抛り出したりする。

良三はその晩けい子に別れてから、そのことを思ひ出した。自分では氣づかなかつたけれど、けい子に身のまはりを配慮させてゐるばかりでなく、あの鏡にうつつたやうな不機嫌な顏付で、まるで自分一人だけのときと同じやうに振舞つてゐる。なんのはばかるところなく露骨に自分の感情だけで動いてゐる。それどころか、鏡に向つて、顏を歪めたり鏡を抛り出したりするやうに、轉んだ彼女に意地悪い言葉を浴びせ、自分の不機嫌な感情を吐き出してゐる。而も無意識にやつてゐる。それを行はうとする瞬間には、何も考へずにやつてゐる。

併し、若しも、氣付いたら、彼女に不機嫌に行動したり、ひどいことを言つたりはしないであらう。その夜、自分を恥ぢ、彼女に濟まないと思つたことから考へてもと思つた。

ところが、日が經つにつれ、自分は今日は不機嫌だと思ひ、今、彼女に不機嫌に振舞つてゐると意識しても、少しもそれを遠慮しなくなつた。

又、あるとき、

「ああ、あ」と思はず嘆息をしたことがあつた。

「どうなさつたの。」けい子は心配さうに、靜かにのぞき込むやうにしながら、訊ねた。

彼は不愉快な氣持の中に堰沒してゐたので、けい子の聲がかすかに聞こえたか聞こえないかであつた。

「なに？」

なにか言つたかと、訊き返した。

「どうなさつたの、ッて言つたのよ。」

「何か僕、言つたかい。」

「溜息ついたの。自分の溜息を彼が氣付いてゐないのが彼女に可笑しかつた。

「ああ、さうか。――なんだか、不愉快なんだよ。朝から、一日中不愉快なんだ。」と言つてから、そんな曖昧なことを言つてゐ自分が又不愉快になつたので、

「自分が嫌やになつたんだよ。自分の不勉强振りがね。どうして、俺はこんなに怠け者なのかね。今日、初めて解つたわけぢやないし、づつと前からそれを知つてゐて、知つてゐながら、矢張り怠けてゐたんだ。」

けい子は、なんと彼に言つたものか、困つた顏をした。

「今日、勤め先に來た美術史の研究雜誌を見たら、大學の同級の大塚つて男が、立派な論文を書いてるんだ。大塚は見るから頭の悪さうな男だが、勉強家なんだ。コツコツ勉強する性でね、そこを輕蔑してたが、今日見た論文は僕なぞ及びもつかぬ立派なものなんだよ。自分の不勉強振りも、それから生意氣に他人を輕蔑なぞしてた自分が、とても嫌やになつたんだ。」

けい子は、彼の顏をじつと見ながら、一生懸命に聞いてゐた。

彼が話し終ると、視線を下に落して、暫らく默つてゐた。それから、

「あたしには解らないけど、困つたわね。」と低い聲で言つた。

良三は、その聲を聞くと、輕い失望を覺えた。けい子に話したところで、自分の不愉快さを解きほぐしてくれるとは期待してゐない。それどころか、自分の不愉快さが、どんな性質のものか解るとも思つてゐない。けれど、何んとなく失望した、不愉快な原因を話したことは馬鹿らしかつたと思つた。いつものやうに、不愉快な表情だけしてゐればよかつた、話さねばよかつたと思つた。

それにも拘らず、どう云ふものか、以後は、不愉快なことも愉快なことも、心にあることは思はず彼女に話さずにはゐられなくなつたのだ。

あるときは、自分にも原因の解らぬ不愉快を話した。全く原因が解らぬのである。強いて求めれば、朝出がけに二言三言かはるが口答へをしたことや驛員の亂暴な取扱ひなぞが癪にさはつたが、普通ならそれくらゐのことは直ぐ忘れて了ふので、それが特別原因と云ふこともない。

「兎に角、朝から一日中不愉快で堪らないんだ。」

けい子は良三の妙な不愉快さを忖度しかねて、どう慰めてよいのか解らなかつた。暫らくして、低い聲で

「困つたわね。」と言つた。

その言葉を聞くと、自分でもはつきり掴めてゐない氣持を彼女に話すのではなかつたと思つた。すると、その嫌やな氣持が急に鋭い聲になつて、

「君に解るのかね、こんな不愉快さを經驗したことがあるのかね。」と叫んだ。

けい子は忖度しかねてゐただけに、自分の不正を摘發されたやうな氣がした。目を落して默つて了つた。

その樣子を見ると、自分の不愉快さを彼女に爆發させて、苦しめたと思ひ、一層嫌やになつ

た。

けれど、心の一方では「こんな氣持まで、思はず彼女に話すんだな。」と自分を振返つて不思議になつた。

兎に角、なんでも話すと言つてよい。この頃では、話すとはつきり意識せずに、けい子の顏を見たり普通の話をしたりしてる間に、自づと言葉になつて出て了ふのである。（とは言つても、無意識の意識が巧妙に選擇してゐると見え、かほるに關する不愉快事などの類は一度も口の端に上せたことはないのだが。）そして、話すと、彼女はきまつて、「困つたわね。」と言ふ。一體どこまで彼女が自分の氣持を解つて答へるのか疑はしくなり、急に「話してつまらなかつた。よせばよかつた。」と思ふことも、いつも、きまつてゐた。けれど、これも不思議なことに、話してつまらなかつたと思ひながらも、話すと、いつの間にか自分の不愉快さが薄らぐのだつた。妻のかほるの場合も同じだつた。彼女は「よかつたわね。」と言ふ。一體何が解つてゐるのだと思ふが、話すと矢張り快い氣持がする。話す前より、一層快い氣持がしたり、その喜びが確實な姿になつたりするのである。又、喜びかどうかはつきりしない狀態を話すと、それが喜んでいいこ

とだと確認されてくる。

何かしら、希望が湧いてきたり、生甲斐を感じたりする。

良三は、あるとき、何んとなく愉快な氣持でゐた。

けい子は、視線が合ふと目に微笑をうかべた。「今日は愉快さうね。」と云ふ微笑である。良三の心の中が直ぐ解つたのであらう。けれど、いつも、口に出しては言はないのである。口に出して言へば、良三が嫌やがることを、理窟ではなしに、何んとなく解つてゐたから。

良三は、彼女のその目を見ると、思はず言葉が出た。

「今日、勤先に親戚の者が訪ねてきたんだよ。そして叔父の話が出たんだ。叔父といふのは、僕の父の弟で、去年まである役所の長官をしてゐた男だが、若いときから、ねばることが好きでね、えらくなつてからは、表面に出して、ねばることはなくなつたが、それでも、僕には胸をそらして横柄な口の利き方をする印象きりのこつてゐない。僕の親爺は僕よりもつと脊が高いが、親爺の弟の叔父はやつと五尺を出るくらゐの低い男でね、その男がそり返つてるんだ。鳥渡、滑稽な圖なんだがね。けれど、脊の低い男を氣をつけてると、僕の級友（クラスメート）なんかでも、奇體に、どれもこれもそつくり返つてるんだね。或ひは、脊の低い者の、高い者に對する自らな

對抗意識があんなところに出てるのか知れない。さう思ふと、その叔父にも鳥渡同情は持つてるんだが。」

良三が笑つたので、けい子もつられて笑つた。

「その叔父が去年、所謂依願免職になつたんだね。すると、急に元氣がなくなり呆けて了つたと言ふんだ。呆けたと云ふことは、今日の親戚の男から初めて聞いたわけぢやなく、僕の母もこの前來たときに話してゐたんで知つてたが、特別氣にとめてゐなかつた。ところが、今日の男が言ふんだ、あんなに老けて元氣がなくなつたのは、役人を止めたからだと言ふんだ。言葉はこれつきりだが、僕は成程と思ひ當つた。」

それから、つゞけた。

「併し、思ひ當つたのは、それだけぢやない。つまり、あの叔父が役所をやめると、元氣がなくなつたり呆け込んだりしたのは、今まで長い間やつてきた自分の仕事が行きどまりになつて、自分の生きる道が同時に斷ちきられたからだ。死んだと同然になつたからだ、それから、ひよいと、かうも考へついた。何も役所を止めたからつて、それで自分のしてきた仕事までが死んで終ふわけはない、それなのに、死んだやうになつて終ふのは、實は、今までしてきた仕

事に、自分の精神を本當に生かしてきてなかつたからぢやないか。仕事と自分とは別々で、仕事はただ生活の糧、所謂立身出世の手段、そして、何者かにやれと與へられた他人の仕事に過ぎなかつた。では、一體、自分の精神はどうしたかと言へば、さう云ふ仕事を機械的にすることに忙殺されて忘れ去られ放置されたままになつてゐた。」

けい子を見た。

「世の中には、かう云ふ人が多いんだが。そして、役所の仕事でも會社の仕事でも、うつかりしてると、人間をこんな風にして了ふことが多い。——叔父に僕は同情したよ。けれど、同情してる中に、直ぐ、自分のことが考へられたんだ。一體、自分は何をしてるんだらうとね。僕は淋しくなつたね。人のことを同情したりしてるどころぢやないと思つた。」良三は苦笑を漏らした。

「けれど、僕は間もなく、心が明るんできた。甚だ自分勝手で、自惚れだと思ふんだが、自分はそんな人間にならないで濟むんぢやないかと思つたからだ。こりや自惚れだらう、特別、そんな風に自分を考へる理由も根據もないんだからね。」そして鳥渡言葉を切つた。

「いや、併し、君と話してる中に、なんとなく、はつきりしてきた。自分には叔父のやうな生

き方ではなく、自分の心を投げ込んで行ける道があると思つたからだ。あのときはつきりしてゐたわけぢやないが、それが心の底にかよつてゐたんだらう。」

けい子は、譯がわかるのかわからぬのか、併し、にこにこと微笑してゐた。

一本の柿の木が、不思議に一本だけ麥畑の道ばたに立つてゐる。その側を二人は通りすぎた。

「こんなこと、君に話したが、話さなければよかつたな。話した途端、考へたりよろこんだりしてゐることが、空の空の、煙のやうな氣がして來さうだ。——君と別れてから、急に淋しく憂鬱になりさうだ。」

けい子は微笑を引込めて、

「さうなつたら、困る。」と言つた。自分が困ると云つたひびきがあつた。

良三はけい子に別れてから、自分の心が萎んでくるのを、まるで研究するやうに見てゐた。ところが、不思議に淋しくも憂鬱にもならなかつた。反つて、心が明るんできた。

けい子に話したことがよかつたのだ。彼女が、譯のわかるわからぬに拘らず、うれしさうにしてくれたことや、「さうなつたら、困る。」と自分が困りでもするやうに言つたことが、良三の

心をあたたかく暖めてくれた。譯はわからなくても親身に思つてくれる氣持に暖められてゐる中に、なんとなく、良三は自分に自信が湧いてきたのだ。

一體、どんな自信なのか、自分でもまるで解らない。自分を大切に思ふ氣持と言つた方がよいかも知れない。そして、あのときにははつきりしてゐなかつた「叔父のやうな生き方ではなく、己れの心を投げ込んで行ける道」が自分にはあると思つたことが、なんであるかが解つてきた。それは、研究だつた。自分の美術史の研究だつた。いや、あのときだつて、なんとなく解つてゐないことはなかつたのだらうが、それをはつきりさせるだけの自信の無さが、自分を遮げ、「煙のやうに消える」恐れを抱かせたのである。今、次第に、はつきり見定める力が自分の中に湧いてきたのである。

「どうして、今まで、ぼんやりしてゐたのだらう。しつかり握るだけの氣持になれなかつたのだらう。」と思つた。

自分と云ふものに自信がなかつたからだ。やらうとして、忽ちふらふら腰になる自身を見るのが恐いので、なんとなく避けてゐたのだ。とそれに氣付いた。

五、心の奥

月日が經つて行つた。けい子に對し、良三は益々思ふままに振舞つてゐた。自分を心から思つてくれるそのために、自分の心は和(なご)むのだと解つてゐて、さう云ふ彼女の心の上にのびのびと身を横へて行つた。

あるとき、けい子は褪紅色(オールドローズ)のレース絲で編んだ栞を持つてきた。良三の高級な研究の本の間に挾んで貰はうと思つて、勤めからの歸宅後、弟妹の世話の合間々々に一生懸命作つたもので ある。人から敎はつたり雜誌の附錄を古本屋から買つてきて參考にしたりしただけに、仲々手の入つたもので、さう云ふところに、彼女の彼に對する愛情や、彼に渡すときのうれしさを空想して編みつゞけた氣持が現れてゐた。

けい子は、苦勞して編んだことなぞは一言も言はずにさう云ふことの言へぬ彼女だつたから、

「これ。」と言つて、鳥渡恥かしさうな微笑を浮べて良三の前に出した。
良三は煙草のうすい煙をとほして、ゆつくり、鈍さうな目付で見た。それから一瞬間、なんだらう、思ひがけぬものだと目を光らしたけれど、その目に直ぐ失望の色が浮んだ。
彼女はそれに氣がつかず、
「本の間へ、挾めて下さいな。」と言つた。
すると、全く思ひがけない險のある聲がけい子の耳にひびいた。
「それ、なに！」
けい子は、はつとした。小さい胸が突然縮み上がるやうな氣がした。
今度は、靜かな聲であつたが、
「こんなもの、本の間に挾めて置ける？　どうも、君と僕とは、趣味が大分ちがふね。」と言つた。
けい子は、更にひどい打擊をうけた。「君と僕とは、趣味が大分ちがふね。」と云ふ言葉は、自分と彼との間を數百里も數千里も遠ざけたやうな氣がした。聲が靜かになつたことは、なんの慰めにもならない。却つて、さう云ふ靜かな聲の中に、彼の本當の「芯」がこもつてゐる表

示のやうな氣がして一層たまらなかつた。
もう、彼は見向きもしなかつた。
一體、何か彼は氣に向かないことがあつて、そんな烈しいそして冷淡な態度に出たのかと、けい子は考へて見た。そして淋しくなつた。彼と附合ひ始めた頃、令嬢のやうにお下髪に結つて行つて、彼の不機嫌を買つたことを思ひ出したりした。
けい子はあるとき、約束の時間より十分ほどおくれて行つたと云ふので、良三はひどく怒つて、暫らく口をきかなかつたことがあつた。そのくせ、彼は友人と喫茶店でお茶をのんでゐて、うつかり約束を忘れて會合場所に行かないことがある。彼はそれを知つてゐながら、次に會つたとき、
「君が日を間違へたのだ。」と言張り、
「今後、しつかり憶へておくやうにしてくれ、困るよ。」と怒つた顏をしたりした。
良三の我儘は、そんな風に、つのつて行つた。
けれど　けい子はそれを苦にしてゐない樣子だつた。彼をさう云ふ人だと思ひ込んで、それ以上どうしようともしなかつた。もつと正確な言ひ方をすると、彼が右に動かうが左に動かう

が、愉快がつてゐようが、憂鬱になつてゐようが、彼と一心同體で、彼の赴くままにとけ込んでゐるので、他人としての苦痛感を味はないと云ふ風なのである。そして、彼と會つてゐれば、自分の心の安住地にゐるやうに落着き、心樂しいのである。

尤も、彼が烈しいことを言つたり叱言を言つたり亂暴なことをすれば、はつと小さい胸をうたれ、心の痛むのを感じるのは事實だが、それは月の表面を横切る薄い雲のやうに。その場かぎりで消えて行く。

けい子は二十一になつてゐたので、さう云ふ自分を振返つてみることがある。自分でも不思議な氣がした。

「どうして、あの人にはこんなに素直なのだらう。あの人が悲しさうにしてゐるときに自分も悲しくなるし、うれしさうにしてゐるときはうれしくなるし、それから、あの人のすることだと、どんなことでも胸が立たないのだらう。」

それから、良三がいかに隱さうとしても、彼の喜憂の氣持が何んとなく自分の胸に解つて了ふ、いや、彼に會ふ前から、その日の彼の氣持が解ると、思ふのだつた。

彼女はある日、その朝から、今日彼が突然會ひにくるやうな氣がした。約束では、その日より一週間先で、來る筈のない日だつたが、妙に、さう云ふ氣がした。

「虫の知らせ！」

けい子は、いつもそのやうに呼んでゐる言葉を小さく呟いて、胸をドキドキさせた。而も、その日は、何か良いものを彼が持つてくるやうな氣がした。

果して夕方、郊外電車を降りて、霧の日に彼の待つてゐたバスの停留場のところまで行くと、彼の姿が見えた。彼女は自分の「虫の知らせ」が餘りにも當りすぎたので、少々可笑しくなり、低く口の中でクックッ笑ひながら近づいた。ところが、彼は、例になく、むつつりした表情で、恐いやうな目附をしてゐた。

けい子は、その顏を見ると、何か良いものを持つて來ると云ふ「虫の知らせ」とは反して、何か悪いことが起つたのかと思つた。ところが、やはり「虫の知らせ」には間違ひはなかつた。彼が怒つてゐるやうに見えたのは、彼のいつにもないほどの烈しい情熱が、そんな表情にさせたのだつた。

彼はその日、けい子に息がつまるほどの烈しい愛情を示した。

彼は、何かのきつかけで起つた衝動にかられて、一週間待つことができずに、飛んできたの

だつた。そして、「何か良いものをもつて來る」と云ふ「虫の知らせ」は、品物や本のやうな物質的なものではなく、その烈しい情熱だつたのである。彼女が自分の好む物をもらつたよりも、心豊かによろこんだことは勿論である。

かう云ふ風なことは、時々起つた。そのために、彼女の「虫の知らせ」を信ずる氣持は動かすことができないほどになつてゐた。彼女は初めから彼と一緒になる運命のやうに信じ込んでゐたが、けい子は彼女流にこれと聯關させて信ずる氣持を深くした。

彼女は時々思ひ出す從兄の十吉の言葉をそのときも思ひ出した。十吉も誰かから聞いたものらしかつた。

「結婚する男と女とは、前の世で、脊中が附いてゐた一つの體だつたのだ。」

宿命の深さを思はす神秘的な言葉だつた。

彼女は以前には、勿論その言葉に感動してゐたが、彼に細君のできた今の境遇でも同じやうに感動してゐた。彼とは結婚できないと諦めてゐるので、「結婚する男と女とは」の代りに「本當に愛し合へる男と女とは」と自然に置いて考へる癖ができてゐた。

「本當に愛し合へる男と女とは、前の世で、脊中が附いてゐた一つの體だつたのだ。」けい子は

呟いてみた。そして、「全く、さうだわ。言葉で言はなくても、あの人の氣持が解るのも、『蟲の知らせ』を感じるのも、不思議はない筈だ。」と思つた。それから、「あの人には、どんなことをされても、素直について行ける自分が不思議だと考へたけど、なんの不思議はないぢやないの、當然のことだわ。」と思つたのである。

けい子は慎み深く靜かで、それが歩く場合の肩や上體を動かさないところに、形となつて現れてゐるかのやうである。又、境遇に從順で周圍のために自分を殺して行く。さう云ふ風に、述べて來たけれど、ただ、それだけの彼女ではなかつた。むしろ、ある人々からは、それとは全く逆な性格の女に考へられてゐた。ひどく頑固で自分の考へを翻へさうとはせず、そしてどころか、氣に喰はないことがあると、何者にも介意せず反抗したり、全體の調和を破壞することを辭しないと云ふのである。

彼女の職場である印刷工場では、頭からさう云ふ女だと思ひ込まれてゐた。彼女の勤めは前にも鳥渡書いたやうに解版場である。そこでは、印刷機にかけて刷り終つた版を運んでくる、それを解版するのである。版の周圍をしばりつけてある紐をとき、活字やケイコメモノやインテルやをバラバラにして、それぞれを別々に撰り分ける。五號活字は五號に、九ポは九ポに、インテ

ルはインテルに、コメモノはコメモノに、これは、なんでもないやうだが、うつかりすると間違ひが起る。殊に、インテルは物が細かく小さく、幾通りもあるので仲々うるさい。撰り分けると、夫々を箱に入れて、文選場に運んで行く。かう云ふわけで、女工がやつてるこの解版場は刷り場と文選場の男工と交渉がある。刷り場はただ使つた版を運んでくるだけだから、特別のいざこざも起らぬが、文選では撰りの間違ひを指摘して文句を持ち込んでくる。それが正當な場合もあり、何も彼も解版場の罪に押被せてくる場合もある。男工たちは、罪の所在を知つてゐても、文句をつけ始めるにつれ、自分の言つてることがあくまで正しいやうな錯覺に陷るし、一方、女工の方では、なんでもすべて男工の不法な押被せだと云ふ先入觀念で、文句さへ出ればのぼせ上る。

かう云ふ場合に、飽くまで讓歩しないのは、けい子だつた。それどころか、彼女は身を挺して、怒鳴り込みに行くやうなことすら屢々ある。

「あいつは、おとなしさうな面をしてゐながら、ひでえ喰はせ者だよ。大狸だ。」と本當に憎々しげに言ふ。

「狸ぢやねえ。俺が事務所であいつの年をしらべたら、虎の年だつた。虎だつた。」

「道理で。」

けれど、けい子が抗爭するときには、彼女に言ふべき信念があり、それが相手に嚴しく迫るので、蔭で悪口は言つても、下駄箱の彼女の下駄にスミで黒々と「虎」と書いてやらうとか、もつともらしくしやなりしやなりと歩く腰に汚ないものを投げつけてやらうとか言ふ話は話だけに止つてゐた。

けれど實は、彼女にとつて自分の内側の人である母親のおときも、さう云ふ彼女の一面を知つてゐたのだ。殊に、幼いときには、對立的な二つの面が際立つて現れたもので、普段おとなしくよく言ふことをきくくせに、一旦嫌やだと言ひ出したら、泣くのではなく、室の隅に體を固張らせ、目だけきらきらと光らして默じみた頑固さを見せたものである。おときにも、この二面がどんな加減で出沒するのかはつきり解つてゐなかつた。それだけに、成人して、周圍の犠牲になつてじつと自分を殺して行く樣子を見ても、なんとなく安心し切れない。あの頑固さをどのやうに處理してゐるのか、又、處理が充分利いてゐるのか不安なのである。

「けい子、それでいいのかい。」おときは口癖のやうに、必ず、話の結末に念を押すのはこの不安がさせてゐる業であらう。

當のけい子自身はどうかと言ふと、彼女も自分のその面を早くから氣付いてゐた。むしろ、彼女としては、まるで、それが自分の本性だと云ふふうに思ひ込んでゐるので、どんなことに對しても良三に素直な自分が不思議に振返へられるのだつた。

ただ一つここに問題なのは、良三の結婚に對して、素直に肯定し、諦めてゐるらしい彼女の姿である。

本當に肯定し、諦めてゐるのだらうか。

結婚はできないが、戀愛をして行くと云ふのであらうか。現在の彼女の姿はさうなつてゐるけれど、彼と共にする運命になつてゐると云ふ彼女の信仰の「彼と共にする運命」とは、どう云ふことなのだらう。結婚とは關係ない言葉なのだらうか。一生、戀愛して行くと云ふ意味なのだらうか。併し、けい子はそこまで考へなかつた。どうしても、二人の關係の性質上、そこまで考へずにゐられる筈はないのだが、考へれば自分を土壇場の不幸に追ひ込むのを豫防する本能が彼女の思考をその手前で喰ひ止めてゐるのだらうか。

ある晩春の夕方のことであつた。良三は例によつて、けい子に會ひに行くと、思ひがけないことが起つた。木々は鬱々とした甘い樹液の匂ひを發散してゐるし、蛙がものうく遠くで鳴い

てゐると云つた氣候で、良三も自分の體が妙に物憂く焦立たしい衝動をうけてゐて、「今夜こそは。」と云つた一種の期待をもつてゐた。

いつものやうに、野菜や畑の間を歩きながら、何や彼やと話したり默つたりしてゐたが、その間中も、妙に落着かなかつた。こんな衝動を感じたことは今までに幾度もあつたが、彼女と話合つてる中に、うまく整理したり、抑へて通したりできた。けれど、その日はどうもうまくゆかなかつた。

野原の中に、二三軒の家が一ト塊り建つてゐて、その一軒の物干竿に取込むのを忘れたらしい女の物がだらりと下がつてゐた。それを見ると、急にけい子の顏をある鋭い目で見た。何か言はうとしたが、それはそれきりで止めて、又少し首をたれて歩いて行つた。それから、ゆつくり顏をあげて、彼女の體に寄り添ふやうにし、つゞいて立ち止まると彼女を抱きしめた。彼等の頭上はるかに、榎の大木が枝をひろげてゐる。

抱きしめてゐた良三は、せつかちに、だがそのせつかちを抑制した靜かな柔かい聲で彼女の耳元に囁かうとした。

——僕をこのまま、かうして放つて置くつもりなの。僕はもう堪らなくなつた。今夜こそ

は……

さう云ふ意味のことを言ふ積りなのである。

再會してからは、まだ二人は交渉をもつてゐなかつた。けい子が許すことを拒んだのである。「奥様があるのだから、その奥様に對しても、又、自分に對しても、それはできない。」彼女の考へはさう云ふのだつた。良三の彼女に對する「我儘」もそれを蹴破ることはできなかつた。自分：妻帝者だと云ふ負け目もあるが、そればかりではない。その言葉に表現されてゐやうな彼女の純粋さ一途さを、汚したくない氣持が心の底に動いてゐるからである。良三はそれぎり、一度も要求をしたことがなかつた。

良三は嘯かうとしたが、やはり、何んと云ふことなく、止す氣になつた。そして、少々心のこりさうに、體をはなした。

二人は榎の木の蔭から出て行つた。晩春の空氣は相變らず濃かつた。青草が道を狭めてる中を、いつものやうにぽつりぽつり話して行つた。良三は取れ切れない執拗な充實のために、ギクシャクした氣持だつた。あのとき、言つて了へばよかつたと幾度も後悔するのである。

蛙が遠くでしきりにないてゐるのがきこえる。

彼が默つて、けい子がひとりでぽつりつぽりと話してゐた。

話してゐる中に、氣がついたらしく、

「さうさう。」と言つた。「あなた、二三日前、奥さんと新宿の裏通りを歩いてたでせう。」

「新宿の裏通りを？　僕は妻君と外出することはないんだがな。」そして怪訝な表情をした。實際、かほるとつれ立つて出ると云ふことは滅多になかつたのだから。

けい子は、彼の顏をチラと見て微笑した。かくすの可笑しいわ、あたしこの目で見たんだから、とその微笑は言つてる。

「本當に、一緒に外出することは滅多にないんだから。」

けい子は彼の言葉なぞは相手にしないと云ふ風に、それには何も答へず、

「三越の裏から武藏野館の方へ歩いて行つた。さうね——三日前の十九日の六時頃。」

良三は、三越の裏から武藏野館の方へ、と言はれて思ひ出した。

「ああ、さうか。」と言つた。そして、滅多にないかほると歩いてるところを見られて、不幸だと言つた。自分の家庭生活とけい子との附合とを別々の世界にして置くことで、自分の氣持も又けい子の心も傷つくことから守らうとしてゐたのに、そして守りつゞけてきてゐたのに、途に

破れたことが殘念だつた。殊に、やさしいけい子の弱い心がどんなに傷ついたかと、それが胸にこたへた。

けれど、そのやうに思ふだけに、一層手早く、けい子の氣持をはぐらかして了はうと思つた。彼女の話し振りや顏の表情から推して、深刻に考へてゐる樣子でもないから、今の中に手際よくはぐらかすのには、大した面倒ではあるまい。良三はうまいことを言はうとして、先づ顏に屈托のなささうな笑ひを浮べかかつた。

すると、

「とても、樂しさうだつたわ。あなたも、奧さんも。あなたが笑ひかけながら、奧さんに話してらした。」とけい子が笑ひながら、併し終ひには自づとその笑ひが消えて行つた。少々固い表情になつたのである。

良三は、彼女には皮肉は言へぬ性だが、皮肉とも聞える言葉が、そして、大眞面目なら、それはそれで一層困る言葉が出たので、少々周章てて、

「樂しさうだなんて……」と早口に遮つた。實際、そんな筈はないのだ。道を歩きながら樂しさうに笑ひ合ふなぞとは、かほるとの場合、想像もつかない。又、そのときの情景を思ひ出し

たが、笑ひ合ふどころでなく、その日、ふたりの間に島渡したことから爭ひが出來、その爭ひの氣持を解くために珍しくも一緒に外出したのだが、こじれた氣持は少しもよくならず、反つて、一層ひどくなつた。ふたりはあの裏通りを(そんな氣持だつたから裏通りを選んだのだが)通つたときも、お互ひに離れ離れに歩いたのである。それが笑ひ合ひながら仲良ささうにけい子に見えたと云ふのは飛んでもないことのやうに考へられた。

「成程、一緒に歩いたことは事實だが、樂しさうだなんて、君の目はどうかしてる。」

すると、

「あなたが、奧さんをとても愛してるのがよく解つたわ。」言ひ終る頃には、どうしたのか、聲がかすかにふるへた。

けい子は、言ひ始めたときはそれほどでなかつたのに、言つてる中に、急に自分が淋しく悲しく、體をどう扱つてよいのか解らぬほど、堪らない氣持になつたのである。皆からだまされ退けられて、野原の中に一人投げ出されてるやうな、そして、さう云ふ自分が可哀さうで堪らなかつた。

實は、こんな氣持になるとは自分でも思ひがけなかつた。三日前に良三夫婦を見かけた日は

夜も眠れないほど苦しみ悲しんだ。併し、彼女一流の仕方で、心の中でそれを整理して落着いたのだ。落着いたからこそ、今日、いつもと變らぬ氣持で彼に會へたのだし、いや、先刻まで忘れてさへゐられた。

ところが、話してゐる中に、三日前のあのときの感情がまざまざと甦つてきたのである。自分でも、それが甦つてくるなぞとは、まるで豫期しないことだつた。言つてみれば。もう落着いたと安心してゐたのだ、安心があつたからこそ、何氣なく、あの話をし始めたのだ。

「あたしは、あのとき……」と思はず口に出たが、後は聲をのんだ。聲をのんだ代りに、涙が一度に湧き上がるやうに目に浮んで、危く流れ出しさうになつた。――あたしはあのとき、あなたが、遠く遠く、手のとどかぬところに行つて了つたやうな氣がした、いえ、全く別の世界の人間のやうに思へた。そして、一體、あたしはあなたにとつて、どう云ふ人間なのだらう。なんでもない人間、本當はなんの關係もない人間だつたのだと思つて、どんなに情なかつたか解らない。――さう言はうとしたのだつた。

實際、けい子は、あのとき、自分は良三からだまされてゐたのだとも考へたのだつた。

良三は、けい子の涙を見たので、益々どうしてよいのか解らなくなり、肩に手をかけて慰めようとした。だが、手が肩にふれる前に、すでにけい子は肩をはげしく二度三度ふつた。そして、その拍子に流れ出した涙をそのままに、彼の胸のあたりをじつと睨んでゐたが、

「もう、これでお別れしませう。」とやつと抑制した聲で言ひ、言ひ終るともうこらへきれずに顏を覆つた。

それから二人は、一ト月近く會はなかつた。

良三はその間、幾度となく思ひ出した。烈しい咽び泣きに、立つてゐることもできなくなつて體をずり下ろすやうに地の上にこごんで了ひ、そのままの形で肩ががたがたとふるへ動いてゐた有樣が目に浮んでくるのである。餘り突然のことでこの事態をどう收拾してよいのが解らず、ぼんやりして了つたが、ぼんやりした中でも、彼女のその姿がひどく哀れに見えることやこんな狀態を惹起するほどだからもう本當に永久に別れることになるのではないかとドキリとしたりしたことを思ひ出すのである。それと同時に、あのやうな發作を起すのでは、自分たちの結婚生活を諦めきつてゐるやうに見えながら、實は少しも諦めてゐるのではないのぢやないかと思つたことである。

六、ふたりの寫眞

ある日、二人は寫眞をとつた。

二週間の後、できあがつたのを見ると、脊廣姿の良三は眞直ぐに胸をそらして立つて、顏に微笑をうかべてゐる。じみな銘仙の單衣を着たけい子は顏だけは恥かしげに稍々うつむいて正面に向つてゐるが、肩から下の體が良三の方に心持斜に向いて、紫陽花の花を手にもつてゐる。

良三は撮るときに微笑した記憶はないのだが、うれしくなつてゐたので、自づと微笑が浮んだのであらう。女と微笑しながら撮るなぞとは嫌味で、彼も好きではないが、その寫眞にかぎつて、その微笑が氣にかからない。又少々猫脊の彼が胸をそらしてゐるのも、なんとなく子供つぽい愛嬌があつた。

良三はその日うれしかつたのだ。會へなかつた一ト月近くの間に、彼はけい子なしではゐら

れない自分になつてゐるのに氣付いた。淋しいとか、悲しいとか云ふよりも、もう會へないのかと思ふと體全體が少しも落着かない。少々誇張して言へば、力がなく失はれたやうにふらふらしてゐる。體がふらふらしてゐるのではなく、心が朦朧として體までがふらつくやうな感じになつて了つた。それが遂に彼女も折れてくれて、會へたのであつた。

けい子も折れて、とは云ふものの、會つてみて解つたことだが、彼女も會はずにはゐられなくなつてゐたのだ。その日までは、幾度通る道に待つてゐても、會へなかつたのは、けい子が時間を變へたり遠廻りに別の道に避けたりしたからであつて、その會へた日に時間も道も前と同じにしたと云ふのは、彼の待伏せを心に期待し始めたのに相違ないからである。

彼は會つて、いつもの野原に來たときに、立ちどまつて、

「會ひたかつた、本當に會ひたかつた。煙草をすつてもうまくなかつた。」と正直に言つた。彼は自分の感情を妻には勿論、誰にも言へない性であるが、このときは烈しい感動にとらへられてゐたせゐか、初めて彼女に正直に言へた。（これを、きつかけにして、良三は彼女にだけは、自分の氣持を正直に言へるやうになつたのだが。）煙草もうまくなかつたと言つたことは誇張のやうであるが、後で思ひ出してみて、矢張り誇張でないと考へられた。

すると、彼女は急に良三の胸に倒れかかつてきて、堰を切つたやうに泣き出したのであつた。

彼も泣きたくなつた。けれど、男である彼は泣くわけにはゆかぬので、我慢をしながら泣きつゞけてゐるけい子の肩をさすつてゐた。そして、それは、相當長い間つゞいた。

彼女は口では何も言はなかつた。どんなに會はずに苦しかつたかと云ふことを。けれど、何にも言はず、たゞ泣くだけだつたことは、反つてその苦しみの烈しさと美しさを良三に深く感じさせた。

「この前、三年振りで會つたとき、君は會はなけりやよかつたつて言つたね。今度はどう？」と戯談のやうに言つた。

けれど、彼女は、たゞ微笑だけして答へなかつた。「もう、そんなこと言はないわ。」とその微笑は無言の中に語つてゐた。

「今日、寫眞をとらう。」と彼は感動しながら言つたのも、そのときである。けい子は突然のことなので、びつくりし、それから「恥かしい。」と云ふことを言つた。けれど、直ぐ彼の意に從つたのは勿論であるが。

けい子が寫眞の中で、恥かしさうにうつむいてゐるのは、しかし寫眞をとられると云ふ事實が恥かしいからではなく、その日のうれしい心持を寫眞にのぞかれるやうな氣がしたからであらう。又、彼女は顏は正面を向いてゐるが、體は彼の方に稍々斜によじれてゐるのは意味深くそして可愛らしく良三には思へた。手にした紫陽花は、自家に活けようと思つて、その日會社の途中で花屋から買つて持つてゐたものである。彼は「丁度いゝ、それを持つて撮さう。」と言ひ、最初笑つてだけゐて承知しなかつたが、これも彼の強い求めに從つて持つたものであつた。良三は女に花をもたせて寫すことなぞは、やはり嫌味に思へるのだが、氣持の高揚してゐたその日の彼には、花を手にもつことが、美しく思へてたまらなかつたのだ。出來上つた寫眞については、少々氣にしたが、一目見て、それは成功だと解つた。他人から見たら、どうか解らぬとしても、少くとも彼の目には、さう思へた。そして、微笑を顏に浮べたがら、胸をそらして立つてゐる彼、ジミな銘仙の着物に、派手な紫陽花の花(寫眞では、逆にくすんで見える)をもつたけい子。この珍妙な寫眞は、年を經るに從つて益々二人には心樂しく思へてくるのだつた。

「撮つておいてよかつたね。」と時々ふたりは言ひ合つた。そして、良三は勤先のデスクの抽出

の中に、けい子は鍵のかゝる工場の脫衣室の抽出の中に藏ひ込んで置いた。誰にも見られぬためにである。

良三にはけい子の有難味が解り、こんなに喜んだほどだから、前とちがつた接し方をするかと云ふと、相變らずだつた。もう次に會つたときから、例の我儘一杯に振舞ひ、けい子の方もそれを自然のやうに受取つてゐた。

けれど、それは見かけだけで、實際には、變つてきてゐたのではないだらうか。彼女に自分の氣持をなんでも言つて了はずにはゐられないのは、あの事件前からさうではあつたが、それが一層も二層も深まつて行つた。どんなことでも自分一人の胸の中にもつてゐると、自分が腐つて行く、それに反して、彼女と一緒の苦しみ、一緒のよろこびになると、苦しみでもたゞ苦しみの中に腐らずに、その中から自分が生き返つてくるものを感じるし、喜びの場合には、その喜びが身についたものになり、更に明るく堅實に擴がつて行くのだつた。

殊に、その事件から三月ほど後に、妻のかほるが腹膜を患つてあの世の人となり、それから暫らくして自然とふたりの關係が肉體的なものにまで進んでからは、一層それが深まつた。

良三の我儘は相變らずだと云ふ風に述べたけれど　實際には「我儘」と云ふものではない。

けい子とは一つの體なのだ。目の前の茶がのみたいときには手に命じてそれをとらせるだらうし、歩きたいときには足に命じて歩かせるだらうし、それに對して、手や足は不平も批判さへも抱きはしないのと同じことである。又、彼の「我儘」には自づと限度があつた。茶碗が熱し切つてゐるときには、それを直ちに持つことから手を庇つてやり、足が痛んでゐるときには歩くことを命じないと同じことである。勿論、足が痛んでゐようが、茶碗が熱し切つてゐようが　それをやらせる場合もあつたけれど。それは喉が乾き切つてゐるときや、どうしても歩かねばならぬときには。

その頃、良三は大日本佛教全書を研究してゐた。讀んでゐる中に、日本書紀その他の國史大系も併讀する必要を感じたので、それにも手をつけてゐた。

尤も、大日本佛教全書は大學の卒業論文を書くときに、指導教授の注意によつて、直接論文構成に必要な部分を讀んだり引用したりしたことがあるので、初めてと云ふのではなかつた。併し、それは、飽くまで、注意されたので讀み、必要な部分をそれから拜借したと云ふに止まつてゐる。前述したやうに、「天平彫刻の形式について」と云ふ卒業論文を書くについて少々調

べたときには、今まで思ひもかけなかつたやうな情熱が湧いたけれど、今になつて考へてみれば、極めて底の淺いものであつた、その證據には論文を書き上げると同時ぐらゐに、冷えて了つたのだから。ましてや、參考に用ひた佛教全書は頭の中から煙のやうにきれいに消えた。

良三は今までも、たゞ毎日勤先に通ふだけで能事足れりとしてゐたわけではない。書棚の中に、一冊二冊と外國の美術書を取りよせてならべたり、時々それを讀んだり時には取憑かれたやうな讀み方をしたりした。けれど、結局、何もしてゐなかつたと同じである。それには一つの系統もなく、情熱の繼續もなかつたのだから、いや、むしろ、ひどく怠惰でだらしのない投げやりな生活として來たと言つて過言ではないのだ。

ところが、ある日のあるとき、良三は勤先の書庫の書棚の前に立つてゐた。胸のところで部厚い佛教全書の一冊をもつて、じつと讀んだり頁をひるがへしたり又別の一二冊を取り出して同じやうなことをして、ものの二十分ほどもさうしてゐた。

良三はこのとき、この本を熟讀する必要を感じたのである。けれど、このとき初めて必要を感じたのではなく、必要を感じるやうなものが、最近彼の心の底に流れ始めてゐたからであら

う。それは、彼の頭にあるものを、その本の中に發見し、その本によつて檢討し、更に擴大闡明しようとするにあつた。

それから、四五日經つて、けい子に會ひ、歩いてゐると、彼女が自分の顏を見たやうなので良三も顏を向けた。けい子は微笑をふくんだ目をしてゐるのである。「何か、うれしいことがありさうね。」とその目は言つてゐる。

良三も思はず微笑になりながら、輕く肯いた。「解つたかね、君の御推察の通りだ。」と云つた肯きである。それと共に矢張り、彼女には解るのだなと一種の感動を覺えた。けい子に今度のことをかくして置くつもりはなかつたが、直ぐ言はないで置いてみたのだ。それにはこんなわけがあつた。ある日、急に彼女に會つてみたくなつて、約束はしてなかつたが、例のバスの停留所で待つてゐた。彼女の信じきつてる「虫の知らせ」で會へるだらうと思つたからである。ところが、三十分經ち一時間近くなつても、そして遂に會へなかつた。「虫の知らせ」もあてにならぬ、良三はさう思つたので、今日は彼女の「感」をためす意味もあつてだまつてゐたのだつた。

「君の『虫の知らせ』もあてにならないのだがね。」と良三はにやにやしながら言つた

「なんのことなんです。」けい子はいつもの靜かな聲で、彼が何を意味してるのか解らぬと云つた表情をした。

丁度、そこへ、自轉車がよろけるやうに來たので、ふたりは自分たちの體を庇ふやうにして默つた。

自轉車が行つて了ふと、良三は

「自分の仕事ができさうなんだ。初めてやる氣が起つたし、初めてその仕事がみつかつたんだ。」とうつむいて眞面目な顏で言つた。

けい子は、いつもとちがふ、今まで見たことのない顏だと思つた。けい子はそのよろこびの性質が解る筈もない。けれど、その表情から「よかつた。」と深く感じた。良三が顏をあげると、さう云ふ感動のうかんでる目をした彼女と視線が會つた。

彼は自分の體の中に氣力が涌き上つてくるのを感じた。

「今度は、やるよ。」

「うれしいわ。」彼女は初めて言つた。

良三はそのつゝましい低い聲を聞くと、一層元氣がでてきた。自分のしようとしてゐること

が本物で、間違ひがないと云ふ氣が烈しくした。

なんと云ふことなく、けい子をかたくかたく抱きしめたくなつた。けれど、それは止した。

彼は四五日前の書庫での出來事を物語つた。いや、その出來事の前後の自分の心の中を話したのである。

「それにしても、不思議だよ、前に話したことがあつたと思ふけど、(實際は、一度も話したことがなかつた)僕の卒業論文の、『天平彫刻の形式について』つて云ふのだね、奈良時代の一時期である天平時代の佛像を取扱つたものだが、それと關聯があるのだ。卒業論文を書くときには、何もあれと限つたことぢやなく、言はば偶然になんとなくあの題目をえらんだに過ぎないが、若しそれをしてなかつたら、今度の研究を思ひつかなかつたと思ふよ。研究の思ひつきなんて面白いものだと思ふな。」

良三は美術研究史のある論文を讀んでゐる中に、その研究方法に杜撰なものを感じた。それは、天平時代に關したものではなかつたが、杜撰さの共通で、ふと自分の卒業論文を思ひ浮かばせる機緣になつた。そして、この不愉快な印象は二三日なんとなく彼の心の中にただよつてゐたが、それが偶然、書庫の中で大日本佛教全書を取上げたとき、その杜撰さ——他人の論

文のではなく、自分の卒業論文の杜撰さの正體を突きとめる方法を思ひ當つたのだつた。いや、そればかりではなかつた、二三ヶ所を讀んだり、頁をパラパラめくつたりしてゐる中に、自分の論文の杜撰さの正體をつきとめるなぞと云ふことは乘越えて、本格的な研究を思ひ立つたのだ。文献を新しく徹底的に究明することによつて、天平藝術に對する新しく深い認識を得ようと云ふのである。文献による考證研究である。そして、そこから、新しい發見をなしとげられさうな豫感すらうけたのだつた。

良三がそれを話すと、けい子は默つて肯いてゐた。果して、どの程度に理解してくれたのかと疑ふ氣持もないわけではなかつたが、彼は話してゐる中に何か滿足し、そして、益々元氣の出てくるのを感じた。

「同じ機嫌が良いのでも、今日のはいつもとちがふやうな氣がしましたわ。」とけい子は笑ひながら言つた。

「いつもとちがふ？　どんなやうに？　初めつから、ちがふと解つてゐた？」

「どんなやうにつて——」と困つたやうに鳥渡首をかしげるやうにしてから、「よく言へないけど、ちがふのよ。お仕事のことを言ふときは、いつもとちがふの。」

「仕事つて？」彼は自分の專攻の美術史に關することだけを仕事と言ふくせがあるが、けい子の仕事と云ふ言葉は、何にを指してるのかと思つたのだ。

「あなたの御研究のこと。」

ああ、矢張りさうかと良三は思つた。

「けれど、前に言つたことがあるかい。仕事のことを言ふときは、いつもと違ふつて君は言ふけど、今度が初めてだらう。」

けい子は鳥渡笑ひながら、下をむいて默つた。

「ないだらう。解るわけはないぢやないか。」

「ある。」と短かく言つた。それから、「大學の同級の人の論文が雜誌にのつたとか仰言つてたとき……」と附加へた。

ああ、さうか、成程、自分の專攻に關係したことだ。併し、それは機嫌がいいのぢやなく、その反對だつたぢやないかと思つた。

「どうかしてるね、君は。あのときは、僕不機嫌だつたんぢやないか。」

「えゝ。不機嫌だつた、同じ不機嫌でも、他のこととはちがつた不機嫌だつたんです。」

良三は、それきり暫らく默つてゐた。考へてゐる風だつた。

ある日、良三は例の寫眞の臺紙の裏に、

足引の山のしづくに妹まつと吾たちぬれぬ山のしづくに

と書いた。

山かげで、したたる木の葉のしづくにぬれそぼりながら長い間お前を待つてゐた心持はどんなだつたらう、どんなに戀ひこがれてゐたらうと云ふ意味を簡單にけい子に說明してやつた。

彼女は感動したらしい。默つてその文字を見詰めてゐたが、二度三度讀んでゐる樣子だつた。

最後に、

「うつくしい。」と低い聲で言つて、彼を見上げた。良三はその瞬間のけい子の顏が淸らかに美しく印象付けられた。